

— 目次 —

まえがき	石原 邦雄	1
第1部 震災ボランティア体験を考える		
I 聴きとり対象者と神戸での活動・生活の概要	高杉 彰子・後藤 浩二	5
II 学生のボランティアイメージの考察 ～震災ボランティアへのインタビューを通して～	高杉 彰子	11
III ボランティアの側の「癒し」について ～「援助者」が抱え込む問題～	後藤 浩二	21
IV ボランティア団体内部の疲労とその対処 ～団体内部の人間関係に着目して～	村瀬 千晶	31
第2部 震災ボランティア体験を語る・聴く		
I 国際ボランティアとともに ー小田さんの場合ー		45
II 張りつめた生活と 消耗するボランティア ー藤井さんの場合ー		64
III 未来へつなぐ土台づくり ー小嶋さんの場合ー		78
第3部 震災ボランティアの1年後の思い		105
1. 藤井さん 2. 梅沢さん 3. 飯野さん 4. 小嶋さん 5. 高橋さん 6. 中島くん		
あしがきにかえて		
～本書の作成過程と担当教員のかかわり～	石原 邦雄	117

— 本書作成の参加者・協力者氏名 —

・執筆および編集担当者

石原 邦雄	(社会福祉学科 教授)
村瀬 千晶	(同上 4年)
高杉 彰子	(同上 4年)
後藤 浩二	(同上 3年)

・震災ボランティア体験者 (聴きとり対象者および手記寄稿者)

尾立 素子	(社会福祉学科 5年)	林 美奈子	(同上 4年)
入間田浩子	(同上 4年)	村瀬 千晶	(同上 4年)
川崎 博子	(同上 4年)	丑田 尚子	(同上 3年)
高杉 彰子	(同上 4年)	森 真弓	(同上 3年)
登坂いずみ	(同上 4年)	中井 聡	(同上 2年)

・聴きとり調査者 (レポート提供者)

小野裕紀子	(社会福祉学科 4年)	茂木 志穂	(同上 3年)
高杉 彰子 ※	(同上 4年)	森 真弓	(同上 3年)
二階堂 京子	(同上 4年)	酒井 美和	(同上 2年)
三浦 紀秋	(哲学科 4年)	坂本 淳子 ※	(同上 2年)
丑田 尚子 ※	(社会福祉学科 3年)	品川 幸子	(同上 2年)
後藤 浩二	(同上 3年)	出口 敦子	(同上 2年)
金野 志保	(同上 3年)	中井 聡 ※	(同上 2年)
高久 陽子	(同上 3年)	丸木 美保	(同上 2年)
深谷 亜衣 ※	(同上 3年)	城之内瑞恵子	(同上 聴講生)
南 愛子	(同上 3年)		

※印は、テープ起こし協力者

まえがき

1995年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災は、70年前の関東大震災に次ぐ都市型の大災害となり、6000人以上もの人命が失われ、おびただしい人々の生活基盤を突き崩す結果をもたらした。それはまた第2次大戦後50年で築かれた日本の繁栄の脆さが露呈されたという意味で、国民全体にも衝撃を与えた出来事であった。危機的な状況にあって、政治や行政の対応が十分機能し得ないなかで、ある種の驚きと期待を込めて注目されたのが支援のボランティア活動に参加した人々の動きであった。その多くが学生を中心にした若者たちであったことが、とりわけそうした受けとめ方をきわだたせたと思われる。他方で、災害研究でいう「過集中」現象の典型的な現れとして、受け皿が整わないところへボランティア志願者が殺到したために、「ボランティア難民」などといわれるような状態も生じ、否定的な評価を受けた場合もあったのである。

東京都立大学の社会福祉学科の学生も2・3年生を中心に10名余りが参加した。学生定数の少ない当学科としては3・4人にひとりの割合になるから、かなりの数といってよい。私としては、そうした学生の何人かから話を聞くにつけ、ボランティア元年などとも表現された大きなうねりに飛び込んで行った彼らの体験は、じつに貴重なものであると感じていた。そして、そうした経験を、学生自身の手でまとめられないものかと思ったのである。成立経過は、「あとがき」にやや詳しく述べてあるが、本書は、95年の前期に私が担当した社会福祉調査論で、聴き取り調査の方法を学ぶ課題として、受講生たちが震災ボランティアの経験者に対してインタビューし、それにもとづいて提出した作業レポートを素材として、同年後期の社会福祉学演習Ⅱの参加者である、高杉彰子、後藤浩二、村瀬千晶の3君とともに取りまとめたものである。

被災地でのボランティア活動に参加した彼女・彼ら自身は、その体験をどのように受けとめているだろうか。また、参加しなかった学生たちは、どのように感じているのか、参加者の経験が、参加しなかった者にはどのように伝えられるだろうか。さらには、体験を伝えようとするのが、自らの経験を再確認し、対象化する機会になり得るのではないか。そして、そうした諸側面を、聴き取りという調査手法と、そこで得られた資料によって、どこまで捉え直すことができるだろうか。これらは、社会調査の基本にもかかわる問題といえる。そうした課題がどれほど達せられたかは、読者の判断に委ねられるべきものである。しかし少なくとも本書が、最終的な取りまとめをした3名の学生諸君のねばり強い努力の成果であるということ、それだけではなく、前記の社会福祉調査論の受講生たちのレポート作成までの努力と、インタビューに応じてくれたボランティア経験者たちの協力の上になり立ったものであることは銘記しておきたい。

ところで、こうした事例的な経験の聴き取りによるまとめは、対象者の限定性など、さまざまな意味での偏りをまぬがれるものではない。本書で取り上げた都立大の社会福祉学科の学生たちの震災ボランティアは、女子学生に限られているし、参加期間も比較的短い。

関西の福祉系大学の学生たちにみられたように、自らの組織的な活動を組み立てていったわけではなく、またリーダー的な位置に立って活動した者も含まれていない。他方、社会福祉を専攻する学生として、ある程度援助的活動ということに理解を持っており、どの学生もそれ以前に何らかのボランティア活動の経験を持っていたということは、今回の災害ボランティアの若者たちの大多数が、それまでボランティア経験を持っていなかったといわれる中では、「平均的」な位置にいたともいいきれないことに留意することは必要だろう。

そうした限定付きであるにせよ、学生たちの今回の体験を記録に残し、その意味を問い直してみることは、意義のあることと信じる。学生たちの個別的な体験は、それを受け止めた他の学生たちの感じ方とともに、災害ボランティアの組織化の問題、さらには広くボランティア活動一般にも通じる問題を含んでいると考える。今回の大災害から多くのものを学び、長く続けられねばならない被災者の生活再建支援や今後の対策に生かしていくためにも、困難を抱えた多くの被災者の方々をはじめ、さまざまな位置でかかわりを持った人々の体験と意見が記録化されることが望まれるし、また統計的な形での調査も積み重ねられる必要性も大きい。本書をまとめた私たちのささやかな努力も、そうした幅広い実践的、教育・研究的な試みのひとつとして受け取っていただければ幸いである。

1996年3月

石原邦雄

付記： なお、本書で資料としてあつかったインタビューおよびそれにもとづく課題レポート、さらに1年後の手記については、該当者の名前をすべて仮名に変えてある。いわゆるプライバシー保護の意味ばかりでなく、学科内の学生同士で相互に、また場合によって自分自身をも、対象化することのしやすさのためでもある。

I 聴きとり対象者と神戸での活動と生活の概要

1. 調査対象者=ボランティア体験者について

それぞれの分析に入る前に、ボランティアに参加した学生たちの基礎的情報を見てみる。

図1-参加時期・期間 では、ボランティア参加した時期の早い人から順に並んでいる。表1-対象者リスト では、現地入りした順で、震災ボランティア以前のボランティア経験の有無、参加期間、参加につながる情報を得たところ（参加経路）、実際に活動するさいに所属していた団体（参加団体）、活動地域と活動内容について簡単にまとめている。

今回インタビューに答えてくれたのはいずれも社会福祉学科の学生である。偶然なのかも知れないが、表1のリストからも分かるように全員がなんらかのボランティア経験もっている。1995年3月の朝日新聞の調査（700人対象の意識調査）では、ボランティアに参加したのが「初めて」というのが7割に及ぶという結果が出ている。これと単純に比較するには、ケース的に少なすぎるが、社会福祉を学んでいることとボランティアへの関心については、なんらかの相関はあるのかもしれない。

また、リストには参加の動機をのせていない。これは、それぞれの理由はかなり多様で複雑であるので、一言でまとめるには無理があると思われたからである。しかし、動機については、ボランティアについて考えるうえで欠かせない問題なので、このあとの分析のなかで触れていくことにしたい。

参加団体については、比較的既存のもので、以前から地域の中での活動をしていたところや、震災を機にできた団体など、これも様々である。具体的な活動内容では、「救援物資の仕分け」「炊出し」「訪問」「話し相手・遊び相手」などが比較的共通している。先にも述べたが、参加時期・地域・団体などによっても違いはあるだろう。

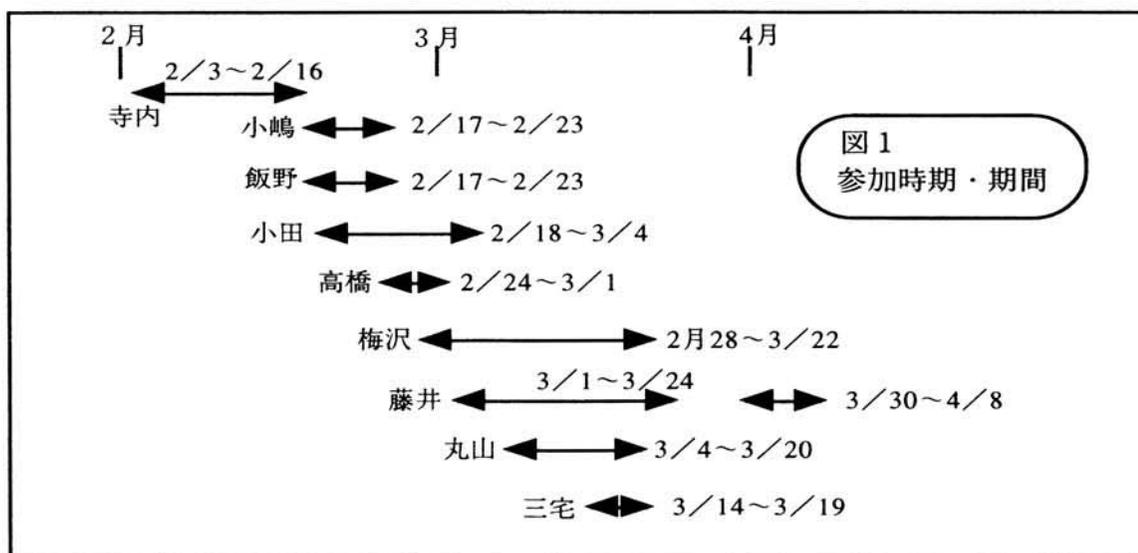


表1 聴きとり対象者と参加活動の概要

対象者	ボランティア経験	参加期間	参加経路 (情報を得た所)	参加団体 [活動地域]	活動内容	調査者
寺内	自閉症・ダウン症児(者)キャンプ／老人給食	2/3～2/16	YWCA	神戸YWCA (建物) [主に東灘区、中央区]	物資の配給所での作業／外周り(リサーチ)	中野三井
小嶋	重度心身障害者の介助	2/17～2/23	日本てんかん協会	(2/17～) 日本てんかん協会／全国VYS協議会 [中央区] (2/20～) 応援する市民の会 [東灘区]	子供対象の調査「訪問お手伝い隊」	栗坂内田
飯野	身体障害者の生活援助 作業所など	2/17～2/23	日本てんかん協会	(2/17～) 日本てんかん協会／全国VYS協議会 [中央区] (2/20～) 応援する市民の会 [東灘区]	ポスター貼り／ビラ貼り／訪問／片付け	佐々井兼成
小田	障害者の子供とのハイキング／痴呆老人対策のデイケア／海外協力NGO	2/18～3/4	新聞の募集 広告	日本国際飢餓対策機構 [芦屋、東灘区]	物資分配／炊き出し／外国人ボランティアの通訳／物品の取り出し	中島沢井寺内
高橋	重度心身障害者の介助	2/24～3/1	大阪アジア協会	ちびくろ救援グループ [兵庫区]	炊き出し 高齢者世帯の訪問 物資援助	杉浦小西
梅沢	障害者の生活サポート (ヒューマンケア協会)	2/28～3/22	ヒューマンケア協会の派遣	ヒューマンケア協会 [長田区]	在宅障害者の介助／引っ越し／瓦礫のかたづけ／事務的仕事／訪問	松本折笠
藤井	かたつむりの会で家事援助	3/1～3/24 3/30～4/8	知り合いを通して聞いた	(3/1～3/15) 被災地障害者センター [兵庫区] (3/6～) 長田ボランティアルーム [長田区]	安否確認／話し相手(高齢者)／ごみ拾い／救援物資の管理	梅沢三宅
丸山	キャンプに小学生を連れていく。	3/4～3/20 (3/10～3/14除く)	リスポンス協会	神戸元気村 (テント) [東灘区]	本部での電話取次／事務／地域訪問(物資配給)／調査隊	汐見藤原
三宅	障害者によるコンサートの会場でのベビーシッター	3/14～3/19	日本てんかん協会	日本てんかん協会(社会福祉センターに泊る)巡回子供センター [中央区]	ビラ配り／ポスター貼り／子供立ちと遊ぶ／事務的仕事	岩城伊藤

2. ボランティアの生活

ボランティアに行き、一体どんな生活をしていたのだろうか。食べ物？ 寝る場所は？ 毎日何をしていたのか？ などなど聞き手の興味は尽きない。テレビの映像、新聞などの写真では、なかなか個人としてのボランティアの生活は見えてこなかった。今回のインタビューで、少しは“未知の世界”を垣間見ることはできるだろうか。ここでは4人のケースから、現地での生活を振り返ってみる。小田さん、藤井さんは逐語記録で、寺内さん、三宅さんについては受講者のレポートをもとにしてまとめた。

(1) 小田さんの場合

[泊まる場所・食事について]

中島：泊まるのは、教会で泊めてもらったんですか。

小田：うん

寺内：食事とかはどうしてましたか。

小田：日本国際飢餓機構から一応お金は出たんですよ。それで野菜とかが来たんでそれで料理して。・・・あとは避難所からも少し。

[活動内容]

小田：・・・私が加わったのは、復興チームで、大工仕事のほうだったんです。その復興チームが活動していたのが、西宮と、芦屋と東灘だったんですよ。・・・芦屋コミュニティチャペルという教会があったんだけど、そこの教会で、東京とかから送ってくる物資、救助物資、それを分配したりとか。・・・芦屋に1週間いたときは、炊出しというのを中心にやっていた。で、2週目3週目は、東灘区に移ったんです。・・・崩れた家から、ものを取り出すんですよ・・・東灘区に行って、外国人と一緒にやるようになって、その中で、アメリカ人とカナダ人の大工とかペンキ屋、いわゆる家の構造に詳しい人達を中心になるんですけど、たまにその人のすぐ後ろについて、通訳しながらやる・・・崩れた家に、木をどかして入って行って、家の人は外で見てて、例えば、

「貯金通帳を取って欲しい、僕の部屋2階だったんだけど、その左側にある押入に入っていたから、それを取って欲しい」と行っても分からないでしょ。落ち方が違うんだから（地震でどこに何があったか分からないほどの崩れ落ち方をしていたところも多かった）。その辺をどうにか（通訳して）説明して、じゃあきつとこの辺だねって言って、一緒に入って行って、一応通訳必要だから、（小田さんも一緒に）ほこりだらけの中に入って行くんですよ。で、のどは駄目になったりしたんだけど、それで活動ですよ。どうにか本人が、被災者の人が希望するものを取り出す。

*コメント

小田さんは2月の2週目から活動を始めた。当時は被災者用に送られてくる物資の

野菜も、避難所でそれぞれが調理して食べるのは現実的には難しかった。狭いスペースで火を使うのは危険だし、またそのための調理器具とかももっていない人も多い。温かい炊出しに人々が集まって来るのは容易に想像できる。また物資配給についてはできるだけ多くの人に、平等にいきわたるようにするために気を配ることもボランティアの役目である。倒壊した家からものを取り出すというのは危険と緊張を伴う作業であったことだろう。外国人ボランティアと被災者（住人）の間に立って戸惑うこともあったのではないだろうか。

(2) 藤井さんの場合

[食事について]

三宅：食事とかはどうしていたんですか。

藤井：食事は、兵庫区の被災地障害者センターのほうでは、朝、当番はそこで出してもらおう。晩御飯は交代で作っていて、お昼は自分で。長田区では、区役所内にボランティアルームがあるから、配給のお弁当のあまりがもらえて、それを食べるか、自分で買うか。

[寝るところについて]

三宅：じゃあ最初のときはそのセンター（被災地障害者センター）のなかに泊まって？

藤井：普段は、作業所っていうか授産施設なのかな・・・に使っているところをボランティア用に解放してもらって、泊まって。それで長田区のほうでは、公園にテントをはって。

三宅：公園で。すごい。じゃあ、テントの中で寝袋とかで・・・

藤井：寝袋と段ボール。

*コメント

藤井さんが行った3月の初めの頃、店などは開いていた。活動を続けるうえで食事と寝るところを確保するというのは最低限の条件である。日中はめいっぱい活動し、夜はテントで寝袋にもぐり込む。春といってもまだまだ寒い。風呂に入るのも何日かに一度。食べるものも次第に偏って来るだろう。被災者にとっても、ボランティアにとってもやはり苛酷な生活である。こうした状況で過ごしたボランティアはどのようなストレスとか問題を抱えていたのだろうか。後の分析で触れることにする。

(3) 寺内さんの場合（中野レポートより）

「ボランティアの生活は朝の早いうちから始まる。ボランティアは寝袋で、物資の配給

所に寝ているのだが、6時30分頃には配給所に来る人がいる。8時30分に配給所が開始されるので、それまでに（ボランティア達は）届いた物資の仕分けや掃除をする。

（自転車での訪問活動担当の人は）午前中は主に物資の配給をしたり、午後の外回り（訪問活動）の打ち合せをする。・・・外回りは2～3人で1グループを作り、4グループ位で行う。18時までに帰るよう心がけるが、真っ暗になってから帰ることもあるという。公園のテントや、避難所、高齢者のところなどを（1グループにつき）5～6ヶ所位回る。20時に配給所を閉め、22時、23時までミーティングをする。」

*コメント

配給所での1日はかなり慌ただしい。ここで見ただけでも半日以上は活動していることになる。並んで待っている人達にできるだけ必要なものを渡したいのに、配給所では数、量共に限られている。みんなにうまくいきわたらなくて、ボランティアが謝っている姿も見られた。また、続々と届く物資の整理に追われて、1日中倉庫で働くボランティアもいた。被災者と直接触れ合うのがボランティアの花形のようにとらえられた面もある。しかし、ボランティアの食事づくり専門の係をずっとやっていた人もいる。物資の整理や内部での事務的な仕事などなど、目立たないところでいろいろ重要な役割を果たしていたボランティアも欠かせない存在なのだ。

(4) 三宅さんの場合（伊藤レポートより）

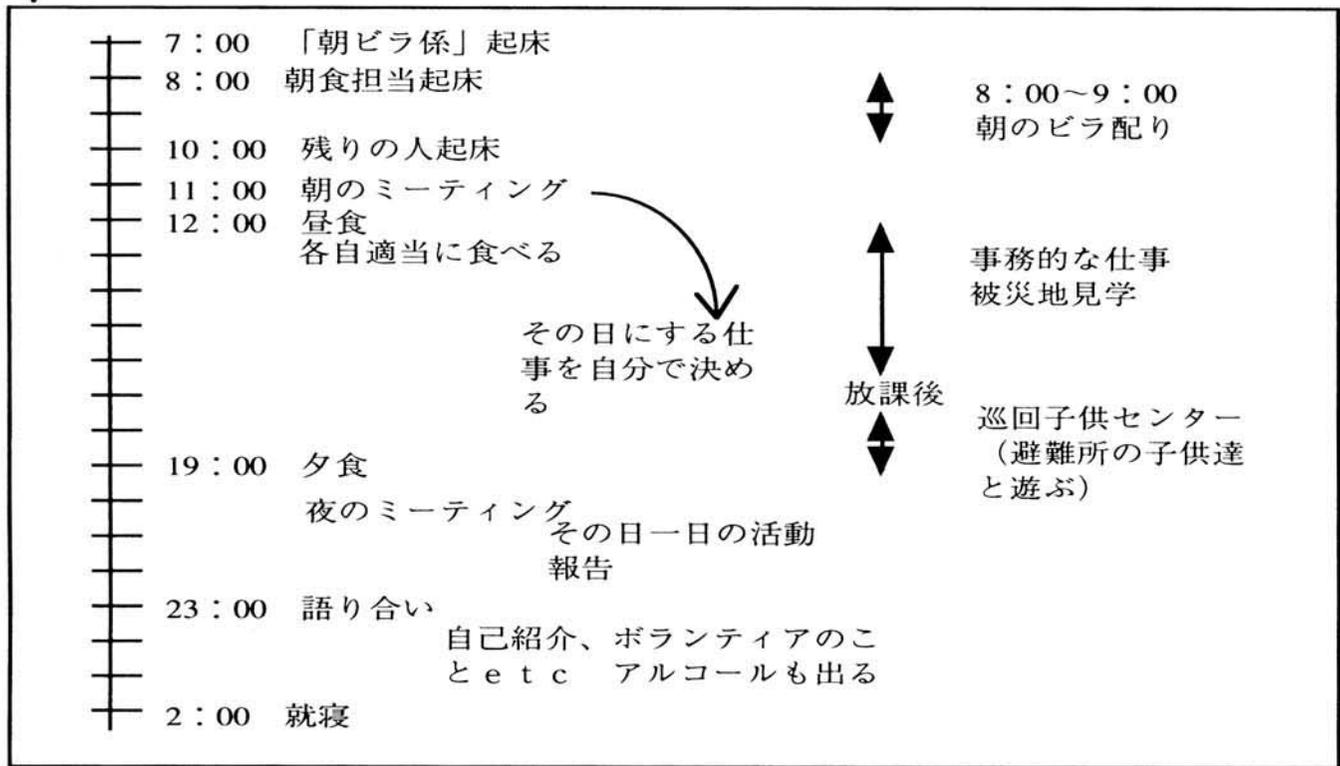
[食事について]

- ・当番制――1食500円を出し、それで当番が食材を買ってきて皆の分の食事を作る。
食事内容は、カレー・シチュー・肉じゃが・刺身など。
- ・外食――店はもう普通に営業していたので、ファミリーレストランに入って食事をしたり、コンビニエンスストアで食事を買って、寝泊まりしている施設の部屋で食べたりした。
- ・その他――全国各地からの援助物資の果物やお菓子なども食べた。

[入浴について]

近くの銭湯で、二日に一回風呂に入る。お風呂賞というものもある。これは勤続四日以上働いた人に与えられる賞。幸せの村（老人福祉施設、障害者施設が集まっているところ）の温泉に無料で連れていってもらえる。

図2 ある日のスケジュール（三宅さんの場合）



*コメント

当番制での食事作りはなかなか興味深い。当番は何人で、そして何人分の食事を作っていたのだろうか。

三宅さんは、ボランティア生活を比較的楽しんできたケースに入る。ボランティアに集まった人達は、同じような物を食べ、一緒に働き、風呂に入り、語り合う生活を通して連帯感を強めていくのだろうか？ しかし誰もがこうした生活を楽しんでいるわけではないだろう。活動期間が長くなるにつれて、また、様々な理由から、疲れや悩みを抱える人も出てくる。

<高杉 彰子・後藤 浩二>

II 学生のボランティアイメージの考察

～震災ボランティアへのインタビューを通して～

<はじめに>

多くの人びとの生活を、人生を、根本から揺さぶり変えてしまった阪神・淡路大震災から1年が経つ。都立大からも、全国からも大勢のボランティアが被災地に赴いた。また、実際に被災地での活動に参加できなくても、さまざまなかたちで被災地の人びとを救おうと働いた人はもっと多くいる。そうしたそれぞれの貴重な体験が、単に個人の経験にとどまってしまうことは惜しいことだと思っていた。

幸い、授業（社会福祉調査論）の一環で都立大の学生10人の震災ボランティア体験のインタビューが10グループに分かれて行われ、受講者から計18のレポートが提出された。受講者のなかには、震災ボランティアにも参加した人、他のボランティア活動（障害児・者、高齢者、外国人対象など）に関わったことのある人や現在も活動している人、まだボランティア活動には参加したことがない人などいろいろである。

私自身も2月の2週間と8月に2日間、ボランティア活動に参加し、調査論の授業ではインタビューをする側（受講者として）とされる側（体験者として）両方になった。そしてこうしてまとめの作業にも関わろうとしている。ここまでの過程を通しての私の関心は、学生がそれぞれボランティアについてどのようなイメージをもっているかということであった。またそれぞれが抱いているイメージが体験者と未体験者の間で違いはあるか。震災ボランティアを体験したことでイメージは変化したか。インタビューを通して受講者側のイメージは変化したか。あるいはもともとのイメージがさらに強いものとして残ったか。そしてインタビューのなかでボランティア参加者と未経験者の間でイメージをどのように共有できるのか・・・

これらの問題意識に基づいて、分析をすすめるにあたりインタビューの逐語記録やレポートなどの素材を大切にしてみたい。その理由は、できるだけ学生の“生（なま）の声”に表れた、ボランティア活動やボランティアに対するイメージをつかみたいと思ったからである。なかでも特に、ボランティアに行き自分なりの経験とイメージをもちながら、受講者としてもインタビューに臨んだ4人の学生と、ボランティアには行っていないが自分なりのイメージをもちながらインタビューをした学生と、両者はいったいどのような土俵で語り合っているのかをみるために、こうした素材は有効な役割を果たしてくれるだろう。

1. 各レポートから

まず始めに、かなり乱暴ではあるが、インタビュー後の18人のレポートから、感想なりボランティアイメージなるものを簡単に列挙してみる。(順不同)

- * ボランティアをしたことも、ボランティアについて考えたこともなかったが、インタビューを機に自分なりに考えてみようと思った。[汐見さん]
- * 若者が自分勝手の「輝き」を手に入れるためにボランティアを行うことは、学ぶところの少ない貧弱なもの。[佐々井さん]
- * 現地でボランティア全体が被災者の役に立ったとは言い難いが、行ける条件があるなら、若者は迷わず行くべきだ。[内田さん]
- * “偽善的” “してあげる” [三井さん]
- * 一種の自己満足、偽善的行為。ボランティア自身本音とたてまえがある。[兼成さん]
- * 自己満足には済まされないもの。専門家の援助に結び付けることのできるという点では「普通の人」のボランティアに意味はある。[寺内さん]
- * 震災ボランティアは、行きさえすればいいという「善意の表明」とは違うが、教育効果、将来に対しての保険効果もあった。[中野さん]
- * 「満足感」を得るためのもの。公共の(行政)の足りない部分を補う役割をもっている。[松本さん]
- * ボランティア自身が役割認識をすることが必要。[小西さん]
- * 震災ボランティアの今後の課題は、普段の生活における自らの社会的役割・位置を自覚すること。[藤原さん]
- * 被災者への自立への援助をどこまで行うかが焦点。震災ボランティアは何をすべきか被災者と共に考えることが大切。[杉浦さん]
- * ボランティア自身も自分が楽しむ部分と継続性が必要。[伊藤さん]
- * ボランティアは「楽しみながらするもの」と思っていたが、「必死に」頑張っ活動したボランティアもいたことを知り、それぞれの経験の違いを思った。[三宅さん]
- * ボランティア活動を可能にするのは「やる気(意欲)」や「助け合いの精神(正義感)」だけではなく、その人のおかれた立場・環境などの外的要因も大きく影響。
[梅沢さん]
- * 災害ボランティアは真の地域福祉にはなっていない。単なる援助でなくお互いにお互いの生活を良くしていける関係になるのが理想的。[岩城さん]
- * ボランティア経験での出会いが、その人の人間観や価値観を広げる。[中島さん]
- * 震災ボランティアと、日頃簡単に手をつけられるようなボランティア活動とは、内容の明確化という点で違っている。[栗坂さん]
- * ボランティアにしかできない活動はたくさんある。阪神大震災の救助活動を通じて、

国がやらなければならない活動とボランティアが補う活動は区別化された。〔折笠さん〕

調査者のなかには、無関心からインタビューによって関心をもつように変化した人もいる。ボランティア個人に対する感想や個人の問題意識・価値観による心理的側面のイメージを語っている人もいる。また、実際の活動が何の役に立ったか、などのような機能的側面でのイメージもある。インタビュー前にはボランティアに対して、否定的ではないにせよやや批判的な思いでいた人が、肯定する部分を見いだしたり、逆に批判的なイメージを強めたケースもあった。

各インタビューで、レポートで、共通してでてくるキーワードがいくつかあった。今回は

「偽善」「犠牲」「自己満足」という3つのネガティブなイメージを想像させる言葉を選んだ。こうしたイメージが生じるのはなぜか、3つの言葉に関連性はあるのか、などについて考えてみたい。ボランティアとして活動してきた立場から、私自身はネガティブイメージにどのように対応していけば良いのか。そして最終的に理想とするボランティア像へ到達するには、どのような共通理解が必要なのかを考察していきたい。

2. ボランティアは「偽善」か

調査者は、インタビュー前にどのような質問をするかと考えるが、それは自分の関心・興味・疑問がもとになる。共通する質問は、ボランティア参加の動機・きっかけである。しかしその背景には、調査者自身が抱くイメージと体験者のイメージを共有できるかどうかを確かめたいという意図もあるように思える。ここでは3つのレポートを例に出してみる。

<三井レポート>

――ボランティアを評価する言葉に「偽善的」という言葉がある。私の周りにはそのように言う人はあまり見かけないが、そういうふうに言われているというようなことがあることは何となく私の頭にいつも入っていた。ボランティアが偽善的と言われることの真偽はよく分からない。何を根拠に偽善的と言われるのかがそもそも分からないので、そういう評価はなるべく勝手にしない方がよい。実際にどういうことを思ってボランティアをやっているのか、どういう心情をもってボランティアをやっているのか、ボランティアをやっている本人の考えを聞かなければ「偽善的」云々という評価は全く意味がないだろう。そういう面についても聞いてみたかった。

<兼成レポート>

(震災ボランティアに参加した動機を尋ねたときの「成り行き」「これと違って問題意識があったわけじゃない」という答えに対して)
――仕事・職業として援助活動を行うならまだしも、何の報酬を得ることもできず、ただ困っている人の役に立ちたいという気持ちだけでは、と

ても援助なんかはできない。そこで考えられるのは、自分にも何かできるんじゃないかという使命感に燃える人が、困っている人のために助けてあげたという偽善的行為に基づくボランティアである。・（中略）・周囲の人が行くから、私も行かなきゃいけない、何をやるかは漠然としているけれど、ボランティアに参加したということで周りの評価を得るといような偽善的行為が私には許せない。というのも、私の中にこそこのようなボランティアに対する不純な動機が存在しており、それを払拭しきれない自分に嫌気がさしているのである。

三井さんも兼成さんもボランティア経験はない。このことと「偽善」のイメージはどうつながるのか。周りからの「評価」を意識しながらボランティアをするのが不純なのであろうか。それでは純粋な動機というのものもあるのだろうか。未経験者がボランティア活動に参加する際に感じる一種の照れくささや違和感のようなものは、この「偽善」のイメージとどこかで通じているような気もする。しかし、このような思いを抱えているのは実際に活動体験をした学生にもいる。

<梅沢レポート>

――私も神戸、大阪で阪神大震災救援ボランティア活動に約1カ月参加した。しかし私の場合、「被災者の人達のために何か役に立つことを是非やってみよう」と意欲を燃やし、正義感あふれて、ただ純粋な熱い思いから参加に至ったのではなく、それまでには様々な思いを巡らせ、「やはり行くのは止めよう」と思いとどまったり、迷ったりと、今明かすと恥ずかしいような情けない心理的経過をたどった末のことだった。・（中略）・「被災地の惨状をただ他人事のようにテレビで眺めている自分がいたたまれなく感じたのはまやかashiで、結局私は自分だけがかわいいとか考えられない悪質な偽善者にすぎないのかもしれない。」とも考えた。

私の経験も含めてだが、ボランティアをしているというと、「偉いね」とか「よく頑張るね」とか「大変でしょう」などと言われる。ものすごく特別な事でもしているかのよう、或は自分とは全く別の世界にいる人でも見るかのような視線を受けることもある。しかし皮肉にもボランティアは、ときと場合によって、賞讃の対象となったり、批判の対象となったりする。いったい何が境界となり、何を基準にボランティアは判断（評価）されるのだろうか。梅沢さんのレポートにある“純粋な熱い思い”とも関係がありそうだがこのあたりの論議は後の、理想のボランティアイメージの考察にまわすことにする。

3. ボランティアは「犠牲」か

もし仮にボランティアが「すばらしく偉大」な行動としてとらえられているとすると、そのイメージは、「自分の生活のすべてを投げうって、活動に没頭する」＝「自分にはとてもそのような事はできない（許されない）」というものであるかもしれない。これは少々極端すぎる例えかもしれない。しかし、「ボランティアはやりたいけど・・・があるし」

などと考え、迷い、諦めてしまうという事もよくあることだろう。ボランティア活動と自分の生活をいかに両立させるかということは、それぞれにとって大きな問題なのだ。現実には、震災ボランティアに向かった人でも、そこに至るまでにはいろいろと迷いや不安を抱えている。そして、行ってからも悩む人は少なくないし、実は活動中に生じた悩みのほうが大きいという場合もある。活動を通して問題（葛藤）を抱えたケースについて、ここでは逐語記録をみていこう。このインタビューグループの特徴は、聞き手（梅沢さん、三宅さん）が2人とも震災ボランティア経験者であることだ。お互いの経験を語り合う場としても作用していることに注意したい。

【藤井さんへのインタビュー逐語記録】より

梅沢：例えば、何ていうのかな、これは私の個人的なことなんだけど、「何かしたい」って思っても別に私は医者でも看護婦でも何でもなし、……ただ単に自分もっているそういう資源とか何もないし、だから「何かしたいな」っていう思いはあるんだけど、踏み切れないとかそういう気持ちは全然なかったの？

藤井：いや、すごいあったから、実際に2月10日まで、（社会福祉援助技術論の授業で）みんなと話し合うまで何にもしなかったというのもあるし、「やらなきゃ」って思ったけど、行って何ができるっていうのは、実際動き出してからもそれは考えた。医者とかじゃないしってことを。

梅沢：……でも実際問題、自分の生活は自分の生活であるわけじゃないですか。でも、それは全部放り出してまでもボランティアに行こうって、そこまで思った？だから「（レポートを）書かなくて単位もいらぬ。今すぐ駆けつけなきゃ」とかそこまで思えました？

藤井：その場はすごい盛り上がりってそう思ったけど、実際、家に帰ってみてやっぱ、一年それで棒に振って、もう一年学校に行けるかとか、あと普段やっているボランティアでまあ、いちおう私とかが抜けたらきつとねー、不都合とか出てくるわけだし、その人にそういう思いまでさせて行く必要があるのかっていうのは思えたけど、なんか、もうそのときには、すごい歴史的な大事件みたいに思ってたし、それで何かやらなきゃっていうのはあったからいっちゃったんだよね。

梅沢：じゃあ、割と、そういうの振り切って、何かを犠牲にして行った、自分のことはいいから行ったっていうところはどこかある？ 私の場合は「私も行かなきゃ」って思ったのは1月の末くらいで、でもこれから試験だしな、レポートだしで、とりあえず試験終って全て終ってレポートも終ってから行こうってそういうふうにわりきることにしたんだけど、藤井さんの場合はどうですか？

藤井：でも、結局レポートとか出し終ってから行ったし、だから自分で、犠牲になったっていう意識はないけど、でもそのボランティア普段からやってる人とかには悪いなあって。

藤井さんが普段関わっているのは週2日程度での家事・育児のボランティアである。「普段やってるボランティアがもっと私がやらなきゃっていうものが多かったら、（神戸には）行かなかったと思う。」という発言からも、それまでのボランティアは、責任はあるが比較的自由な立場で関わることができているように窺える。

しかし被災地での活動を通して藤井さんは、人間関係や仕事の大変さによって、肉体的・精神的にも次第に追い詰められていく。

梅沢：ボランティア活動中では何かありました？ うれしかったこと、楽しかったとかよかったとか、感激したとか何でもいいんですけど。
藤井：感激した？なんか、あんまりそういうのなかったのかな。なんか頑張らなきゃみたいな、なんかそういう、周りのね、ボランティアの人とかがいっぱいて、「頑張らなくちゃ」、「当てにされているな」っていうのは思ってきたから、それをこう、頭できたから、「よく頑張らなきゃ」みたいなのがあって、「とにかく目の前の仕事やんなきゃ」っていうんで、むりやり騒いでたとかっていうのはあったけど・・・物資の仕事始めてからは、地下の倉庫にしまっているから物資はすごい、ほとんど、上のボランティアルームとの行き来、中の仕事でそとの天気も分からないっていう状態だったから、気分が滅入ってたというか・・・

ひたすら頑張り続けることを求められ、また自分でもそうあろうとしたこのときの藤井さんの様子は、まさに活動参加に対して個人の自由を失った“犠牲的”なボランティアともいえる。

もうひとりの聞き手である三宅さんもボランティア経験者だが、藤井さんの話を聞いて、自分の経験とのギャップに少々驚いたようである。「ボランティアは楽しみながらするもの」だという雰囲気の中で、また協力的な地元の人達などに囲まれての活動を通して、「非常事態が起これば誰彼となく助け合っていけるものなのだ」と感じていた三宅さんは、レポートのなかで

「同じ震災ボランティアといっても、行った時期、場所、活動内容によってこんなにも感じることで、体験できたことが違うのかということを感じることができた。おそらくこのインタビューがなかったら、自分が体験したことだけで阪神大震災をとらえていただろうと思う。」

と振り返っている。

そのほかにも被災地での活動中の、“犠牲的”ボランティアの姿が浮かぶケースがある。

丸山さんへのインタビューでは

「ボランティアなんだから、不満があるはずなどない。ボランティアに来たんだから、神戸元気村の名前のおり元気じゃないんなら帰れ」とか「ボランティアに来たのだからお前ら働かなくてはだめだ」「ボランティアなんだから尽くしなさいと、奴隷的にとらえている」

などの発言がある。この章の最初に話題にした犠牲を、「生活の犠牲」と名付けるとすれば、藤井さんと丸山さんの場合は現地で陥った「自己の（人格の）犠牲」とでもいえるのではないだろうか。特に後者の方の「犠牲」は、ボランティア自身の心にしこりとして残ったという事実もある。しかしこれについては、他の章での考察の対象にもなっているので深くはふれないでおくことにする。

4. ボランティアは「自己満足」か

ボランティア活動をするとき、人は何がしかのやりがいを求める。その求め方がどうであるか。ボランティア自身はどう理解し、また聞き手はそれをどう受けとめているのか。活動の評価をする段階で体験者と未体験者の解釈に違いはみられるのだろうか。単に言葉のニュアンスによるものなのだろうか。ここでは飯野さんに対する佐々井さん（未体験者）のレポートを参考にしてみる。

<佐々井レポート>

最初に関わった日本てんかん協会でのボランティアは、組織的には弱かったため、本来の意味でのボランティア（自発的な）行動が求められたわけであるが、話者は「おもしろくない」「何か違う」「手にとるように成果があればいいんだけど」と思い、結局3日目までで活動場所を変えることにした。

そして、4日目以降は、「応援する市民の会」の斡旋を受けて、被災者の家を回り、掃除等の日常生活援助を行う。この市民団体は、比較的組織がしっかりしており、話者もそこでの活動に関して、「ニーズに即している」「すごく大事」と評価している。

確かに、話者は、活動場所を変えたことによって、ボランティアを始めた当初よりもやりがいを感じる事ができたようだ。しかし、ボランティアとは、果たして、自分の心の欲求を満たすためだけに行うべきものなのだろうか、という問題が浮かび上がってくる。話者の言葉を用いるなら、「自己満足」をボランティアの成果として得てくるのか。或は、現地の困っている人々のために何かをすることは当然であるという意識の下、ボランティアを行うのか。ここには大きな違いがある。そして、援助を受ける側もそれを敏感に察知する以上、この問題は、単に「やりたいから、やりに来た」では済まされない問題ではないだろうか。

ここで気になるのは、話者すなわち体験者自身が、自分の行動を「自己満足」と語っている点である。この場合、話者自身にとっては「自己満足」も肯定すべき部分として理解されているように思える。せっかく来たのに手持ち無沙汰になってしまい、他にやりがいを感じる活動を探そうとしたボランティアが批判されたというケースもあった。

“ボランティアとは結局は自己満足の行為である”と行ってしまえばそこまでだ。だがボランティアに参加するのは、やはり“何か”を求めるからだと思う。“何か”役に立ちたい、そしてそれが目に見えた成果のある仕事であればあるほど、達成感・満足感も増してくる。このことは理解できるし、むしろ人間としての本音かもしれない。漠然とした

“何か”を求める個人が「ボランティア」として見られるとき、そこに影のようについて回るのが「偽善」なり「犠牲」なり「自己満足」などのややネガティブなイメージなのではないだろうか。これらが表裏一体となりながら、真の理想とするボランティア像の模索は続けられているのだろう。活動の自己評価として満足感をもつことは、ボランティアにとって必要なことである。ひとつにはそれは、個人としての存在を自覚するうえでも必要なのではないだろうか。

5. ボランティアの価値・理想像とは何か

今回の調査の特徴は、学生が学生にインタビューしたという点にある。学生は同世代のボランティアをどうとらえているのか。活動体験を通して、また、インタビューを通して、それぞれ何を考えたか。まずここで、インタビューを受けたボランティア体験者の自己評価とボランティアイメージのつながりについて、いくつかの発言をおってみる。

『小田さんへのインタビュー逐語記録』より

「今回のボランティアに参加したときは、やっぱり近くに、日本の中で災害が起きて、できることはやりたいということですね。一番がね。助けが必要ならば、できることはしたい。させていたいただきたい、ということ。あと、もうひとつ、その理由としては、今後自分の為にもいいことだと、神戸で働くっていうことが、何かプラスになるんじゃないかと・・・」

(できることはやりたいという最初の希望はどうだったか?)

「うん、ある程度できた。・・・自分の為も、そうね、自分の為はあんまり・・・」 「ただ、普通の人でもできないことはないと思うけど、普通の人には、その専門家の援助に結びつけることができるから。そういう意味で資格のない、専門家じゃなくても、学生が行く意味はあるんじゃないかと思う。」

『高橋さんへのインタビュー逐語記録』より

「・・・ボランティアって、結局、なんていうのかな、自分のためっていう思いが私のなかにある。だから誰かのために何かしてというんじゃないで、ボランティアすることで自分に返ってくるもの、で、それによって自分が少しでも成長できればいいなって、そういう思いですずっとやってきている・・・(中略)・・・神戸でもやっぱり人との出会いが一番自分にとっては大きくなっていう。やっぱりそういう状況のなかだからさ、なんていうのかな、自分をよく見せようとか、そういうことはできないっていうか、本当にありのままの自分が試されると思うのね。うん、それでいろんな人との関わりのなかで、自分というものも見えてくるというのかな、それを神戸ではすごく強く実感したなっていう気がするね」

(行ってよかったと思いますか?)

「ああ、行ってよかったよ。きっとね、行かなかったら後悔してたなって。あの時期、しかも自分が学生っていう身分でさ、やっぱり束縛がないじゃない・・・」

小田さん、高橋さんは比較的いいイメージをもって帰ってきた例である。一方現地での活動を体験したことによって、それまでの価値観やボランティアイメージが変わってしまったという場合や、活動に対する評価の答えがでていない場合もある。藤井さんへのインタビュー逐語記録を見ると、

『藤井さんへのインタビュー逐語記録』より

三宅：このボランティアをして得られたことというか。

藤井：得られたこと？

三宅：行ってよかったというか、そう思えたこと・・・

藤井：やってよかったこと？（あなたは）行きました？

三宅：あ、行きました。

藤井：答えさ、出ます？（三宅・藤井爆笑）聞くなって・・・？

三宅：ああ、そうですね。難しい。私もはっきりしていないんですけど、私はそれまでボランティアってやったことがなかったから、うん、ボランティア期間も短かったこともあるし、（藤井さんのように）こんな大変なことも全然体験しなかったから、なんかもっと楽しんでやれるものなのかなって思っていたというか・・・

また、小嶋さんは、一人暮らしをしているおじいさんの家の片付けの手伝いをした。奥さんとの思い出のつまった食器などを捨てるのは身を切られるように辛かったと、あとでおじいさんが語った。これをきっかけに、「もっと人の気持ちを分かってボランティアしたい」という課題を見いだしている。小嶋さんのこの言葉を聞いて、インタビューした栗坂さんは、このことこそが人間関係のなかで一番基本的で、一番難しいことであり、ボランティア活動の難しさにも通じていると述懐する。

難しい、というのはそれが望ましい姿、つまり理想とするものだという意識があるからではないか。調査論の授業では、インタビュー前に準備として『ネコの間接報告』という、震災直後から神戸でボランティアを続けている人の手記を読んだ。それに対する感想を、岩城さんは次のように書いている。

<岩城レポート>

・・・私がおもってもあこがれ、理想とするボランティアの形をみた。筆者はやむにやまれぬ気持ちから現地に入り、自らも危険な場所に住み込みながら、被災者の為に働き、頼られ、心を通わせている。筆者は「被災者を助けたとはいえない・・・冗談をとばしながら、行きていく元気を分けてもらっている」と述べている。単なる援助ではなく、お互いにお互いの生活をよくしていつているといえるのだろう。

ボランティアイメージは、人それぞれだから、理想像といってもひとことではいえない。だからこそ活動にも参加者にも幅がもてるのではないだろうか。“純粋な思い”という言葉もでていたが、ピュアな思いさえあれば結果はどうでもよいというわけでもない。例えば震災ボランティアでもマスコミ等の批判があったように、周りに迷惑をかけ、時にはそれさえ気付かないまままで終わってしまうボランティアもいた。逆にあまりに「自分がやらなくて」という状況に追い込まれて燃え尽きてしまったボランティアも少なくなかった。ほんとうに誰かにとっての救いになっているか。また同時に、自分自身が“何か”を学び成長していると感じられるか・・・これはボランティアが、その活動にとりくむときに、何をどうするべきかを見抜く洞察力（ニーズの発掘）と他人の痛み・苦しみ・悩みに対する感受性をどれくらいもっているか、共に歩む姿勢で関わっていくことができるかにかかってくるのではないだろうか。活動を通してボランティアが自身に問い続けること、また仲間との連携も重要な要素であろう。これが今回の分析を通して私なりに到達したイメージである。

<おわりに>

インタビュー調査及びこのまとめの作業をしたことで、1年経ったいま、私自身も神戸でのボランティア活動を鮮やかに思い出すことができた。正直にいうと実際に活動した者としては、もっと多くの人に被災地の事、ボランティアの事を知って欲しい、考えて欲しいという思いがあった。別にボランティアをするように勧めようというわけではないし、インタビュー自体もそういう意図はないものであったことは忘れてはならない。しかし、

「私自身ボランティアをしたことがないせいか、“ボランティアって何だろう”と考えたこともありませんでした。しかし、もう一人の聞き手役である藤原さんの『行政の谷間を埋め、ニーズを発掘し、新しい制度へとつなげてゆく』という発言には、目からウロコが落ちるほどの衝撃を受けました。これを契機に、ボランティアについて、自分の見識を持ちたい」

という汐見さんのレポートをみると、インタビューを通して学生の視点にも、いい意味での変化があったといっても良いような気がする。

震災ボランティアとか障害者対象ボランティアなどの区別に限らず、ボランティア全体に関する評価なりイメージはいろいろある。また、もうひとつ重要なのは、ボランティア組織・団体とかコーディネーターとの関係である。今回の私の考察では、この部分について抜けているが、これらの要素が、実際に活動するボランティアの意欲とか行動、そしてイメージにも大きな影響を与えていたということも忘れてはならない。ボランティアイメージが人によって様々だというのは、生活や経験においても多様な人々が、ボランティアというものに関心をもっている証拠でもあろう。少なくとも、私にとってボランティアとは、特別なことではなく、自分の生活の延長線上にあるものとして、今後も自然に関われるものにしたい。

<高杉 彰子>

III ボランティアの側の「癒し」について

～「援助者」が抱え込む問題～

<はじめに>

阪神大震災では、自分の周りでも実に多くの学生が震災ボランティアとして現地に飛び込んだ。まさに「飛び込んだ」という感じで、何が出来るのかということに最後まで不安を抱きつつも、グループ討議などを行い、励ましあいながらの参加だったようだ。

自分自身はこの震災ボランティアに参加したわけではない。ただ当時、別のボランティア活動に関わるなかでボランティアの奥深さとともにその難しさを感じていた自分にとって、彼女・彼らの行動力は一種の驚きだった。震災ボランティアとして参加した個々人が、何を行い、何を得て帰ってきたのか、是非知りたいと思う。

ところが残念でならないのは、現地での取り組みを通してかなりのショックを受けて帰ってきた人が幾人か見受けられるということだ。例えば「神戸から返ってきてしばらくは、人と関わりあうのも嫌だという時期があった」（藤井さん）という声もある。そうした人のなかには現地での取り組みを振り返ることが苦痛になっているような人もいる。

今回授業の一環として、震災ボランティア参加者に対してインタビューが行われたが、そのレポートのなかで語られている現地での取り組みは、ボランティアというものを問ううえでいずれも意義深いものだと思う。これらの体験を血のかよった言葉としてまとめることが出来るのは、やはり参加された方々自身だろう。にもかかわらず、もしそれが参加者個人のなかでまったく否定的に捕え返されるようなことになれば、そうした問い直しの機会を失うことになる。そして何より、精神的にも肉体的にも今回の活動に多くの労力を費やしたであろう参加者にとって、大変な苦痛となるのではないか。

ボランティアは一般的に、「被災者」に対して「援助者」として位置付けられている。しかしここに見られるレポートからは、被災者とともにボランティアが多くの問題を抱え込んでゆく様子がうかがえる。ここではそのボランティアが、復興活動の中で背負いこむ問題に注目してみたい。以下、幾つかのレポートから具体的に取り上げてみる。

1. なぜ否定的に捉え返すことになったか

(1) どのような「ボランティア」だったのか

まず、丸山さんと小嶋さんの例に注目、「ボランティア」としての取り組みの中身がどのようなものだったのか考えてみる。

この二人には、与えられた仕事に対するやり甲斐の無さを漠然と感じていた様子が、参加当初からうかがえる。

丸山さんは「神戸元気村」で本部の仕事につく。

「人手が足りないということで、いきなり本部の仕事にまわされた。本部のことが全然わかんなくて、電話の取次とか、人が尋ねてきた時とかの応対をするんだけど、なにをしたらいいのかわかんなくて、・・・いきなり電話とってって言う感じだった。・・・自分が何をしてるのか分からなくて、いても役に立ってるのかなと言う感じ。」

小嶋さんも、てんかん協会に参加した当初を振り返って、

「他のボランティアが募集を打ち切って、てんかん協会にはボランティアが流れ込んでくる。（仕事より人手の方が多く）エネルギーが有り余って・・・」

「ポスターを張るだけで手応えが無い。何やってるのかなって感じ。」

また小嶋さんは、てんかん協会の取り組みが全国VYS連絡協議会に引き継がれた後も、

「とりあえず何をするかってわかんないから、まず調査。避難所を回って子供に話しを聞いたりとか。」

「物資供給だとかの肉体労働の部分は終わっていて、メンタルヘルスの部分を手伝おうと行って行ったんですけど・・・だから子供が虐待されていなくていいのを見てこいって言われたんですけど、そういう調査ってすごいむずかしくてわかんない。」

「はっきりいっちゃえば、やり甲斐がなかった。」

さらに取り組みを続けるなかで、この二人は現在の取り組みに対する疑問を深めることになる。

丸山さんは、

「上に立つ人がすごいストレスたまってる、当たり散らして、ボランティアなんだからみんな同じ立場のはずなんだけど、言いたいほうだいにこき使うという感じで、上に立つ人がボランティアのノウハウをもってるわけでもなくて、ただやってきて始めたって言う感じの人が多かったから・・・

・・・ボランティアに来たんだから働かなきゃ駄目だって言う感じで、ボランティアを私物化する感じで、ボランティアというものを分かってない。・・・

・・・ボランティア自体先が無いなと思った。」

小嶋さんは、全国VYS連絡協議会で「マスターベーションを求めてはいけない」という批判を受けた際、

「でもね意義あることをやりたいって言っても、別に炊き出しやりたいとか、物資分けたいとか、そういうことと思って言ったわけじゃなくて、・・・うんでもわかんない。やっぱりどっかで、そういうやり甲斐のあることを求めちゃったのかな。マスターベーションって言われて、ちょっと、うーんって思ってる。」

この二人の例をみてわかることの一つは、漠然とした潜在的なものではあるが、参加当初から自らの役割が意識されていることだ。参加当初の取り組みを評した「やり甲斐が無い」「いても役に立ってるのかな」という言葉は、それぞれの潜在的な問題意識に基づき、果たされるべき役割というものが観念的にせよ想定されていることのあらわれだろう。これをここでは潜在的な「役割意識」と呼ぶ。

二つめは、この潜在的な「役割意識」が、組織活動を通して与えられた具体的な役割との間にギャップを生じていることだ。上記の引用にもみられるように、丸山さんの場合は組織のリーダーへの反発が一つの契機となって、あるいは小嶋さんは「マスターベーションを求めてはいけない」と批判されたことで、このギャップが強く自覚されてきているようにみえる。ここではこのギャップの自覚が、この時点での取り組みを否定的に評価する結果となってあらわれているのではないか。

しかし、このギャップはそのまま自らのボランティア活動そのものの否定につながるわけではない。むしろ、現実の活動とのギャップを意識することが、潜在的な「役割意識」を問い直し、顕在化してゆく契機となっているのではないか。

事実この二人は、自らの取り組みを新しく展開することになる。

丸山さんは、前述のように「うんざり」している状態の中で、

「・・・皆いらいらして、本部の中に入ることが苦しくなり、もう嫌だと思っていたとき、『ティピ』というテント作りの企画に加わらないかと誘われた。・・・」

「・・・私たちが行ったときは物資も足りていて、お風呂とかも入れる状態で、なにがほしいかと聞くと、『家がほしい、仕事がほしい、・・・』と言うことだった。それなら家を提供しようじゃないかということだった。まだ、仮設住宅の抽選が無かった時で、体育館で生活するよりはテントの方がプライバシーを守れて良いじゃないか、と思った。・・・うんざりしてる時だったし、現地の人々のニーズにもあっていると思ったので、乗った。」

小嶋さんは、結局全国VYS連絡協議会を離れ、「応援する市民の会」の仕事を見つける。ある一人暮らしのおじいさん宅の整理を手伝ったことを契機に、そのおじいさんとの精神的な交流に意義を見い出していく。

「（訪問お手伝い隊の取り組みとして）・・・山の手の良いお家に住む独り暮らしのおじいさんが、その、家具を立てて下さいっていうので、行っ

たんですけど。その人は、もう奥さんは何年か前に亡くして、一人っきりなんですよ。だから、もうねえ、奥さん亡くした上にそれが来ちゃってっというのに、でっかいお家に一人っというのは辛かったみたいで。・・・結構仲良くなって、ゴールデンウィークとか遊びに行ったんですよ。・・・」

「・・・友達じゃないけど、こういう知り合いが出来てって、あの、そういう神戸に知り合いがいるってことで、なんかこう身近になるでしょう。・・・もちろん、東京にいても事務作業の手伝いとかって言うの出来ただけど、でも、行ったら忘れないでしょ。あの、忘れられるのをすごい、こう、被災地の人も恐れてるっていうから。」

つまり、実際の取り組みのなかで深まった疑問が契機となって、さらに新しい取り組みを自ら生み出したことになる。丸山さんは組織の内部に新しく自らの役割を作り出すことで、小嶋さんは自らに必要な役割を求めて組織を移ることで。これは新しい取り組みの実践というかたちで、なにがしかの「役割意識」が顕在化されたということではないか。

ここで以上の流れを整理してみると、

- 1、「役割意識」の潜在
- 2、「役割意識」と外部から求められる役割とのギャップを自覚
- 3、「役割意識」の問い直し
- 4、「役割意識」の顕在化、つまり、実践

という流れがあることに気付く。つまりここでは組織活動という一つの社会関係の中で、自らの「役割意識」を満たそうとする姿が見えて来る。このことは「ちびくろ救援グループ」に参加した高橋さんの言葉の中にもより端的に語られている。

(ボランティアに対する意識の変化はあったかという質問に対して)
「ボランティアって結局自分のためっていう思いが私の中にある。だから、誰かのために何かしてというんじゃないくて、ボランティアすることで自分に返ってくるもの？ それによって少しでも自分が成長できればいいなって、そういう思いですずっとやってきてるのね。それは神戸に行った時もやっぱり変わらなくて、おじいさんおばあさんと話をしたり、ボランティア同士で夜遅くまで語ったり、みんなで、うん、そういう対話のなかから、自分がいろんなことをえられるものだなあって。ーやっぱり、人との出会いが一番、自分にとって大きいな。そういう状況のなかだから自分をよくみせようとか、そういうことは出来ないっていうか。本当にありのままの自分が試される、と思うのね。それで、まあいろんな人との関わりあいのなかで、自分っていうものも見えてくる。それを神戸では強く実感したな。」

ここでは、「人との出会い」のなかで「ありのままの自分が試され」「自分っていうものも見えてくる」と語られている。つまり被災者の方やボランティアとの交流というある社会関係の中で、自らを問い直すことができたということだろう。

こうして見ると、少なくともここにみられる「ボランティア」とは、必ずしも所属する組織活動のみに責任を負うわけではない。何がしかの社会関係—ここでは「復興活動」という、個々の組織活動をも含めた社会関係—のなかで、自らの「役割意識」を満そうとして活動する。つまりここにみられる「ボランティア」とは「自己実現」を求めて活動する個人なのではないか。

(2) 「ボランティア」であることの「強さ」と「弱さ」

こうした意味でのボランティアは、特に迅速で合理的・効率的な組織活動が優先されるような場面においては、組織の側から求められる役割と個人が抱える潜在的な「役割意識」とのギャップに悩まされることも多々あったのではないか。つまり上記の4段階の流れで言えば2の段階に至る例が他にもあったのではないか。

こうしたギャップから生じる悩み、葛藤とでも言うようなもの自体はボランティアの社会的な意義を考えるうえでむしろ大いに意味のあるものだと思う。なぜなら先にも見た通り、これが「役割意識」を問い直し、「自己実現」をはかるうえでの一つの契機になっているからだ。

今回の震災のように日頃想定し難いような状況下では、そこで生じる被災者のニーズをつかむことは困難であり、また、そのニーズ自体も状況の変化によってさまざまに変わって行く。必ずしも既成の組織活動（行政、民間の違いに関わらず）の対応が完全なわけではない。そのギャップを敏感にすくいとってゆくには既成の枠組みに囚われない柔軟な行動力と、潜在的なニーズ発掘の前提として、それぞれの生活の場で「人間関係」を結べる「個性」が必要になってくると思われる。組織活動という社会関係を結びつつも、そのなかで自らの問題意識を拠り所として「自己実現」を求める個人でありつづける。こうした意味で、ボランティアが「自己実現」を求めることの社会的意義は大きいのではないか。

例えば先ほどの丸山さんの場合でみると、組織運営への反発と飽き足らなさを感じていたとき、避難所の住人との交流を通してニーズの変化が生じていることを感じ取る。そして組織のなかに「ティピ」作りという新たな取り組みを提起することで自己実現を図ろうとする。これは同時に、ニーズの変化に応じて既成の組織運営を改善してゆく力ともなるのではないか。

小嶋さんが組織を移ったことについては、確かに他のレポートの中で「自己満足だ」として批判されている箇所も見られる。また、行動を共にしていた飯野さんは実際、自らの行動を指して「てんかん協会を見限ってしまったのも自己満足なんですよね」と否定的に振り返っている。しかしそうした行動の結果、「エネルギーが有り余っている」という状況だった当初の受け入れ組織に見切りをつけ、結果的に本人の能力を活かせる新しい役割を見付け出すことができた、と見ることは出来ないだろうか。人材の流動を促す柔軟性は、組織体制の硬直化を防ぐことになる。

しかし、ボランティアが「自己実現」を求めて活動する個人である、ということは、その強みであると同時に、ボランティアがいかに傷つきやすく不安定な存在であるかということをも示す。例えば、上記のような葛藤を、文字通り個人で抱え込んでしまう場合があるのだ。

丸山さんは、上記のティピ作りの企画からは、結局離れてしう。

「もうこんな所にいられないと思って、3月10日位に一旦帰った。・・・このままやめちゃうのは何もやってないも同然。ただいざこざに巻き込まれて嫌な思いをして帰ってきただけ、・・・」

「・・・（ティピ作りの企画で）他の人から圧力が掛かって、（企画自体は）駄目にはなっていないんだけど、こんな中でやるのはほんとに嫌だと思って、自分自身が駄目になってやめちゃった。・・・それが自分で情けなかった。」

この後、丸山さんは再度「神戸元気村」へ向かい、聞き取り調査などの取り組みに参加する。そしてそうした活動を振り返って、現地の受け入れ組織の不備を様々に指摘する。そうしたことが明らかになったことで今後の災害時に不備を繰り返さないですむ、という意義があるのではないかと丸山さんは言う。しかし自らの活動の評価については「結局私などは何も役に立っていない。」と振り返る。つまり、ボランティア活動全般についての意義は認めることができても、自らの取り組みの評価については別なのだ。ここでは自分に何ができたのか、ということが評価の分かれ目になっているように見える。

藤井さん

「・・・もう一人の男の子がいたんだけど、それは私よりずっと前からいて、物資の配給の仕事をしてたんだけど、一人でどうしたらいいかわかんない物資抱えちゃって、おかしくなっちゃって、『物資捨てる』とか『燃やす』とか言い出して・・・途中からボランティア不要とかさ、ボランティアが逆に復興を妨げるみたいなのとか新聞にとりあげられてる時期だったから、ボランティアが援助物資を、こう、夜中に捨ててるっていうのがばれたらどうされるか分からないって言うので、すごい、上の人がびりびりしてて・・・」

「・・・（そういう中で）『がんばんなきゃ』『とにかく目の前の仕事やんなきゃ』だけだった。」

ここで藤井さんは、ひたすら「がんばんなきゃ」だけで、良い思い出は何も無かった、と語っている。

また、

「身寄りが全然なくて、家が全壊しちゃって、それで避難所に入って来たおばあちゃんなんだけど、もう、全て無くしたって言う感じで落ち込んで、ボランティアにお昼を毎日一緒に食べてほしいという要請があって、それで私は前の人から引き継いだんだけど・・・（ボランティアを入れることで）周りとの人間関係がギクシャクするからと、避難所の班のリーダーの方からボランティアをもう打ち切るようにと言われた。・・・おばあちゃん、もうすっかり落ち込んで、『いじめとかで自殺する子は勇気

があるね』って、私に聞くわけ。『それは勇気とかそういう問題じゃないでしょ』って言ったら、『私は死にたいのに勇気がなくて死ねない』とか言われちゃって、あの時は、何かほんと、励ますことも出来なかったし、何とっていいか分からない状態で、・・・」

ここでは、被災者との交流を深めてゆくなかで、被災者の抱える問題を藤井さん個人でともに抱え込んでゆく様子がうかがえる。この件は後に相談役のリーダーにつながることが出来たが、藤井さん本人には後々まで大きなショックとして残る。

以上を見てみると、現地の混乱した状況下で引き起こされる問題を、ボランティア本人が個人の問題として抱え込む様子がうかがえる。

ある問題状況にボランティア団体が組織として十分対応できていないような場合でも、自らの問題意識を拠り所として行動するボランティアは、先にもみたように何とかそこで活動を展開しようとする。それが既成の体制に変化を促す大きな力になるのは確かだが、しかしその過程で、ボランティアは知らず知らずのうちに大きなストレスに個人で晒される結果となっているのではないか。特に、藤井さんの物資配給作業の例にみるように、与えられた役割のなかに否応なく組み込まれた場合などは、個人にかかるストレスはなおさら大きなものとなるだろう。このことによるダメージの積み重ねが、ボランティア活動そのものを否定的に捉えかえすことにつながったのではないか。

2. ボランティアの側の「癒し」の必要性

こうしてみると、上記にみるような個々のボランティアが抱え込む問題というものを表に出してゆくこと、つまり仮に個々のボランティア組織のレベルでいうなら、組織としてどう共有してゆくかということ。これが同時に被災地域のニードを顕在化させるということでもあるように思える。具体的には所属するボランティア組織が、個々のボランティアの抱える問題を組織運営のレベルにどう反映させるかということは重要になってくる。こうした組織運営上の問題については後の章で詳しくふれられると思うので、ここでは省略する。

いずれにしても、そうした組織機能そのものの問い返しにはかなりの時間を必要とする。しかし丸山さんや藤井さんの例をみると、その過程で既に限界に達しているようにも見える。実際問題として、日々の生活のなかで背負うストレスをどう解消してゆくのか。そうした問題についても意識的に取り組まれる必要があるのではないか。

これについてはここで具体的な提起が出来るわけではないが、最後に、レポートの中から幾つか参考になるような言葉をみしてみる。

藤井さん

「すごい自分がぎすぎすしてて、疲れてたから、淡路島に行って、海苔つくってるおじさんに会って、なんか『ただで旅館紹介してくれる』とか言って、『ボランティアで疲れて大変だろう』みたいに言って、ただでご馳走とかになっちゃって、全然見ず知らずの人なのにすごい良くしてもらえてそれで後また続けられる気分になった。うん、良かったなーって。・・・ぎすぎすした面とか、ボランティア同士の陰口とか、結構『あー』って言うのあったから。なんか『非常事態とかだったら、人間ってもっと助けあわなければいけないんじゃないか』みたいに思ってたから、『あー助けあえないもんなんだ』とか、そういう面ばかり見えてた時期だったから、あれなんか非常にうれしかった。

「被災者への感情移入をして辛くなる時」があったという寺内さんは、

「ボランティア同士で苦しさを分かち合うことも必要だった」

「神戸での2週間を振り返ってみても、助けるよりも助けられることの方が多かった。早朝から夜までばたばたと働き、くたくたになって、くじけそうにうつむく私に、『いつもありがとうね。風邪引かんようにがんばりや。ワシもがんばる。』と声をかけてくれたおじさん。長時間配給物資をもらう列にならんで寒くてたまらないはずなのに、自分のカイロを出して、私の手に握らせてくれたお婆さん。『神戸YWCAに来ると、嫌なことみんな忘れるねん。』とにっこり笑う小学生などなど。――」

「犠牲とか偽善とか言われる次元を超えて、人間っていいなって思った。」

「（震災ボランティアを）大変そうだと思っていたが、実際とても楽しんできた」という三宅さんは、

「私が行った頃には、生活できなくて困っているというようなことは、もうほとんど無かった。だからボランティアの活動自体も絶対に無ければ困るというものではなかった。そのため、ボランティアに行った先でも、ボランティア団体の内部でもそれほどピリピリした雰囲気は感じられなかった。それどころかボランティアで来ている人達は『ボランティアは楽しみながらやらなければ絶対続けられるものではない。』という考え方をする人が多かった。どちらかというサークル活動の延長の様なものであり、夜もどこからかビールが出てきてみんなで飲みながら談笑する様な雰囲気であった。だからボランティアに対する私のイメージは『楽しみながらするもの』というものだった。」

小田さんは、精神的な疲れは無かったのかと聞かれて、

「それ、全然無かった。ずっといたかったもん。被災者の話聞きたかったから。そういう意味ですごい残りたかった。そういう疲れは無かった。」

「自分自身の生活って言うと結構、こういっちゃなんだけど、面白いって言うか、なんか、すごくわいわいしてて。」

「雰囲気はすごくよかった。外回りから返ってきて、サッカーやるのね、いつもご飯の前に。すごく盛り上がって。イギリスの人とか、サッカー超うまいじゃない。それでいて、しかもその教会が6人兄弟だったのよ。ちっちゃい子、3歳くらいからいるわけ、高校生位まで。それに近所の子

とか加わってさ、カナダ人とか加わってさ、サッカーをぐちゃぐちゃのチームでやると面白いんだよ。こんなでかいイギリス人がさ、こんなちっちゃい子供に防御されるわ、サッカーっていうのは。そう意味で、国際交流とかいう、家では問題抱えてるなかでちょっと、ぎゃあぎゃあやっていると面白いとか。」

藤井さんや寺内さんの場合は、この時点で既に具体的な問題を抱え込んでいる。それが組織運営などに十分反映されていない場合などは、その社会関係のなかで自分の存在が無視されているというのに近い感覚をもつ、ということもあるのではないか。自分をボランティア一般としてでなく、「自己実現」を求める個人としてとらえる場合、特に大きな疎外感を覚えるのではないか。こういう時には、自分が今問題を抱えているのだと、とりあえずはただ認めてもらえるというだけでも大きな励みになることがある。藤井さんや寺内さんにとっては、励ましの声をかけられることがそういう意味をもったのではないか。

三宅さんや小田さんの場合は、そもそも個人で問題を抱え込むということはなかったようだ。これは参加時期や参加団体の組織体制などによるところが大きいことは確かだろう。しかし、あえて上記の「サークル活動の延長」のような飲み会やサッカーでの交流という場がもつ意味に注目してみるとどうか。組織運営における意志決定の過程に組み込まれたミーティングなど、組織的合理性が優先されるような場とは別のレベルにおいて、ボランティア同士が個人として人間関係を結べる場。上記の組織運営のレベルにおける疎外感という問題と重ねてみた場合、大きな意味があるのではないか。

勿論、上記のような「エピソード」とも言えるような例は、復興活動にともなう問題の解決と言うよりは、ボランティア個人の「癒し」という多分に情緒的な問題と言えるかもしれない。むしろこうした点を「自己満足」として批判する向きもあるだろう。しかしそうした批判がストレートに出てくること自体、役職や地位、権威といった鎧を持たず、個々人の問題意識を直に晒すことになるボランティアの「弱い」立場を端的に示しているのではないか。

今回の復興活動において「援助者」の側であったボランティア。そうであるがゆえに、その個人が抱え込む問題についてはあまり顧みられてこなかったのではないか。しかしもし、この個人としての「弱さ」がボランティアの社会的可能性と表裏一体のものだとすれば、その可能性を引き出すためにも「癒し」の問題は十分に議論される必要がある。

<おわりに>

ボランティアの側の「癒し」について、などというたいそうな題を付けたが、ほとんど具体的な議論は出来なかったように思う。人の心についてあれこれ解釈することは大変に勇気のいることで、まして実際に震災ボランティアとして参加したわけでもない自分がこうしたことを書くのは、なにか恥ずかしいことのような気もする。気分を害されたという方にはここでお詫びします。

しかし、組織や役職の枠を踏み越えて個人で問題を抱え込むというような傾向は、ここに登場したようなボランティアに限ったものではありません。例えば福祉職の行政職員などでも、貧困きわまりない行政の枠組みに飽きたらず、様々に悪戦苦闘し、悩みを抱えてゆくワーカーを何人か知っている。そこでは自主的な学習会を開くなど、問題を共有してゆく試みがなされている。個人の心の問題として終わらせるのではなく、今後そうした具体的な提起ができるようにならなければいけないと思う。

<後藤 浩二>

IV ボランティア団体内部の疲労とその対処

～団体内部の人間関係に着目して～

<はじめに>

阪神大震災では、全国から今までにない多くのボランティアが参加し、ボランティア元年と言われた。

阪神大震災におけるボランティア団体は、被災地の状況が刻々と変化する中でその対応を変化させつつ、ピーク時には、短期間でやってくる多くの人的資源をコーディネートしなければならず、その対応は難しいものであった。

また、ボランティアは、それぞれ被災者を助けたいという熱意はあるものの、全国からの様々な人々の集まりであるため、ボランティア内部でも援助の方法や価値観の違いが存在し、ボランティアをまとめていくこと自体大変なことであったと思われる。

更に、ボランティア参加者は初めてボランティアをする人が多く、受入れ団体もボランティアコーディネートのノウハウをしっかりと持った団体は少なかったようだ。

このような中で、ボランティア団体内部では、ボランティアの疲労や緊張が高まった団体もあったようである。都立大学からの参加者の中でも、「すごいピリピリしたムード」「長期に渡って活動していた人たちが、すごく疲れていてストレスがたまっていた」などの声がみられ、緊張したムードの中でボランティアが消耗してしまう団体もあったようである。

ボランティアの疲労は、一方では、燃尽き症候群やボランティアとして被災者たちと関わっていく過程で抱えてしまうものなど、援助をする上で起こってくるものが考えられる。しかし、ここでは、ボランティアの消耗の要因としてボランティア団体内部の人間関係に着目し、それを生み出した団体の背景を考察すると共に、各団体がボランティアの疲労に対し、どのように対処していったのかについてまとめてみたい。

1. 各ボランティア団体の特徴

まず、はじめに、各参加ボランティア団体の特徴について整理してみる。

ボランティア団体の中には、阪神大震災以前から存在する既存の団体と震災以後に作られた創発的団体とがある。

参加ボランティア団体の中では、震災後にできた創発団体としては、藤井さんの参加した長田ボランティアルーム、丸山さんの参加した神戸元気村が挙げられる。

「梅沢：このボランティアルームってどういう機能を果たしているの？ 普段からボランテ

リアルーム設置してあって？

藤井：いえいえ、あの、ピースボートとか、区役所が、会議室みたいな一室を提供してあげましょうっていうふうに発足した。」（藤井〔参加者名、以下同じ〕）

また、震災以前から存在した既存の団体としては、三宅さん・小嶋さん・飯野さん、梅沢さん、小田さん、寺内さんの参加した団体が挙げられる。

「地域で暮らす障害者をささえる団体に入って仕事をした」（梅沢）

「参加した団体は、日本国際飢餓対策機構というところで、（中略）その団体というのは、世界にあるんですよ。（中略）それで、日本支部が、海外で緊急援助とか、開発援助、持続的な開発援助とかしているところなんだけれども、そのノウハウを活かそうということで、神戸でもやるっていうのを決めたんです。」（小田）

このうち、三宅さんたちの参加したてんかん協会と梅沢さんの参加した団体は、障害者の介助などの福祉系のボランティア団体であり、小田さんの参加した日本国際飢餓対策機構、寺内さんの参加したYWCAは災害援助のノウハウをもったボランティア団体であった。

こうしたボランティア団体の歴史は、ボランティア団体の構成メンバーやリーダーのあり方を少なからず決定づけているようである。

（1）ボランティア団体の構成メンバー

参加ボランティア団体の構成メンバーは、「ほとんどが大学生で」（三宅）、「大学生が多かったです」（小田）の声にみられるように、全国から集まった学生が多数を占めたようである。

また、被災者のボランティアの参加や被災者自身が作ったボランティア団体もある。

三宅さんは、3月31日の時点でのボランティア参加者の構成について、次のように述べている。

「地元ボランティアとしては女子校生が多かった。トータルとしては、男女は半々であるが、宿泊者には男性が多い。地元ボランティアをする人は、震災の被害者ではあるが、あまり被害のない人が多かった。しかし、避難所から来ている人もいた。」

また、高橋さんの活動したちびくろ救援グループは、「避難所生活を送っているうちにその保育園の園長さんを中心として」、被災者たちがつくりあげたボランティア団体で、そのグループの中心的スタッフは被災者であった。

こうした中で、ボランティア団体がもともと持つ性格によって、その団体に集まってくる参加メンバーの特徴がある程度決定されているようである。

例えば、藤井さんの参加した長田ボランティアルームは、震災後に新しくできたボランティア団体であるが、その構成メンバーは福祉的な活動に携わっていない人が多かったようである。

「長田区のボランティア団体っていうのは、ほんと全国から有志が集まった、別にコーディネーターとか福祉に携わっている人とか、別にそういうんじゃないくて、学生とか、普

通の人の集まり」

これに対し、三宅さんの参加したてんかん協会は、既存の福祉ボランティア団体であるが、福祉関係の学生が多かったようである。

「ほとんどが大学生で、学校によって呼び方は違うが、社会福祉に関連した学部・学科出身が多い。」

これは、てんかん協会という団体が福祉的な要素の強い団体であるため、社会福祉に係るメンバーの比重が高くなったのではないかと考えられる。

また、寺内さんの参加したYWCA、小田さんの参加した日本国際飢餓対策機構は、災害救援のノウハウをもった既存の団体である。この2つの団体は、キリスト教系であるため、その構成メンバーもやはりキリスト教系のメンバーが多いようである。

「私はクリスチャン系ので、神戸YWCA（に参加した。それは）、中央区にあるところです。」（寺内）

「学生が多かったです。聖書研究会とか、そういうYMCAとか（やっぱりキリスト教関係？）うん。」「キリスト教の団体っていうか、やってる人たちはみんなキリスト教精神でやっているんで、その団体と、神戸にある教会が協力してやってるプロジェクト（なんです）。（中略）この団体の特に特徴的だったのは、外国人ボランティアと一緒にやってたんですよ。なんでかという、教会と一緒にやってるということでカナダとかイギリスにその、神戸にある教会と同じ系列の教会とかありますよね。それで、その教会が、神戸で震災が起きたから、手伝いたい人って集めて、で、主にカナダとイギリス、タイとか、後はコロンビアとか、カンボジアが一人いて、あと、アメリカ人ですね。（中略）それは、教会が声をかけたんだけど、現地の教会にきている普通の人たちが、何人かは、その日本国際飢餓対策機構のタイ事務所から来たとか、その団体の事務所を通して来たとか、教会じゃなくて。」（小田）

(2) ボランティアリーダーの特徴

次に、ボランティアリーダーの特徴について考えてみると、神戸における活動日数が長いものがリーダーとなる場合と福祉的ノウハウをもったものがリーダーである場合の2つに大まかに分かれるようである。

活動日数が長いものをリーダーとしているボランティア団体としては、藤井さん、丸山さん、高橋さん、梅沢さんが参加した団体が挙げられる。

「リーダー的存在となっている人たちっていうのは、もう震災当初からずっと、やってる人とか、ほんと長期にやってる人ばかりで、短期だと、やっと、状況がみえてきたときに帰っちゃうみたいな感じで。」（藤井）

「仕事ごとに分かれた班にはそれぞれリーダー格の人がいた。こうした人たちは最初から決められていたのではなく、自然発生的に、特に長く現地にいる人がなっていたようだった。」（高橋）

これらのリーダー格の人たちは、特にボランティアに関するノウハウを持っている人た

ちがなっているわけではないようである。

「長田区のボランティア団体っていうのは、ほんと全国から有志で集まった、別にコーディネーターとか福祉に携わっている人とか、別にそういうんじゃなくて、学生とか、普通の人の集まりで、でもそういうなかでもリーダーとか決めなきゃいけないからっていうふうになっちゃって」(藤井)

「グループの代表者はMさんという中年男性で、この方も被災者である。Mさんは今までボランティアとはほとんど関係がなかった人で、(中略)グループがつけられたときにリーダーとなり、そのままきってしまったとのことであった。」(高橋)

以上のように、特にボランティア経験などの福祉的経験やノウハウを持つわけではないが、長く現地にいる人がリーダーとなっている団体がみられる。

こうした長期的に活動しているボランティアがリーダーとなる理由として、震災ボランティアに実際に参加し、調査論の授業では藤井さんのインタビューを行った梅沢さんは、そのレポートの中で次のように述べている。

「藤井さんが活動していた長田ボランティアルームでもリーダー的存在になっていたのは、(中略)神戸でのボランティア活動日数が条件となっていたようだ。私が活動していた団体でも同様であった。私自身、活動していて痛感したのだが、日々状況がかわっていく被災地では、地理に明るく、『どこに何がある』かを把握できているのは何よりの経験知識であり、それによつて的確な判断と指示が可能になる、ということなのだろう」

次に、専門的コーディネーターを中心とした団体としては、飯野さん、小嶋さん、三宅さん、寺内さん、小田さんが参加した団体が挙げられる。

飯野さん、小嶋さん、三宅さんの参加したてんかん協会では、「本部になっているのは、子どもの健全育成を目指す団体VYS(ボランタリー・ユース・ソーシャルワーカー：普段から子どもの育成をめざして活動している団体)の人々で、ソーシャルワーカーや教師、自営業が多い。」

以上から、参加団体は、前者のように福祉的専門性をもつかもたないかに関わらず、神戸での活動日数が長いものがリーダーとなっている場合と後者のように福祉的なノウハウをもったものがリーダーとなっている場合の2つに大まかに分かれるようである。

このような前者と後者の違いは、それぞれのボランティア団体の成立ちによるものと思われる。前者の団体は、震災以後に新しくできたボランティア団体であるため、団体としての歴史を持たず、長期的に活動しているということがリーダーの条件となったものと思われる。しかし、後者の場合は、既存の団体であり、震災以前の団体としての歴史があるため、もともとの団体のリーダーがそのままリーダーとして活躍し、その結果、福祉的ノウハウを持つものがリーダーとなったのではないかと思われる。

以上、都立大学の学生が参加したボランティア団体の特徴について、調査論のレポートから考察してみたが、これらの特徴をまとめてみると、表1のようになる。

表1 参加ボランティア団体の特徴

団体類型		参加者	構成メンバー	リーダー
既存の団体	福祉	三宅・小嶋・飯野	福祉関係の学生多い	専門型
		梅沢	不詳	長期活動型
	災害援助	寺内	キリスト教系	専門型
		小田	キリスト教系	専門型
創発的団体		藤井	福祉とは関係ない	長期活動型
		丸山	福祉とは関係ない	長期活動型
		高橋	福祉とは関係ない	長期活動型 被災者が代表

2. ボランティア団体内部の消耗

次に、ボランティア団体内部の人間関係やボランティア自身の抱えたストレスについて、参加者の声からまとめてみる。

(1) ボランティア団体内部の疲労

藤井さん・丸山さんは3月になってからボランティアに参加したが、その頃、ボランティア内部の雰囲気は疲労の色が濃かったようである。

「結構みんな疲れているし、寂しいっていうのはすごい、誰かにいてほしいみたいなのはあるみたいだから、男女関係とか、トラブルとか、いっぱいあって、あれは結構きついなあって」（藤井）

「丸山さんが行ったのは震災から2ヶ月位たったころでした。長期にわたって活動をしていた人たちが、すごく疲れていてストレスがたまっていた時期でした。」「最初からボランティアで入っていた人達が疲れていて、もう疲労困憊になっていて、ストレスがたまっていて（中略）人間関係におけるトラブルが絶えなかった」（丸山）

(2) ボランティア同士の価値観の相違

ボランティア団体の疲労やストレスの原因の大きなものの一つに、ボランティア内部の人間関係が挙げられる。ボランティア内部の人間関係に摩擦が生じた理由の一つとしては、ボランティア同士の考え方や価値観の相違があったようである。

丸山さんの参加した団体では、「新しい企画をたてようとする、みんな考えがばらばらでかならずけんかが起こった」と述べている。

阪神大震災では、全国から様々な人たちが集まった。このような中で、考え方や価値観の相違は必ず起こってくる問題である。構成メンバーの属性がばらばらであればあるほど、その考え方や価値観の違いは大きくなるものと思われる。

また、それぞれのボランティアメンバーは、被災者を助けたいという熱意をもっていることは共通しているが、その援助の方法ややり方は幾通りもあり、何がもっとも正しいのかは分からない。どのボランティアメンバーも自分が正しいと思うからこそ対立が起こるのではないかと思われる。

(3) リーダーと対立するボランティア

また、ボランティアリーダーは、団体内の雰囲気大きく左右する存在であると思われるが、ボランティアメンバーがリーダーと対立してしまう団体もあった。

藤井さんの参加した団体では、リーダーとその他のボランティアメンバーとの関係が断絶したものとなっていたようである。

「上と下が分かっちゃう、完全に断絶されちゃって、で、下の人は下の人で、意見を聴いてほしい、みたいに言ってるし、上も聴くつもりなんだけど言ってこないみたいな、なんか、すごい、気持ちは別にそんなに離れていないんだけど、隔たりがあるなって、思ってる。」

「ちょっと、何しに来ているのかあんまり取り違えちゃっているなーってというような人とか、上からみてそういう人がいたら、強制的に帰されちゃったりして、でも誰にそういう権利があるんだろうとか、そういうのは、すごいみんなブーブー言ってるのとかみかけたりしたし。」

「ミーティングは結構長くやってたんだけど、ほとんど上からの『こういうことはやらないでください。』『こういうこともやめてください。なら、帰ってもらいます。』みたいな、ほんともうピリピリした感じで、で、短期の人もあるから、そこまでいろいろ感じているけど、そこまで、こう、それは、違うんじゃないかとか言えないまま帰っちゃうって言う。」

また、丸山さんが参加した神戸元気村でもリーダーとその他のボランティアとの関係はよいものとはいえなかったようである。

「本部にいと、上の人と接する機会が多く、同じボランティアに上も下もないけれど、言いたい放題でこき使うというようなことが、しばしばありました。」

「特に上に立つ人達というのがほんとにストレスがたまっていて、(中略)そういう人達が当たり散らして、(中略)言いたい放題でこき使うという感じで、上に立つ人が人格面でしっかりしてないって言うか、(中略)ボランティアって言うものを分かっていなくて、ボランティアに来たんだからおまえら働かなきゃだめだっていう感じで」

3. ボランティアリーダーの疲労

ボランティアリーダーは、ボランティア団体に対し大きな影響力をもつものと思われるが、ボランティアリーダーがピリピリし、余裕をもつことができなくなった要因として考えられるものをインタビューレポートから挙げてみたい。

(1) 時期と団体の規模の拡大

まず、第一に、ボランティア内の雰囲気や様子は、時期により変化していったようである。

藤井さんは、3月に入ってから、ほぼ1ヵ月間ボランティアに参加したが、その間の変化を次のように述べている。

「入ってくる仕事も多かったし、あと、そういう長田が危険なとこだったっていう意識もすごいあったし、で、3月のはじめっていったら、ボランティアもどんどんどんどん来ている時だったから、でもそういう受け入れたらまとめなきゃいけないみたいな、すごいピリピリしたムードが。」

藤井：3月途中ぐらいからもうっていうか、20日ちょっと前ぐらいから、もう神戸の状況も落ち着いてきたから、ピリピリしていたそういうリーダー的存在の人達も余裕がでてきて、『誰も偉いとかそういうんじゃないんだから』みたいな感じで、ミーティングをこうホワイトボードがあって、リーダーが1人たって、こう列になって並んで、それで、こうやってしゃべっているっていう形式から、輪になって、っていうふうにかえたり、カードで、今日一日感じたこととか、そういう、言いたいことみたいな提出するようになったりとか、そういうのが変わったかな。

梅沢：それは、みんな、誰かが、その、他のボランティアの人達からの提案じゃなくって、そういう、いわゆる上の幹部みたいな感じになっている人達どうしが、『こういうふうじゃあやろっか』みたいな感じで、変えた点？

藤井：いや、うーん。っていうか、そういう声があがってたのをきくと幹部みたいな人もわかってたと思うんだけど、でも、もうピリピリしてて、そんな余裕ないって感じだったから、落ち着いてみて、よくよく考えてみたらみたいな感じで、周りに聴いてみて、『じゃあそうしよう。』って。」

藤井さんの参加した団体では、2月の後半から3月に入り、入ってくるボランティアの数が膨れあがり、リーダーたちは、団体の規模の拡大により、ますます多忙になり、余裕を失っていったようである。

また、梅沢さんも同じく3月に3週間ほど活動していたが、その当時のボランティア団体のリーダーの様子を次のように述べている。

「次々にやってくるボランティアの受入れとその把握、取りまとめ、仕事の割り振り、依頼される仕事の受け付け、把握、確認等、4～5名のリーダーたちが一挙に引き受けており、一時は70名近いボランティアのまとめだけで大変な時期もあった。」

(2) 住民とボランティア団体の関係

また、ボランティア内部の雰囲気には、ボランティア団体と住民との関係が少なからず、影響しているようである。

大量のボランティアが現地地に泊まり込むこととなると、「トイレを使い」「ゴミを出

す」こととなる。こうした宿泊型のボランティアは、被災者にとって有難迷惑にもなりかねない。

梅沢さんの活動したボランティア団体は宿泊型の団体であったが、次のような状況であった。

「彼女（梅沢さん）が宿泊していたのは、精神薄弱者のための作業所で、夜の間だけ寝場所として間借りするという形だった。ボランティアに来ているのは若い人たちが多く、しかも夜になればやることもないし、テレビもこれといった娯楽もないので、つつい騒ぎすぎてしまったりする。また、ボランティアがたくさん来たために、配給の食料も多く必要になるし、トイレもその分汚れる。それで避難所にいる住民から『一体なにをしに来たのだ。』という感情をもたれがちになってしまう。その点は、年上のボランティアからかなり厳しく注意を受けたという。『ボランティアに来てるっていうのは、どこか謙虚にしてないといけないところもあるから、ちょっとでも常識はずれなことをすると叩かれちゃうのね。』」

このようにボランティアは被災者の迷惑になってしまう可能性を含み、ボランティアリーダー達は、組織の維持と住民の意識との間で板ばさみになっていたことが考えられる。加えて、3月になり、団体の規模が拡大し、その維持のためにはリーダーは権威的にならざるをえなかったのではないかとと思われる。

これに対し、高橋さんの参加したボランティア団体は、被災者中心の団体であり、こうした住民との間の葛藤はなかったのではないかと考えられる。

「この救援グループの長所は、被災者中心であったことから、被災者が何を望んでいるかを把握しやすい状況にあった事だろう。」

4. 休息とミーティング・団体の意志決定権

(1) 「楽しみながら」活動するボランティア—構成メンバーによる影響

ボランティア参加者の参加団体は、対立的なムードの団体ばかりではない。三宅さんの参加した団体はそのような雰囲気はなかったようである。

三宅さんは調査論のレポートの中で、自分自身の体験について次のように述べている。「ボランティアに行った先でも、ボランティア団体の内部でもそれ程ピリピリした雰囲気は感じられなかった。それどころか、ボランティアで来ている人たちは『ボランティアは楽しみながらやらなければ続けられるものではない。』という考え方をする人が多かった。どちらかというところサークル活動の延長のようなものだった。（中略）だから、ボランティアに対する私のイメージは『楽しみながらするもの』というものであった。」

三宅さんの参加した団体は、厳しい制約もなく、楽しんでボランティアをしていたようである。

これに対し、藤井さんの団体では、「なんか頑張んなきゃみたいなの、なんかそういう周りのね、そのボランティアの人とかがいっぱいいて、『頑張んなくちゃ』、『当てにされ

てるな』っていうのは思ってきたから、それをこう、頭できたから『よく頑張んなきゃ』みたいなのがあって、『とにかく目の前の仕事やんなきゃ』っていうんで、むりやり騒いでたとかっていうのはあったけど」という雰囲気であった。

こうした違いはどこから生まれるのだろうか。まず、考えられるのは、リーダーやメンバーの特性である。三宅さんのてんかん協会の場合、リーダーはVYSのソーシャルワーカーであり、構成メンバーの多くは福祉系の学生である。この中で、福祉関係のメンバーが多いことから、ボランティア経験などの福祉的経験をもったことのあるメンバーがそろっていたこと、メンバーのボランティアに対するイメージや価値観が似たものであったことが予想される。

この結果、三宅さんのボランティア団体内の雰囲気は「楽しみながらするもの」となったのではないかと思われる。

(2) ボランティアの意志決定権

丸山さんの参加した団体では、ボランティア内部の価値観を巡って対立が絶えなかったという。しかし、小田さんの参加した団体ではそのような対立はなく、団体や作業の最終的な意志決定はリーダーである牧師さんにまかされていたようである。

「小田：私が、東灘でやってたときは、リーダーが教会の牧師さんなんですよ。その牧師さんの性格によると思うんだけど、私が一緒にやってたときというのはね、（中略）なんていうのかな、徹底的にやることはやるっていうような人だったから、本当に頼まれたことはやるっていう感じで、その辺私は結構ね、ていうか、例えば、その、同じ家に2日いくとかね。私なんか結構、他のお家をやった方がいいんじゃないかと、もう必要なものは取れたはずだと。でもその牧師さんは、いや、頑張ってる探しますからみたいな感じで、やるんですね。それは、本当に牧師さん、指示する人によってかなり、変わるものですよ。

寺内：全部、その牧師さんの指示に従ってやるんですか。

小田：そうですね。最終決断というのは。

寺内：じゃあ、対立とかしても、結局はそういうふう、その方向でっていうことに？

小田：うん。そうね、あと基本的に、2週間だし、こっちもそんなにそう、そんなに攻撃的な人、いなかったね。やっぱり、一緒に協力してやりましょうという気はあるから、そうね、多少意見は言っても牧師さんの言うとおりにっていうか。」

このように小田さんの団体では意志決定の所在がはっきりしており、団体内での役割分業がなされている。これは、小田さんの活動したボランティア団体が既存の団体であるため、もともと団体の意志決定権がはっきりしていたものと思われる。これに対し、丸山さんや藤井さんの参加した団体は創発型で、リーダーも長期的に活動している人の中から選ぶため、ボランティアとボランティアリーダーとの役割の違いが明確になっていないのではないかと考えられる。

また、高橋さんの団体では、被災者が決定権を握っている。このことについて杉浦さん

はレポートの中で次のようなコメントをしている。

「この救援グループの長所は、被災者中心であったことから、被災者が何を望んでいるかを把握しやすい状況にあった事だろう。ボランティア以外のメンバーが被災者中心であるのと、被災者以外の人中心であるのとでは、ボランティア内の援助体制等に関する意識に大きな差が生じるのではないだろうか。」

「友人の話になってしまいが、どういう援助を行うかで、ボランティア内で様々な意見対立があったそうだ。高橋さんにその辺を聞くと、ちびくろ救援グループではボランティア間の対立はまったくみられなかったという。それはやはり、被災者中心ということで被災者以外のボランティアが、ボランティアは何をするべきか実際に被災者と共に援助をしながら考えることができたからだと思う。」

高橋さんの団体では、被災者自身がリーダーとなっていたことで、その決定に説得性があったのではないかと思われる。

(3) ミーティング

全国から、いろいろな人がボランティアとしてやってくる中で、意見や価値観の違いは当然存在するものと思われる。また、最終的な決定権は、団体のリーダーが持っているとしても、ボランティアとして活動していく中で、たくさんの視点でものごとをみていくことは、団体側としても必要なことである。このことから、団体内でのミーティングは大切なものと思われる。

小田さんの参加した団体では、ミーティングは重視されていたようである。「ミーティングは、バッチシ。うちの牧師の先生はすごくしっかりしてて。朝にやって、昼にやって、夜にやって、1日3回ミーティングみたいな感じで。(中略)20分くらい。(中略)みんなの意見を聞いてくれるんですよね。」

また、寺内さんの参加した団体では、ミーティングは意見の調整ばかりではなく、癒しの場でもあったようである。

「就寝前のミーティングもボランティアの成長や意思統一のために重要な役割を果たしている(中略)。長期滞在で住民に感情移入するようになると、あまりの体験談に聞いているほうも辛くなり、落ち込むことがある。そのようなことは一人では解決できないもので、分かち合える相手としてほかのボランティアは必要だったそうだ。」

(4) 休息

ボランティアが長期に活動していく過程で、疲労していくのは当然である。丸山さんの活動したボランティア団体は、ボランティアの疲労回復についてあまり考慮がなされなかったようである。

「途中で辛いことがあったら、多少心を休ませてくれることもあるだろうと思っていたけど、上の人はそんなことを認めてくれない。」

「『ボランティアなんだから不満があるはずない。ボランティアに来たんだから、団体の

名前のおり元気じゃないんなら帰れ!!』といわれた。『自分でも協力できたら』というつもりで来たのに、そういう態度をとられて、3日や1週間で帰る人が続出していた。」これに対し、寺内さんの参加した団体では、「長期滞在の人にはYWCAの救援センターのコーディネーターが、一週間に一日くらいリフレッシュの時間を与え」という配慮がなされていたようである。

また、寺内さん自身、「活動していくうちに、自分が疲れてくるのを把握できるようになって、適度に休息をとれるようになった」という。

<おわりに>

阪神大震災のボランティア団体の中には、内部で疲労し、対立するボランティア団体がみられた。私がボランティアとして参加した団体でも、団体内部の深刻な疲労を感じた。私自身、これまでのボランティア経験が未熟であったせいもあると思うが、自分の描いていたボランティア像と現実とのギャップに悩んだりもした。

こうした自分自身の体験もあり、なぜボランティア団体内部が疲労したのかについてその原因を明らかにしたいと思った。

ボランティア団体内部の疲労の原因として、調査論のインタビューレポートから、メンバー間の価値観や意見のくい違い、団体の規模の拡大・住民との関係から起こるボランティアリーダー自身の余裕のなさなどが考えられた。そして、各団体の比較の結果、ボランティア団体自体が抱えていた疲労の要因として、次のことが考えられた。

第一に、団体内部の意志決定権の問題である。リーダーによる団体内の意志決定権がはっきりしていない団体では、援助の方法を巡って意見の衝突が起っていた。

第二に、構成メンバーである。構成メンバーの属性や考え方がばらばらな場合、リーダーがその集団をまとめるのは容易ではない。しかし、構成メンバーが似たような考え方をもつ場合は、団体としての決定をする上で、大きな摩擦は生じにくいと思われる。

また、阪神大震災は、ボランティア元年と呼ばれ、ボランティアをすること自体初めてという人が多かったようである。こうしたことから、ボランティア自身のボランティアイメージの貧困が考えられる。

外部から参加したボランティアは、知らない土地で、知らない人たちと一緒に、あまり経験したことがないボランティアを行ったのであり、これはかなりハードなことだったのではないかとと思われる。従って、ボランティア経験の少ないメンバーが多数を占める団体は、疲労しやすい要因が備わっていたのではないかと考えられる。また、ボランティア団体の成立ちがリーダーや構成メンバーのあり方を左右している可能性を考慮に入れるならば、創発型の団体において、ボラ

ンティア団体内部の疲労が高かったことが予想される。

次に、各団体のボランティアの疲労や対立の対処について、簡単であるが、考察したものをまとめてみる。

まず、決定をするもの、意見を言うものという役割の明確化が必要である。すべての人が平等なボランティアであり、どの人もその人なりの意見や企画や考え方をもっている。これらのボランティアすべてがそれぞれの企画を実行しようとするにはある意味ではすばらしいことかもしれない。しかし、団体としてそれらのことを行っていくとする場合、やはり決定権の明確化は行っていくべきだと思う。決定する専門性をもつということは、ボランティアの平等性とは矛盾することではないと思う。

また同時に、ボランティアの意見を吸いあげていくことも重要である。ボランティアが自分の意見を表明する場がない場合、リーダーとその他のメンバーとの断絶はまぬがれない。はっきりとした対立が起こらなかったとしても、何のために活動しているのかについて、団体の活動意図が不透明になり、自分の活動の意味付けができなくなってしまう可能性がある。また、ボランティアの自発性が失われてしまう恐れもある。

そしてまた、長期的に活動しているボランティアには、休息の場が必要である。目の前の被災地の状況しか見えなくなってしまうのは、ボランティアには陥りがちなことである。このため、ボランティアは、誰かが休ませてあげることが必要である。ボランティア団体自体が、休息をとらせるような工夫をするべきであると思う。

以上、ボランティア団体内部の疲労と対立の原因とその対処について不十分ではあるが考察してみた。

阪神大震災以後、日本のボランティア事情やノウハウの貧困が露呈される結果となった。しかし、阪神におけるノウハウは、今後も生きていくものであると思っている。

<村瀬 千晶>

I 国際ボランティアとともに ー小田さんの場合ー

1. インタビューの形式と情報の使用に関する確認

中島：改めて、今日はどうも、僕たちのために、来ていただいて。

小田：とんでもない。ありがとうございます。わからないですけども。

中島：で、一応、あの、テープにも録音して、メモとかも取らせていただきながら。

小田：ええ。

中島：お話を伺うという形にしますので。

小田：ええ。

中島：一応は、その、授業で、石原先生にレポートを出すというような。

小田：ええ。

中島：感じで使わせていただくことになっているんですが、ちょっと、石原先生が、このあいだ、授業の中で、もしかしたらその中の一部をまとめて、公表したいという話になるかも知れませんので、その時は、また、改めて連絡させていただいて。

小田：はい。

中島：確認させていただくということになりますので。その時は、またよろしく願いいたします。

小田：はい。

2. 話者と所属した団体について

(1) インタビュイー（話者）のプロフィール

中島：ということで。先ほど待ち合わせの時に話し合っ、この二人は [中島、寺内] 神戸のボランティアに行ったことがあって、行ったことがない視点でまず話を聞いて、その後、こちらの視点も含めようという感じで、進めればいいんじゃないかなと。

沢井：じゃあ、まず、お名前を伺わせていただけますか。

小田：小田です。

沢井：おいくつですか。

小田：おいくつ？ はい。23です。

沢井：所属の方はどちらですか？

小田：所属の方ですか？ 都立大学人文学部社会福祉学科。性別とかは抜かしてくれたのね。

沢井：もし差し支えなければ、生まれの方はどちらですか。

小田：東京です。東京の世田谷です。

沢井：震災のボランティアに行く以前はどんなボランティアを？ もし、やっていらっ

しゃったら。

小田：えっと、大学の2年か。ざっと順番でいうと、一番はじめに障害者の子どもたちを、養護学校に通っている、それは明星、明星養護学校だったかな？ 梅ヶ丘にある。その子どもたちを一日だけハイキングとか、それから、痴呆老人のお年寄りを対象にした、あの、ディケアセンターで、1カ月くらい、週1回くらいだったんですけど、ですから計4回、ボランティアと。

寺内：うわあ、すごい。

小田：後、やったのが、海外協力で、あの、日本国際ボランティアセンターという国際、そうですね、海外協力NGOなんですけれど、翻訳とか、資料整理とか、資料を集めたりとか、たまにニュースレターの記事を書いたりとか、発送とかそういう感じでやっていました。

(2) 震災ボランティア参加の動機

沢井：今回、ボランティアに参加する前では、どのような動機で行かれたんですか。

小田：今回のボランティアに参加したときは、あのう、そう、そうですね。やっぱり近くに日本の中で災害が起きて、出きることはやりたいということですね。一番がね。助けが必要ならば、できることはしたい。させていただきたい。ということで。あと、もう一つ、その理由としては、今後、自分の為にもいいことだと、神戸で働くっていうことが、何かプラスになるんじゃないかと。

沢井：それは具体的に、こういうプラスがあるって思った訳じゃなくて、何となくっていうか？

小田：何となくだよ。もし、その、現地でまだ何をするか解ってなかったから、どこの団体を通じてね、行くことになるか解ないと、何をするか解ないけれど、もし、その、非常用の食料、非常用品というのかな、非常品とかも、分配する係りを任されたら、そういうこと、経験ないじゃない。具体的に。だれにどう回したらいいかとかさ。それ以外に、あと、もしかしてそういう、何でもいいんだけどさ、じゃあ、炊き出しの分野のリーダーになったとしたらさ、年上の人と一緒にやっていくとか、そういう、人を組織化していくとか、そういう意味の練習になるんじゃないかな、経験になるんじゃないかな。

沢井：具体的には、それをどう？ 今の生活に活かそうとか、そういうことも？

小田：そうね。具体的に海外協力のNGOで働きたいというのがあって、どこでもいいんだけどさ、タイとか、そういうとこで、何年間か働きたいって希望があったんで、それと、神戸のことは同じじゃないだろうけど、なんか、役に立つんじゃないかなと、漠然と私は思ったんで。

(3) 参加期間と所属団体について

中島：えっと、何月何日ぐらいから、神戸に？

小田：えっとね。3週間行ったんですね。帰ってきたのが3月4日だったんだけど。

中島：具体的には、現地では、神戸では、どういった団体、ところ？ そろそろ、神戸の話をしてもらうと。

小田：そうですね。えっと、参加した団体は、えっと、日本国際飢餓対策機構というところで、日本国際飢餓対策機構。で、それ、その団体の、団体というのはあの、世界にあるんですよ。国際飢餓対策機構っていう。もともと、どこなのかな？ イギリスに本部があるのかな？ Food for Hungry っていうんですよ。それで、日本支部が、海外で緊急援助とか、開発援助、持続的な開発援助というか、しているところなんだけれども、そのノウハウを活かそうということで、神戸でもやるっていうのを決めたんです。それで、あとその団体というのは、キリスト教の団体なんですよ。キリスト教の団体っていうか、やってる人たちはみんなキリスト教精神でやっているんで、で、その団体と、神戸にある教会が協力してやってるプロジェクト、そこがやってるプロジェクトの一つは、復興プロジェクトというのと、もう一つ、医療プロジェクトがあったんですよ。それで、復興プロジェクトというのは、教会と一緒にやるので、教会の信徒さんですよ。その信徒さんの家だとか、まあ、教会の回りに住んでいる人とかのお家で崩壊しているとか、半壊とか、全壊だとかいうお家から家財道具を取り出して、あと、家財道具は自分たち家族で取り出すことができたのであれば、それに引っ越しの手伝いですよね。安全な場所にものを移したり、あとは、家の中に壁に穴が開いたから壁の穴塗ってくれるかとか、あと、すごかったのは、外壁を直してくれっていうんで、その外壁を直したんですよ。ああ、それも、あったんですけど、で、もう一つあったのが医療チームで、医療チームは避難所を回るんですよ。避難所を回って、お年寄りの話を聞いたり、あとは、とりあえず話を聞く方が多いんですよ。ある程度、道具は持って行くんですけど、血压計ったりとかね、基本的には話し相手っていう感じ。それで、あの、私がこの団体を特に選んだっていう理由はないんですけど、ただ、いろいろ団体を問い合わせ、ここから連絡が来たから行ったんですけど。ここの団体の特に特徴的だったのは、あの外国人ボランティアと一緒にやってたんですよ。なんでかという、教会と一緒にやってるということでカナダとかイギリスにその、神戸にある教会と同じ系列の教会とかありますよね。それで、その教会が、神戸で震災起きたから、手伝いたい人って集めて、で、主にカナダとイギリス、タイとか、後はコロンビアとか、カンボジアが一人いて、あと、アメリカ人ですね。で、来たんですよ。自費で来て。

寺内：それは、日本に住んでるっていう訳じゃなくて。

小田：来たの。

沢井：現地からいらしたんですか。

小田：そうそうそう。それは、教会が声をかけたんだけど。で、そうですね、現地の教会にきている普通の人たちが、何人かは、その日本国際飢餓対策機構のタイ事務所か

ら来たとか、その団体の事務所を通して来たとか、教会じゃなくて、それで、外国人と一緒にやるとこだったんで、少し、私の仕事としては、少し通訳的なこともあったんですけど、そうですね、いいんですか？ 続けちゃって？

中島：はい。

3. 現場での体験

(1) 活動内容

小田：続けさせていただきますと、私が加わったのは、復興チームで、大工仕事の方だったんです。で、その復興チームが活動してたのが、西宮と、あと、芦屋と東灘だったんですよ。で、私は、はじめの1週間は芦屋にいたんですよ。芦屋は、あんまり、崩れている家、あんまりないんですよ。あるんですけど、元々お金持ちが多いから、きれいな家も多いし、それなんで、芦屋ではそれほど、ひどい家は見ませんでした。崩れている家とか、芦屋で主にやっていたのは、その教会、芦屋コミュニティチャペルという教会があったんだけど、その教会で、東京とかから送ってくる物資、援助物資、それを分配したりとか。

寺内：分配っていうのは、分けて届けに行くんですか？ それともそうじゃなくて？ それとも取りにくるんですか？

小田：取りに来る。あの、炊き出しみたいに場所を作るんですね。テントみたいな。テントをつくって、それで、ちり紙とみんな欲しいんだよ。近所の人、毎日来るのよ。ひどい人だとふたつ持って行ったりするから、まあ、必要か必要じゃないかを聞いてお出ししたりとか、ちり紙とかだとね、どんと置いてほんぽん持って行かれてもいいんだけど、やっぱり、その、みんなに平等にいくようにしたいから、来た人に、きれいな下着があるんだけど、いらない？とか、出すようにして。古着を出したりとか、そういうことはしているんだけど、あとは、そのご飯とか、やっぱりね、芦屋は、水は、通っているところは通っていたんですよ。私が行った時期は。大体行ったのは、2月の2週目位から行ったんで、水が通っているところは通っていたんですよ。ですから、そんなにみなさん、電気も通っていたし、苦勞しているってことはなかったんですけど、やっぱり、あったかいご飯とかあったかいスープとかは喜ばれていた。何でかという、避難所には冷たいパンとかそういうものしかなかったから。そういう感じですね。芦屋に1週間いたときは、炊き出しっていうのを中心でやっていて。で、2週目、3週目は、東灘区に移ったんですよ。東灘区はもうひどくって、もう灰はすごいし、家も崩れてるし、でやっていたのが、ほんとに崩れた家からものを取り出すんですよ。たまに、芦屋にいたときは外国人の人とそんなに一緒にやっていたんですけど、東灘に行って、外国人と一緒にやるようになって、その中で、アメリカ人とカナダ人の大工、ペンキ屋と大工、いわゆる家の構造とか詳しいからその人たちが中心になるんですけど、たまにその人

のすぐ後ろについて、通訳しながらやるとすごい大変というか、例えば、家の主がいないと、ものを取りだしちゃ失礼に当たるから、崩れた家に、木をどかして、入って行って、家の人を外で見えて、例えば、貯金通帳を取って欲しい、貯金通帳ってというのは、僕の部屋、2階だったんだけど、その左側にある押入に入っていたからそれを取って欲しいっていてもわからないでしょ。落ち方が違うんだから。その辺どうにか説明して、じゃあきつとこの辺だねって言って、一緒に入って行って、一応通訳必要だから、ほこりだらけの中に入って行くんですよ。で、喉は駄目になったりしたんだけど。それで、活動ですよ。どうにか本人が、被災者の人が希望するものを取り出す。

沢井：あの、住んでる人、家主さんは入らないんですよ。中に。

小田：家主さんも、比較のお年寄りの人が頼んでくるから、お年寄りだと、やっぱり危ないからこっちも入らないでっていうんだけど、若い人だったら。

沢井：一般の人が入れないくらいひどいから、そういう専門家が入って？

小田：そう。一応そういう基準があって、なんか紙がありましたよね、黄色い紙とか。

寺内：あ、赤紙。

小田：黄色い紙とか。赤紙はどうなんだっけ、駄目なんだっけ？ とにかく、黄色位でも、赤紙、かなり危険なところ入ってた。結構無視して。私たちは。

沢井：ボランティアの人は、一緒に専門の人と入ってことですよ。

小田：そうそう。みんなヘルメットかぶって。男の子なんかみんなどンドン入っていつちゃう。でもたまに、アメリカ人一人は大工で本当に専門だったんだけど、もう一人はペンキ屋だから、ちょっとそういうことにたずさわったことがあるくらいで、専門じゃないですから、基本的に素人がやってた訳。それはなかなかすごいんじゃないかと思うんだけど、でも、まあ、その大工さんがいれば、例えば、この、家が崩れていても、この崩れ方は、タンスでこの柱がこうなっているから、支えているから、この間に入るのは大丈夫だ。あと、やっぱり判断はピシピシとやってくれるんだよね。そのタンスが本当に奥の方にある場合は、屋根、瓦とか崩れてたら瓦を取って、屋根に穴をあけて取り出そうとか。

沢井：上から？

小田：うん、上から取ろうとか。下から行くのは危ないから上から行こうとか、そういう判断は、そうね、ある程度はしてくれたから。けが人はでなかったからね。

沢井：良かったですね。

小田：そうそう。ちょっと手を切ったりとかね、それはあるけど、けが人は。ん、でね、被災者の人がどういうものが出て欲しいっていうかというね、着物とか、あとね、笑っちゃいけないんだけど、貯金通帳とか、あと、おじいちゃんの肖像画とか、やっぱり思い出のあるもの。現金はもうやっぱ、みんな持って逃げてるみたい。あと、免許証とか、免許証とか一番探すのが大変なんだよ。

沢井：免許なんかは紛失でまた再発行すればいいようなものですよ。

小田：そうだね。その辺よくわからない。探してっていわれたら探してただけど。

寺内：緊急事態だから。

小田：そうそう、緊急事態だから、結構すぐ出ない。なんかあるじゃない。行政の。そんな感じですね。壊れた家からものを取り出す。

沢井：頼まれれば何でもやるって感じですか？ それとも、これはなくても取りあえずは大丈夫だろうっていうのは断っちゃうっていうのも、ないですか？

小田：それはね、本当に、私が、東灘でやってたときは、リーダーが教会の牧師さんなんですよ。その牧師さんの性格によると思うんだけど、私が一緒にやってたときというのはね、非常にね、実際、他の牧師さんっていうのは、活動に加わったりしないんだけど、その牧師さんは自分で車を運転して活動に、中にまで入ってくるような人で、で、なんていうのかな、徹底的にやることはやるっていうような人だったから、本当に頼まれたことはやるって感じで、その辺私は結構ね、ていうか、例えば、その、同じ家に2日行くとかね、私なんか結構、他のお家をやった方がいいんじゃないかと、もう必要なものは取れたはずだと、でもその牧師さんは、いや、頑張っって探し出しますからみたいな感じで、やるんですね。それは、本当に牧師さん、指示する人によってかなり、変わるものですよ。

寺内：全部、その牧師さんの指示に従ってやるんですか？

小田：そうですね。最終決断というのは。

寺内：じゃあ、対立とかしても、結局はそういうふう、その方向でっていうことに？

小田：うん。そうね、あと、基本的に、2週間だし、こっちもそんなにそう、そんなに攻撃的な人、いなかったね。やっぱり、一緒に協力してやりましょうという気はあるから、そうね、多少意見は言っても牧師さんの言うとおりにっていうか。

寺内：毎日、夜にミーティングっていうか、話し合いの時間は持っていたんですか？

小田：そう。うん、じゃ、細かいことを言うと、まずは、朝起きて、朝8時くらいに起きてお祈りをするんですよ。お祈りした後、先生が、人数が多いんですよ。YMCAとか聖書研究会とか、けっこう、日によって12人とかいたり、そう、結構その人数が余っているということもあって、で、牧師先生が、このグループはここ、このグループはここっていうふうにするんですよ。

寺内：一グループ、何人くらいですか？

小田：一グループに、行く場所によるんだけど、さっきちょっと言ったんだけど、外壁をやった、コンクリート、あれは人数がいったからかなり行ったんだけど、そういう時以外、いわゆるこの崩れた家からものを取り出すときは6、7人。人が多ければもちろん多く連れていっちゃうんだけど、でも、あんまり多く行っても。

寺内：何グループくらいにわかれて？

小田：だから、2グループでしょう。多くっても。

寺内：ああ、そうかそうか。

小田：ただ、なんとかさんのお家でちょっと冷蔵庫動かして欲しいとか、そういう仕事

ある場合は、二人は、その例えば山本さんの家に行こうとか。そう、ミーティングは、バッチシ。うちの牧師の先生はすごくしっかりしてて。朝にやって、昼にやって、夜にやって、1日3回ミーティングみたいな感じで。

中島：30分ずつくらい？

小田：うーん。20分くらい。

中島：わりと、みんなの意見を聞いてって感じで？

小田：そう。そうですよね。みんなの意見を聞いてくれるんですよね。

沢井：意見と言うのはどういう内容？

小田：そうですね。例えば、この山本さんの家は、ふすまを直すだけだから2人でいいんじゃないかとか、例えば牧師の先生が3人連れて行きましょうと行ったら2人でいいんじゃないかとか、そういう人数の問題とか、あとは、やる内容はもう、こっちも言ってもらえないから、それはやりたくないとか言わないから、基本的にはもう、人数の問題、あと、時間とか、午前中にこの家に行った方がいいんじゃないかとか、まず、朝、あの田中さんちに行って、何が必要か、家の修理をするから何が必要か、見てから買い物に行つてとか、プランとか、そのようなことをちょっと言ったりしました。あと、そこの教会で特別にやってたのは、午後、近所の子とか集めて、勉強会とかしてたんですよ。それは、たまたま聖書研究会関係からやって来るボランティアたちが教育専攻してて、そういう教育プログラムをというのと、折角カナダ人の女の人に来てたから、英語とか教えたりとかそういうことを、そういうことをやっていたのは、まあ、元気づけるということもあったんだろうね。いわゆるそのつどいの場をつくってたんだ。

寺内：集まってくる人、子どもたちっていうのは、避難所から来る子でしたか？

小田：ああ、私には、そっちの方出たことないからわからないんだけど、でも、避難所よりもむしろ、家は一応あるんだけど、やっぱり家の中、ぐちゃぐちゃしてんのか、水が出ないんだとか、そういう意味で、問題のある子が来るんじゃないかと。

沢井：子どもの様子とか雰囲気は？

小田：雰囲気は、すごく元気良かった。私たちも、その、外回りするじゃない。その後に帰ってきて、サッカーをやるのね、いつも夜ご飯の前に、すごく盛り上がり、イギリス人の人とかサッカー、超うまいじゃない。それでいて、しかもその教会が6人兄弟だったのよ。6人兄弟で、ちっちゃい子、3才くらいからいるわけ、高校生ぐらいまで。それに近所の子とか、加わってさ、それにカナダ人とか加わってさ、サッカーをぐちゃぐちゃのチームでやるとおもしろいんだよ。こんなでかいイギリス人がさ、こんなちっちゃい子どもに防御されるわ、サッカーっていうのは。そういう意味で、国際交流とかいう、家では水道が出ないとか問題抱えている中でちょっと、ぎゃあぎゃあやってるとおもしろいとか、

沢井：じゃあ、わりと明るい雰囲気？

小田：明るい雰囲気とかはそうですね。あとは、仕事はそうなんです。ものを取り出す仕事

なんですよね。一つ、壁を直したりとか、さっきも言ったんだけど、で、一つ、問題だったのは、すごくお年寄りでね、その人が垂水に住んでたんですけれども、あの、外の壁がモルタルだったのかな、ひびが入って、剥がれちゃったんですよ。それで、牧師先生がその、牧師先生とすごく親しい人だったから、その、先生ができますと言ってしまったんですよ。できますと言ってしまった後に、その時点で、一人いたアメリカ人の大工は、アメリカに戻ってしまっていたんで、残っていたのはカナダ人のペンキ屋と、あと設計、というか？

中島：設計と言っても、現場に行かない人？

小田：デザイナーの人が残っていたんだけど、その二人と後ボランティアだけしかいないじゃん。それで、コンクリートつけて、外壁直しますと牧師先生がいっちゃったのね。ちょっと問題だったというか、そのときは、だって、1週間くらいしか時期がなくって、コンクリートは乾かしたりしなくちゃいけないとかあったり、天候がちょうど雨だったりして、僕たちにできるか、とか言ってたんだけど、もう、やるって先生が決めて、やって、ちょっと心配したのは、一応まあ、終わらしたんですよ～。それこそ高校生の男の子とかセメントを塗ってさ、私も塗ったりしたんだけど、みんなで分業してね、あの台みたいななんあるじゃん、建築現場でね、鉄の台。

沢井：ええ。

小田：ちゃんと立てて、ばああって塗ってさあ、みんな、素人でやってたのよう。それだけど、後になって結局ね、大工さんに頼まなくちゃいけないことになるんじゃないかと、イギリス人のデザイナーなんかも考えていて、その辺すごい。特にそのキリスト教の精神ていうのかな、単なる・・・

沢井：キリスト教じゃないんですよ、宗教？

小田：私、違うんですけど、牧師先生があそこまでしてやりたいと言ったのは、たぶんキリスト教の精神じゃないかというか、いわゆる厚意のほう、気持ちの方を大切にするっていうことでしょうか。そのできばえとかさ、でも果たして良かったのかとかいうこと思うんだけど。だから、そうなんですよ、おじいちゃんの肖像画を探すために2日間同じ家をやったというのは、あれは気持ちっていうかさ、キリスト教っていうのは、贈り物しても愛がなければ意味がないとか言うじゃないですか。そういう精神なのかなと思ったりしたんですけど。

中島：なんか、神戸で、出会った人で、特に印象に残った人っていうか。こんな人がいたとか。まあ、実際訪問して行って、しばらく1時間くらい長話とかすることもあつたでしょう。

小田：いやあ、それはなかったんですよ。

中島：ああ。

小田：全然話しないで、すぐにあの、

中島：頼まれた仕事、一応終わったら、すぐ帰ってくる。

小田：でもね、すごい、あの、1軒、外壁を、コンクリートを塗った人のお家はね、一人暮らしのおばあさんだったから、できればはともかくとしてよろこんだんでね、若い男の子たちがばあって行ってさ、女の子もそうだけれど、あと、カナダ人とか外国人とか、行ってさ、その人が今どんな問題を抱えているかとかそういうことは聞けなかったんだけど、なんて言うのかな、とにかく喜んでたよね。普段は一人で寂しいんですよとかいうことは、言わないんですけど、あのハシャギよう見たら、普段は寂しいんだなっていうことは、察することはできる。後は、特に話した人はいない。

中島：まあ、ボランティアの中でもいいんですけど。

小田：ボランティアの中でもいいんですか？

中島：はい。

小田：一人、牧師さんでやっぱり、奥さんがいて、まだ若いんです。25。ちょうど奥さんが赤ちゃん生まれたばかりで、その人の話しがすごかったんだ。なんかね。夜、地震が起こったでしょ、あ、朝か。こういう状態で、机とタンスのこういうところに、おなかの中には赤ちゃんがいて、こういうふうになさ、すごいな、助かって、おなかの赤ちゃんも無事で。そういう話しをして、まあ、良かったなって言うか、思ったんだけど、その牧師さんがね、自分と歳がそんなにかかわらないこともあったんでしょうけど、すごいやってるんですよ。朝から、炊き出しやって、夜遅くまで働いて、で、自分の教会はぐちゃぐちゃになっているんだけど、きちんと礼拝をやらなければならないとあって、日曜日はちゃんと礼拝をやって、休み無しで働いて、そこはすごい心打たれた。まあ、キリスト教すごいなっていう、そういう意味で宗教の強さっていうのかな。なんていうの。よくやるわっていうか・・・

(2) ボランティアたち自身の生活

寺内：3週間、行ってましたよね。で、小田さんが泊まる場所はずっと一所だったんですか。

小田：えっとね。1週間目は、芦屋にいたのね。で、2週間目、3週間目は東灘区に。教会で。

中島：泊まるのは、教会の中で泊めてもらったんですか？

小田：うん。

寺内：食事とかはどうしてましたか？

小田：あ、食事。日本国際飢餓対策機構から一応お金は出たんですよ。それで、野菜とかが来たんで、それで料理して。

寺内：調理したものを？

小田：後は、避難所からも少し。

沢井：どんな感じの生活でしたか？ 自分自身の、ボランティアの生活というのは。

小田：うん。もうちょっと、被災者の意見、実際しゃべりたかったというのがあったんで

すね。自分自身の生活と言うと結構、こういっちゃあれなんだけれど、おもしろいっていうか、なんか、すごくワイワイしてて、でも、水とか使えないの不自由だと思った。でも、そんなにね、水使えないっていっても出ないわけじゃないし、汲みに行くのもすぐそこなんだよね。道路にちょっと歩けばあるから。私はすぐ、途上国と比べてしまうんだけど、そういうのとは違うなとおもって、大変だろうなって思っただけ。そうですね。ただ、私の場合、3週間でしょ。で子どもとかがいてさ、あと外国人もいて、それで楽しいなっていうこともあるけど、プライバシーはないし、それで、被災者の方々の心境考えると、夫を失ったとか、ローンがまだ残っているとか、家が崩れたとかね、そういう状態で、ああいうごちゃごちゃごちゃごちゃしたところで暮らして、お風呂もそんなちゃんと入れない、かなりつらいだろうなと思って、お風呂入らないの慣れちゃった。なんかこう、でも私が行ったところはいい場所で10分くらい歩けばお風呂屋さんがあったのかな。まあ、1週間に1回は、行くようにしてたんだけど、生活はまあ、すごい、朝8時にミーティングして、一緒にご飯食べて仕事に行って、帰ってきて、それで、夜お風呂に入らないでみんなでご飯の後カードとかゲームして、寝てって感じで、お祈りとかなんか結構つらかったっていうか。

(3) 震災ボランティアに参加する人々について

中島：日本人で、他にボランティアに参加している人って、どういう人が中心でした？

小田：学生が多かったです。聖書研究会とか、そういうYMCAとか。

寺内：やっぱり、キリスト教関係？

小田：うん。

小田：どのくらい行ってたんですか？

寺内：私ですか、私は2週間。

小田：何を通じて？

寺内：私は、クリスチャン系なので、神戸YWCA、中央区にあるところです。

小田：中島さんは何で行ってらしたんで？

中島：えっ。1週間くらい、YMCAで。

小田：だけど、地元ですよ？

中島：そうです。なんか、大阪YMCAに電話して、どこか一人で、1週間くらい行ける場所ありませんかって聞いて、で、長田区のYMCAを教えてください。

小田：私も長田区に行きたかったんですよ。どんなことを？

中島：ぼくの場合は、わりと、YMCAがやっているっていうより、そこらへんの市民が、YMCAを事務所にしてやっているっていう感じで、だったんで、すごく、おもしろかったっていうか。ボランティアにすべて任せちゃうんですよ。

小田：ああ、なるほどね。

中島：そのグループの区分けから。100人くらい、多い時は、いて、それを6つくらい

の班に分けて、その班の中でまた、2人とか、3人とかずつペアを組んで、訪問をずっとしていったりとか、ぼくが行ったのは、5月の末、いや、5月の初めのゴールデンウィークで、もう3カ月くらい経って、ぼちぼち100日目やから、100日目で、お祈りでも、お祈りっていうか、お花でも、手でもあわせよとかかいう雰囲気の中だったんですけども、避難所に、僕なんか、あの、なんか、布団乾燥器をずっと持って歩いて、ずっと、ゴールデンウィーク、雨が続いてたんで、布団乾燥しませんかって言って歩いてたら、曹洞宗のボランティア会の人やっぱり2人くらいで歩いてて、なんかあったら情報交換しましょうとか、言ってたですけども、実際はあんまり情報交換はされてなくて、おんなじ人の所に、いろんな団体が重なって入ってしまったりとか。

沢井：やっぱり団体同士の連携とか、ばらばら、いろんな団体がやってますよね。勝手にといったら、言葉悪いかもしれないけれど、自分たちがやりたいようにやってるんですか？ ボランティアって。

中島：時期によってたぶん違うと思うんですよね。でも、僕が行ったときも、連絡は取りながらも、細かい、先端の部分っていうか、どこに誰が行くかっていうような部分はボランティアに任せるみたいな形で、やってるところがわりと多いと思うから、結果的に重なっちゃうとか。

沢井：同じような活動をやってるところがあったとして、例えば、壁を直すとかいうのが、幾団体もあって、それは、別に地区割りもされてなくて、そのテトリーから抜けちゃう家が出てきちゃったり、っていうのは、わからないんでしょうか？ どの団体にもカバーされない。重なっちゃう場合はまだいいじゃないですか。

(4) ボランティア活動の問題点と行政施策の矛盾

小田：それは、いっぱいあるかどうか分からないけど、もともと私は、あれ、やりたかったんだ。お年寄りとか、障害者。はじめ障害者の方に申し込んだ。なんでかというのと、やっぱり、障害者の人とか避難所まで行けないとか、炊き出しまで行けないとか、そういう人たちを探索するみたいなやりたかったんですよ。そういう、なんて言うか、要するに、なにか、どこかの団体に連絡取れる人はいいですけど。

沢井：そうですね。基本的に行政がやってるのっていうのは、その避難所にこないと。

小田：うん、うん、うん。

沢井：ご飯ももらえなかったりとか、普段から家から出られない人はどうなるんだろうと。

小田：そう。ほんと、行政がやってるとそうだよな。ボランティアだと

沢井：なにか、ボランティアやってて、なにか矛盾とか、行政に対する矛盾とか、例えば自分たちがやってる中でも、疑問に思ったりとかいうことは、ありましたら、なにか？

小田：なんかね、食料、避難所とか、物品とかあるじゃない、そういう援助のものをもらう時に、すごく厳しくなったの。なんか証明書を見せないといけないとか。何故かという、ふつうの人でそういうの持ってって売っちゃう人がいるからって。それはまあ、別にやってもいいことだと思ったんだけども、そこまで疑わなくてもっていう気はしなくもない。

沢井：証明書っていうの、どういうの？

小田：わかんない。それ、聞かなかったんだけど、そういうのがあるって。

沢井：それは、確かにこの家は壊れましたっていうのとか？

小田：うちの団体は、こういう経歴があって、こういう活動をしていますとかいうのじゃないのかな。そうね。私はわかんないな、その辺。

中島：5月の時点でも、かなり、不平等感をすごく訴える人がいましたね。なんか、避難所。避難所じゃなくて、仮設住宅、何回も申し込んでいるのに、全然当たらなくて、かと思えば当たったのに、実は家があって、そこも住めるから、仮設住宅は狭いからって、物置にしているとかいう人がいたりとか、なんか、そういうことをすごく、あの、言ったりとか。

小田：ずるい。

中島：そう、ずるいってね。あとは、避難所から家に帰れるのに、避難所にいることによっていろんな援助を受けられるし、その、仮設住宅の抽選でも、避難所にいるっていうことで、優先されるからっていうことで、帰らない人とかもいるとか。そういうことを、地元の人にすごく、愚痴を聞いてるっていう感じで話しをずっと聞いて回ってたんですけど。

小田：その方が、実態わかりますよね。

寺内：そういう話しは全然聞けなかったんですか？

小田：全然聞かなかった。もう、肉体労働ばかりで、

寺内：ああ。じゃあ、ボランティア同士の結束は固いっていうか？ 人のつながりっていうか？

小田：ああ。ボランティア同士はすごい仲がいいよね。いつも一緒にものを取り出してるからさ。

寺内：ああ。やっぱりでも、ずっとやってると疲れとかたまってきますよね。精神的なのとか、そういうのはなかったですか？

小田：それ、全然なかった。ずっといたかったもん。あと、他んどこも見たかったから。あと、被災者の話し聞いたかったから、そういう意味ですごい残りたかった。そういう疲れはなかった。でもやっぱり、灰に喉をやられたけど。

(5) 現場で求められる人材

沢井：なんか、ボランティアでもやっぱり、なんていうのかな、公共の電波を使って募集するときには、お医者さんの資格を持っている人とか、看護婦さんとか、あとは、大

工さんとか、そういうの言いますよね。実際行ってみて、こういうことができる人が、欲しいっていうのはありました？ やっぱり大工さん？

小田：そう、私は大工仕事をやってたから、やっぱり大工さんが必要だと思ったけど、その、何て言うのかしら、中島さんが言ってたように、単に話しを聞きにいくと、被災者は何を求めているかとか、それは普通の人でもできることだし、それで普通の人が行くのは、いいと思うけど、ただ専門家というのは、特にちっちゃい子の複雑なそういう発達段階で震災とか起きてね、そういう心のケアというのはやっぱり専門家の方がいいだろうし、後は、お年寄りの家を回るのも看護婦さんの方がいいだろうし、そういう意味で専門家の方がやっぱり必要とされてると思うけど、ただ、普通の人でもできないことはないと思うけど。普通の人には、その専門家の援助に結び付けることができるから。そういう意味で資格のない専門家じゃなくても学生が行く意味はあるんじゃないかと思う。あと、どんな人が必要か。弁護士さんとか必要だったんじゃない。

沢井：ああ。それはどういった。

小田：ローンとかそういう。

(6) 現場でしかわからないこと

沢井：行く前と行った後で？ 行く前はやっぱりテレビとか見てすごい状況でしたよね。行ってからという、イメージ違ってたところとか、あ、やっぱそうだったのかっていうようなことがあります？

小田：やっぱりその、すさまじいっていうかね。その、崩れた家、見るじゃない。見て、アッって感じだよ。あと、やっぱり壊れた家からもの取りだしたときも、両親死んだとか、そういう話しを聞くと、悲しいよね。実際本当に体験、感じることができる。やっぱ聞くのと見るのは違うさ。実際両親亡くしたって話すのとき、いわゆるニュースで見るのは違う。実体験というのはやっぱり違うと思うんだけど、ただ、わたしはね、東灘区はひどくても、やっぱり長田区とかの方がひどかったから、そういう意味でほんと、ひどかったところは見てないから、テレビ見てるとき、ほんと、ひどいところを映してることもあるじゃない。そういう意味での違いはあるんだけど。

沢井：テレビで見てると、ほんとにひどいところ見ると、ああっていう映像の衝撃みたいなことってあるけど、中途半端に不自由を感じているところっていうのは、長引けば、映像としてはショッキングじゃないかもしれないけど、たぶん、水道が止まったりとか、実際に暮らしていると、かなり不自由さがあったり？

小田：うん。でもね、大丈夫っていうか、一応配給が来るじゃない。水の配給が。なんかね、私がいたときはね、こう道路があって、道路の何メートルおきかにね、水道があったのよ。だから、それはそんなにたいへんじゃないと思ったのね。もちろん、私がいた教会が水道があるところから近かったんだけど、

寺内：それは、東灘ですか？

小田：芦屋。芦屋の時は、水道がでたの。

沢井：その水は衛生的にはいいの？

小田：そう。それは。普通の水だけど。それだけど。あんまり不自由はなかったかな。ただ、行った時期が時期だったから。2月になってからだったから。

沢井：3週間ですよ。最初行った1日目と、最後帰る日とかでは、なんか、町の様子は、変化とか、感じられましたか？

小田：そうね。そういえば最初はガスが出なかったけれど、ガスが出るようになった。確か、そういう変化はあったかもしれないけど。一番最初にいたところ、芦屋で、最後に、その後東灘に行ったの、ひどい方に。それでまた芦屋に戻ったから、芦屋はね、ひどくないからなんとも言えないんだけど。そう、ガスが通るようになったくらいかな。周りの人の雰囲気についてはちょっとわからない。被災者の人と交流がなかったから。

中島：地元の人がボランティアで入ってきた人たちに対してどんな感情を持っていたかとか、どんな目で見られてたとか、そういうのありましたか？

小田：え〜と、だから、その、壊れた家を回った範囲でのことしかわからないけど、かなり喜んでくれたんだよね。その、外国からわざわざ来てくれたのっていうことで、その、来るだけで喜んでくれるっていうか、どうもありがとうって東京から来てくれたのって、すごい、非常に好意的でした。

中島：僕、5月に行ったんで、もう、だいぶ遅くなってからっていう感じで、一度、町で、えっと、YMCAの場合、ゼッケンをつけるんですね。見てすぐこれはボランティアだとわかるように。ゼッケンをつけているから、人が倒れてるときも、ちょっとボランティアの人、来て、とか、肩を貸してとか、すぐ声をかけてもらえるっていうか、それはいいんですけれども、あの、なに今ごろきてんやっとか、怒られたことがあったんですよ。

小田：へえ〜。

中島：ゴールデンウィークやったから。あと、もう一つはね、あの、同じボランティアで参加してた人から、なに勉強してんのっていうから、社会福祉やっていうと、やっぱり、勉強のために見に来てんね、みたいなことをちょっと言われたことがあって。そうかもしれないね、ってぼくはもう、ある程度歳くってて、反論しても伝わらへんやろうからとおもって、反論せずに、悲しそう顔をして、演じてしまったんですけど。そのあたりでの気持ちっていうか、自分の中での、行くことについて、あの、どうかな、何か迷いみたいな、ありましたか？

小田：まあ、全然ありませんよ。ただ、行ってからその、仕事、一応あるんだけれども、東灘に移ってからはほんとにあったんだけど、わたしは、仕事、人から横取りしたらいけないって、横取りするほど働いちゃったんだけど、なっていうのかな、やっぱり、う〜ん、結構物足りないと思ったボランティアさんはいたと思う。ボランティ

アがうまく人の配置をするのは難しいと思うんだけど。

沢井：やっぱり上に立つ人っていうか、コーディネートする人がいないと。

小田：そう。なかなかその牧師さん、牧師先生はね、仕事のないときは車でずっと回ったり、ずうっと歩き回って、人に聞いて回るとか、あとビラを配ったりね。ビラ配りは私が提案したんだけど、ビラ配りやりましょうって。

寺内：ビラっていうのはどういうビラですか？

小田：あの、崩壊した家から家財道具を取り出しますとか。教育プログラムをやっていますとか。中島さんがいった、そういうこだわりっていうのはね。とにかく行ってなにかしたいっていう気持ちで行ったんだけど。そういう気持ちで行って、自分の気持ちを消化できなかった人って、いるんだと思います。

4. 震災ボランティアを終えて

(1) 達成感と震災ボランティアゆえの独自性

沢井：出きることはやりたいという最初の希望はどうですか？ かなえられた？ というか達成感は？

小田：うん。ある程度できた。そうですね。

沢井：自分の為っていう方はどうですか？

小田：自分の為も、そうね、自分の為は、あんまり。

沢井：大工仕事がうまくなったとか？

小田：ああ、そうだね。大工仕事が、そうね、電気のドリルの使い方がわかったとかね。セメントをどうやって塗るかわかったとか。

沢井：いままでやってたボランティアと、かなり違うと思いますけど、どういう点で違うと思われましたか？ 例えば、養護学校のハイキングとこういう点でボランティアっていても、こういう点で違うとか？

小田：もちろん、今回の場合は緊急性があるし、こっちも、怪我した人とか、家なくした人とか、とにかく個人個人、相手にする、自分が相手にする人たちのね、事情っていうものがすごいでしょ。だから、気を使わなくちゃ、いけない。もの取り出すだけでも、気を使わなくちゃいけないとか、ある程度、緊張感はあったと思うね。その、行くときの。言葉とか、被災者の人とどう対応するかとか。

沢井：具体的には、気をつけたこととか？

小田：例えば、やっぱり、なんていうかな、下手に言葉をかけないようにしたよ。わたしは。がんばってくださいっていうのもなんだし。まあ、必要最低限のことしかしゃべらないっていうことかな。なんか、むこうから言ってきたら聞こうと思って。ただ、うなずいて、はいはい、っていってればいいかなって思った。実際そんなに話せなかったんだけど。

中島：なんか、実際、食材とか、おかずの材料とかをもって一人暮らしの老人の所に持つ

て行って、そして立ち話するんですね。こっちは立って。

小田：ああ、入り口で？

中島：そう、むこうは座って。しゃべってるときは、こっちはまあ、あの、もともと僕、関西の人間で、土地勘があるので、ああ、あの辺りね、とか、いいながらできるんですけど、基本的にはもう、言いたいことがたまってるみたいな感じで、わあ〜と、止めどなくしゃべってこられますんで、こちらから言葉をかけるとかいうのでなくって。聞いて。聞いているうちになんか、この辺り困ってるんちゃうかなっていうのがあったら、確認して、じゃあこういうのあるよって言えるけど、基本的にはそうやって。なかなか、しゃべりながら、急におばあちゃんに泣かれると、どうしたらいいんだろうかと思ってしまうんですけどね。

小田：私は、あとね、外国人の人たちのことをやりたいなって思ったことがあったんで、困ってるだろうな、と思ってたんで。

沢井：そういう人に会いましたか？

小田：会わなかった。長田区には、韓国人の人が。どこにいるかわからなくって。全然会わなかった。

中島：神戸の町はわりと居住分化がかなりはっきりしてて、東の方へ行くほど、神戸市内では金持ちって感じ。

寺内：私が行ったときは、いわゆる同和地区っていうのがあって、そこは、なんかほんとは取り残されたっていう感じでというのはあったんですけど、そういう地区っていうのは、全然？

小田：取り残されたっていうと、援助を受けていないってこと？

寺内：いや、あの、なんか、ざくしゃくしてるっていうか行政とも。そういう同和地区とか、被差別部落とか、そんなところには行きませんでしたか？

小田：行かなかったんだらうね。わかんない。同和地区ってどういうふうになっているの？ わかるわけ？ そこが同和地区って。

寺内：やっぱり地域で。

小田：かたまっているの？

中島：地元の方は、地名聞いてわかるんです。僕が住んでた高槻にも、いくつか同和地区があった。それは、地元の間はわかるし、僕なんかもちっちゃいころ親に、あそこの子とは遊ぶな、って言って、友だちをなくしちゃったってこともあった。そういうのは、まだ残ってますよね。東京はすごい少ないみたいなんですけれど。わりと関西なんか多い。

小田：私が、行ってみて期待したっていうのは、その、避難所で共同生活をしたりとかね、あと、電気が通らないとか、水が出ないとかいうところで、どうしても家族とか近所の人たちが協力しなければいけないとか、子どもたちも一緒にサッカーしてたっていうじゃない、言ってたでしょう。ご飯前に。たぶん普通の状態だったらきっと、個人個人でテレビゲームしてたかなって思うと、そういう意味で、人との

つながりっていうか、その辺が、また戻って来るっていうか、人とのコミュニケーションが。

(2) 今後の期待とアドバイス

寺内：それは今期待していることですか？

小田：今、期待しているっていうか、また、なんかね、仮設住宅に入れた人と入れなかった人で、あの人たちは、もうすでに生活を築いている。だけど私たちはだめだとか、競い合いみたいな感じはあるらしいけど、そういう話はなかった？ 避難所にいるときはまだ、協力して、仲良さそうにやってたって。だから、神戸の震災によって、いろいろ共同作業しなければならなかったこととか、今後のことに。

沢井：やっぱり、人の幸せは喜べないんですよね。っていうか、自分がこんなに不幸なのに、となりの人が幸せなのと一緒に喜ぶ気持ちにはやっぱりなれませんよね。みんなが平等に、物品にしろ住宅にしろ、行き渡るのはなかなか難しいから。そういうのは、援助が片寄っていくにつれて、どんどんストレスっていうのは大きくなっていくでしょうね。

小田：そうだね。住宅の件とかはね。どうしたらいいのかな。私なんか壊れた家を行政が買い上げてなんかね、つくるとかね。できないのかなっとか思うんだけど。

寺内：ボランティアを終えて、帰ってきてから、行ってたところとの連絡っていうのは取っているんですか？

小田：ないな。

寺内：じゃあもう、ほんとにそれっきり？

小田：それっきり。手紙くらい出そうかと思うんだけど。何もしなくて。3週間ただだけで、東京に戻ってきて、普通の自分の生活に戻ってしまっただけ。

寺内：ボランティアを終えて、戻ってきて、何か、こう、ほんとに、その、ボランティアに行く前の生活にボーンと戻りますよね。何か、こう、変な感じとかなかったですか？

小田：変な感じはなかった、ああ、でも、お風呂に入れて、うれしいなっていうのはあったけど、ほんとに、それ以降、お風呂に2、3日入らなくっても平気になっちゃって、汚いなどか思うんだけど。それはまあ、別の話で、ああ、でもね、寂しいと思った。教会にいたときはいっぱい人がいたからな。あとは、帰ってきて1週間くらいした時点では、行くつもりだったの。結構ね、問い合わせしてたんだけど、ちょっとね、もう23で、就職はどうするか、稼ぎも、他にやってくれてる人はいるし、いいかって、あきらめてしまったっていうか。

沢井：やっぱり、長いこと、最後までつきあえるボランティアって言うのは、ほんと、ちょっとだと思っただけですね。

小田：そう。

沢井：みんな、それぞれのいつもの生活があるわけだし、そういうのは、うまく、なん

か。例えば、仕事、ちゃんと、やっと覚えたところでまた、新しいボランティアが来るっていう、どうしてもそうになっちゃうの、しょうがないんでしょうね。

小田：2、3年の、よく新聞なんか書いてあるのは、2、3年の期間というか、だから、やっぱりね、近郊の関西のあの辺の人たちがやるのが一番、物理的に可能なんじゃないかなと。友達は曹洞宗ボランティア会で働いてて、震災担当だったんだ。で、いつまでいたのかな？ 3月、いや、4月の終わりくらいまでいたのかな。でも、帰ってきてるし。東京のNGOが、特にその、海外協力ベースのNGOが、そういう神戸のことをするのは、長期的には、不可能だから、はっきり言って。そういう意味では、関西の人が、でも、ネットワーク作ってやってるもんね。がんばって欲しいなと思う。

沢井：今後もし、神戸とか、また、そんなこと起こって欲しくないけど、どっかで、地震だのなんだのが、おこって、ボランティアに行くっていう人が、はじめて、ボランティアに行くっていう人がいたら、何かアドバイスとか、ありますか？

小田：寝袋とか、持って行った方がいいとか、それは、基本的な。アドバイスね？ やっぱり、被災者の人のその、気持ちとかそういうのあるだろうから、中島さんがさっき言ったけれど、なるべく話を聞いてあげるとかそういう、ことじゃないかな。

中島：最初の1週間くらいは、話を聞いて、雰囲気をつかむくらいだけで、精一杯で、これをもっと改善したらいいとか、いろんなことをつつい考えてしまうんやけれども、やっぱり、ずっとやってた人の判断の方がやっぱり正しいなという結論。

小田：うんうん、やっぱり、一見してみて、何が必要かっていうのね。わかんないよね。そういう意味でも、2、3日でも、2、3日しか行けないのならしょうがないけども、やっぱり長期的に、なるべく長くいた方がいいんじゃないか。特にはじめてだって。ある程度、きちんと関わりたいと思ったら。

中島：後、もう、1、2分なんですけど、特に、聞いておきたいこととか？

沢井：今後は、どうですか、自分自身で、例えば、神戸についてはこうしたいとか、他のボランティアにしても、？

小田：神戸に関してはね、そうだな。実は、ほんとは、気になってて、もう1回くらい行かなくちゃいけないのかなって思っているんだけど、いま、その、他のボランティアの方が忙しくて、なんとも言えないんですが、そうですね。なんか、神戸に関しては、外国人問題、在日外国人の労働者とかで、やっぱり、助けが必要だということがあれば、したいと思っています。あとは、海外協力ボランティアの方で、一応、バイトしているんですけども、これはなに？ ボランティア全体についてのあれなの？ それとも、震災についての？

中島：震災についてのボランティアから、ボランティア全体につなげようっていうような。

小田：あっ、そうなの？

中島：どっちでもよかったんですよ。

小田：ふうん。

5. インタビューを終えて

中島：そんなところで、今日はどうもありがとうございました。（インタビュアー3人）

小田：そんな、お辞儀していただいて。大した話じゃなかったんですけど。

中島：まだ回ってます。どうですか？ インタビューを受けての感想とか？

小田：聞かれる立場っていうのは、なんですか、自分の語彙力のなさに、なんか、わかっていただけたのかなって、心配です。

沢井：なんか、でも、自分でどんどんしゃべってくれるから、

小田：しゃべれない人もいたの？

沢井：いや、私はよくわかんないです。

小田：一言だけ、そんなことないですよって、いって、だまっちゃったらこまるよね。

はい、とかでおわっちゃうと、よくわかりませんか。変なこと説明したりね。電気ドリルを使うときはこういう角度でっとか。

沢井：男の人と女の人比率は？

小田：比率はね、私は女子の方が多かったような気がする。

沢井：その、理由はなんだったと思います？

小田：そういうわけでもなかったかな？

沢井：でも、力仕事ですよ、やってること。電気ドリルとか。

小田：そうそうそうそう、

沢井：家具、運ぶとか。

小田：あっ、半々だったかもしれない。でも、一般的にボランティアに来る人、女の人が多いよね。

沢井：やっぱ、暇だからでしょうかね。

小田：学生だったら同じでしょ。

II 張りつめた生活と消耗するボランティア

ー藤井さんの場合ー

1. 所属団体とボランティアの生活

(1) 参加期間と所属団体について

梅沢：今回神戸のほうにボランティアに行かれたそうなんですけれども、いつ頃行かれて、期間と主に活動した場所を教えてください。

藤井：期間は3月1日から3月24日までと3月30日から4月8日までです。最初は兵庫区の被災地障害者センターにいましたが途中から長田区役所内の長田ボランティアルームで活動してまいりました。

三宅：えっと、じゃあ、最初のその兵庫区被災者センターですか、（藤井：被災地障害者センター）被災地障害者センターではどういう活動をしてたのですか。

藤井：えっとー、ほとんどやることがなかったんですけど、安否確認、登録会員の方々の安否確認をしていましたが、震災からずいぶんたっていたので、「不都合はないです。」ってどこもそういう感じでした。

三宅：えっ、じゃあ、もともとっていうか、被災者障害者センターっていうのは、どういうことをしている所なんですか、普段は。

藤井：もともと、障害者の作業所みたいな、『Beすけっと』って言って、活動している。

三宅：えっ、じゃあ、安否確認だけで1か月間というか。

藤井：え、っていうか、えっと、被災地障害者センターにいたのは3月1日から5日まで、だったんじゃないかな、ほとんど長田ボランティアルームで。

(2) 活動内容

三宅：じゃあ、長田区役所の方では何をしてたんですか。

藤井：えっと、避難所の、えーっと、おばあちゃんの話し相手と、あとは毎朝ゴミひろい、町のゴミひろいと、後は、でも主にやっていたのは、救援物資の管理です。

三宅：え、救援物資っていうのは、いろんな各地から送られてくる？

藤井：はい、そうです。

三宅：それを長田区の避難所とかの人に配ったりとか？

藤井：避難所とか、他のボランティア団体とかに要請があれば出したり、リストを交換しあったり・・・。

(3) ボランティアの生活

三宅：えっ、じゃあ、え、泊まって、宿泊して？（藤井：はい、）あー、やったた。

三宅：えっ、じゃあ、最初のときはそのセンターの中に泊まって？

藤井：えっと、普段は、作業所っていうか、授産施設なのかな、に使っているところをボランティア用に開放してもらって、泊まって、でー、長田区の方では公園にテントをはって。

三宅：あっ。公園で、すごい。えっ、じゃあ、テントのなかで、寝袋とかで。

藤井：寝袋とダンボール。

三宅：ダンボール、すごい。あー。

梅沢：長田区の公園ってどこ？

藤井：えっと、区役所の隣の川はさんで、湊川公園、新湊川公園。

梅沢：あー、あの、なんでしたっけ、あのピースポートとかが、主に拠点っていう感じにしている公園ですね。

藤井：そうそう。

梅沢：あー、はいはいはい。

藤井：曹洞宗とか、なんかみんないっぱいいたとこ。

三宅：えー、食事とかはどうしてたんですか。

藤井：食事は、えっと、兵庫区の被災地障害者センターの方では、えっと、どうしてたんだろう、朝、当番は、そこで出してもらって、ていうか、晩ごはんは交替でつくって、で、お昼は自分で、長田区では、区役所内にボランティアルームがあるから、配給のお弁当のあまりがもらえて、それを食べるか、自分で買うか。

三宅：えっ、その頃、3月の始めの頃、っていうのは周りの様子とかっていうのはどうだったんですか。お店とかはもう開いてたんですか。

藤井：あっ、もう開いてて、建物は、やっぱりひどいなーって、けっこう壊れてるなー、て印象はまだ、道路とかも、がたがたなっていう気がして、でも3月の半ばぐらいから、夜鳴る救急車とか消防車のサイレンの音、すごいおさまったなっていうのはありましたね。

2. ボランティアでの人間関係

(1) ボランティア団体内部の人間関係と団体をとりまく状況

三宅：あーなんかすごいボランティア、結構長い期間ですよ、行ったの。それで、なんかすごい大変だったこととか、困ったこととかないですか。

藤井：大変だったこと、は、まず寒かったこと。

三宅：あーそっかあー。

藤井：3月の始めの頃、雪が降ったのかな。テントだったから、顔とかほんと凍ってるみたいな感じで。（三宅：えー、あー、そんな。じゃあ全然違う。）あーやっぱり大変だったこと、人間関係。ボランティア同士でもそうだし、もちろんそれ以上のことも、いいこともあったけど、ボランティア同士もそうだし、被災者との関係もなかなか難しいなって。

三宅：えっ、ボランティア同士の間関係で難しいっていうのは？

藤井：えっと、長田区のボランティア団体っていうのは、ほんと全国から有志が集まった、べつにコーディネーターとか福祉に携っている人とか、べつにそういうんじゃないくて、学生とか、普通の人の集まりで、でもそういうなかでもリーダーとか決めなきゃいけないからっていうふうになっちゃって、それで、リーダーの周りで補助する人みたいな、上と下が分れちゃう、完全に断絶されちゃって、で、下の人は下の人で、意見を聴いてほしい、みたいに言ってるし、上も聴くつもりなんだけど言ってこないしみたいな、なんか、すごい、気持ちはべつにそんなに離れていないんだけど、隔たりがあるなって、思って。長田区は3月のはじめの方でも、結構危ない状況で、（三宅：うーん、。焼け野原で、じゃなくって？）え？うん？（三宅：焼け野原？）うん。だったし、うーん、アル中の人とか、薬物中毒の人とかが出て、なんか、結構事件とかもあったみたいで、それで、テントでみんなやってたから、危ないっていうふうだったから、うん、ちょっと、何しに来ているのかあんまり取り違えちゃっているな—っていうような人とかが、上からみてそういう人がいたら、強制的に帰されちゃったりして、でも誰にそういう権利があるんだろうとか、そういうのは、すごいみんなブーブー言ってるのとか見かけたりしたし。

三宅：えっ、取り違えちゃっているっていうのは見学に来てるみたいな感じ？

藤井：夜、お酒飲んで、怒鳴ったり、大声で夜中騒いじったり。

三宅：えっ、なんかそういうこと話し合えるミーティングみたいなそういう場とかは、なかった？

藤井：あ、ミーティングは結構長くやってたんだけど、ほとんど上からの「こういうことはやらないでください。」「こういうこともやめてください。なら、帰ってもらいます。」みたいな、ほんともうピリピリした感じで、で、短期の人もあるから、そこまでいろいろ感じているけど、そこまで、こう、それは、違うんじゃないかとか言えないまま帰っちゃうっていう。

梅沢：そのボランティア同士のそういう階層みたいなものができちゃっているわけでしょう。で、わりとこう手足となって動く機動力となる人と、その、分けられちゃっているそのあれは、どういう根拠で分られているの？例えば、長期に長く滞在してずいぶん昔から、もう震災、地震直後からもうボランティアで入っているような人が、だいたいリーダー的存在になっているのか、それとも、わりと年齢がまあ、上の人とか、あと、うんと、例えば、看護婦とか、そういう専門職、いわゆる何かそういう何かの資格があって、わりと、そういう、仕事で、仕事上にもすごい「ちから」となるような人がリーダーとなっているのか、その辺、リーダーと分けられているものは何なんですかね。

藤井：うーん、やっぱり、リーダー的存在となっている人たちっていうのは、もう震災当初からずっと、やってる人とか、ほんと長期にやってる人ばかりで、短期だと、やっとな、状況が、みえてきたときに帰っちゃうみたいな感じで。

梅沢：じゃあ、例えば、その最初から、かなりもう地震があった直後からずっと最初からいるような人でも帰らなければならなくなったりするわけですよ、そうすると、その人の仕事をある程度誰かが引き継いでって感じで、また、最初のこういうなんか、雑用みたいな、感じの仕事をしていた人が、いきなりリーダーぽくなっていったりとか、そういうこともあった？

藤井：いきなりとはじゃないけど、そういう、長く続けている人のなかで、選ぶみたいな、感じで、リーダーはもう何回もかわってる。

梅沢：で、藤井さんがいる時もかわったりしました？リーダーっていうかその？

藤井：1回かわった。

梅沢：それで、かわって、何かこう改善された、ボランティアの関係が。例えば、少しはよくなったとか、さらに悪くなったとか、そういうの感じられました？

藤井：いや、リーダーの交替によってっていうのじゃないと思うけど、リーダーが交替したのが3月のあたま、私が行ってちょっとぐらいしてからで、それですぐには、何も変らなかったんだけど、3月途中ぐらいからもうっていうか、20日ちょっと前ぐらいから、もう神戸の状況も落ち着いてきたから、ピリピリしていたそういうリーダー的存在の人達も余裕がでてきて、「みんなでやってるんだから」みたいな、「誰も偉いとかそういうんじゃないんだから」みたいな感じで、（身振り手振りをしながら）ミーティングをこうホワイトボードがあって、リーダーが1人立って、こう周りがこう列になって並んで、それで、こうやってしゃべっているっていう形式から、輪になって、っていうふうに変えたり、カードで、今日一日感じたこととか、そういう、言いたいことみたいな提出するようになったりとか、そういうのが変わったかな。

梅沢：それは、みんな、誰かが、その、他のボランティアの人達からの提案じゃなくって、そういう、いわゆる上の幹部みたいなかんじになっている人達どうしが、「こういうふうにするか」みたいな感じで、変えた点？

藤井：いや、うーん。っていうか、そういう声があがってたのをきくと幹部みたいな人もわかってたと思うんだけど、でも、もうピリピリしてて、そんな余裕ないって感じだったから、落ちついてみて、よくよく考えてみたらみたいな感じで、周りに聴いてみて、「じゃあそうしよう。」って。

三宅：えっ、そんなに最初の頃っていうのは仕事がたくさんあって、たいへんだったんですか？

藤井：入ってくる仕事も多かったし、あと、そういう長田が危険なとこだったっていう意識もすごいあったし、で、3月のはじめっていったら、ボランティアもどんどんどんどん来ている時だったから、でもそういう受け入れたらまとめなきゃいけないみたいな、すごいピリピリしたムードが。

梅沢：例えばその、藤井さん自身がボランティアとの関係で、気まずさを感じた具体的なそういう出来事とかありました？事件とか？

藤井：ボランティアと？（梅沢：うん）仲間と？（梅沢：うん）うん。あー、なんか関係っていうか難しいな。直接私は関わっていなくても、仲間どうしのあれをみると難しいなっていうことはちょっとあって、結構みんな疲れているし、寂しいっていうのはすごい、誰かにいてほしいみたいなのはあるみたいだから、男女関係とか、トラブルとか、いっぱいあって、あれは結構きついなあっていう感じで。

梅沢：ボランティアとの関係はそれぐらいでいい？

三宅：あっ、そうだね。うん。あーなんかでも、ボランティア同士のその人間関係が、そういうふうになんか、難しくなってきたことによって、なんか、ボランティアやってることになんか影響があったりとか、（藤井：私自身？）あっ、そう、やっていることていうか、おばあさんと話したりとか、あんま関係ないか。あー難しいですね。やめます。いいです。自分でもきいててよくわかんなかった。

(2) 被災者との関わりのなかで

梅沢：じゃあ、具体的に避難所に行ってるって言ってましたけど避難所はどこなの？

藤井：苧藻中学。

梅沢：長田区の？

藤井：長田区立苧藻中学。JR沿いにあるんだけど、兵庫駅と新長田駅のまんなかぐらい。

梅沢：あーそうなんだ。

三宅：あっ、じゃあ、被災者との関係で難しかったこととか。

藤井：あー、えっと、私は、なかの仕事が多くて、被災者と関わったっていうのはそのおばあさんがほとんどあれなんですけど、うーん。えっと、身寄りが全然なくて、えっとー、家が全壊しちゃって、それで、避難所に入ってきたおばあちゃんなんだけど、すごい、それで、全てなくしたみたいな感じでもう落ちこんじゃって、で、しょうがないから、その避難所の人、ボランティアにお昼を毎日一緒に食べてほしいっていうので要請があって、それで、私は、前の人から引き継いだんだけど、で、だいぶ、元気になって、もう私が行った頃には、それでずいぶん明るくなってたんだけど、そしたら、おばあちゃんはもっと一緒にいてほしいみたいな感じだったけど、周りの人が、一人でボランティアつけて、っていうあれで、仕切りとかもない状態だし、周りからみて、「あっ、ボランティアが来た」ってすぐ見える状態だから、おばあちゃんも周りがこう憚られるってみたいな感じで、で、だいぶ被害妄想的になってたのも確かだけど、全部はどうとも言えないんだけど、何か、いやがらせされたとか、嫌味言われたとか、そういうのがいっぱいあって、でも、だから、おばあちゃんもうちょっと一緒にいてほしい、仮設住宅への入居が決まるまでは一緒にいてほしいみたいに言われたんだけど、周りが、「一人でなんでも出来るのに」っていうんで、「周りとの関係がぎくしゃくしてきちゃうから」って、その、小さい班ごとに分れて、班のリーダーさんが、「ボランティアを

もう打ち切ってくれ」って、「期間を決めてもう打ち切って」っていうふうに言われちゃって、おばあちゃんにもそれを言い訳されちゃって、で、うん、ボランティアのその話しを受けた人も「要請があったほうからそう言われたから」みたいな感じで、「はい、分かりました。」っていうんで、受けちゃって、で、うーん、そこから、また、おばあちゃんが、「また一人になる」っていう、「期限までしかついてもらえない」っていうんで、すごいプレッシャーになっちゃったみたいで、もう、落ちこんじゃって、それで、ポツっとなんか、「いじめとかで自殺する子は勇気があるねえ」って私にきくわけ。「それは勇気とかそういう問題じゃないでしょ」って言ったら、「じゃあ、勇気じゃなくて何なんだろう」って言われて、うん、「私は死にたいのに勇気がなくて死ねない」なんて言われちゃって、あの時はほんと、何か、どうしようなんて、な、なんともいえない、励ますこともできなかったし、かといって、何と言っていいか分からないって状態で、で、しょうがないから、リーダーみたいな人に相談して、そんで、その避難所に入ってる避難所常駐のボランティアか自治労の人か分かんないですけど、そういう人に話してもらって、もうちょっと期限延ばすようにとか、あと、区役所のワーカーさんとかに「こういう所におばあちゃんがいるんだけど」みたいに、話しつけてくれて、で、ずいぶん、気にかけてもらえるようになったみたいで、それで、元気になったみたいな話をちょっと話し聴いた。

三宅：えっ、何でそんな周りの人がボランティアがいることに対して、なんか[不明]ったりするんでしょうね。

藤井：テレビとかで見たらこう、段ボールの仕切りとか畳の仕切りがこうある、避難所とかが映ってて、私は、そういうもんだと思ってたんだけど、私が行ったところは、もう、布団がそのまま並べてある状態で、体育館に、で、プライバシーも何もあったような状態ではないし、年寄りからほんとちっちゃい赤ちゃんまで一緒になって、ピリピリしてるっていう、子どもが少し泣いただけで誰かが怒鳴り散らす、「うるさい。出て行け」って言って。

三宅：でも、その中の人どうして、なんか励ましあったりとか、そういう感じじゃなかった？

藤井：もちろんそういう状態もあるんでしょうけど、でも分かんないけど、小さく固まるってことで、みんなでっていう雰囲気ではなく、お隣りどうしはすごい仲良くって、なんか、「あっ、こっちのほうが必要だから。」とかいって、交換、物の交換しあったり、うーん、したから、洗濯物とか洗いあったりとか、そういうのあるけど、「フローア全体で」みたいなそういうムードではない。あんまり日当たりも体育館だからよくないし、プライバシーも全然ないしで、疲れてるっていう印象がすごい。

三宅：えっ、そのおばあちゃんは何でもできるのにボランティアが来てっていうのは、えっ、えっ、自分達のほうにも来てほしいのにおばあちゃんだけ何でっていう感じ

なのかな。そういうのは？

藤井：いや、自分たちも欲しいとかはべつに、そういう人は話し相手とかがべつにいらな
いわけだから。結構ね、救援物資の取り合いとかは、人間のこう、本性っていう
か、本質っていうか、他人がそういうのね、自分がピリピリしている時に、他人が
そういうふうにとんどんねー、良くなってったりするのを見ると「うーんとか思うよ
うなことってあるのかな」てそういう気持ちになっちゃったりもするし。物は足
りてるけど、とりあえずもらえる物はもらうとかそういう感じもあったから。

三宅：んじゃ、やっぱりその人間関係が一番大変だった？

藤井：うん。

三宅：そうですね、そのことについて、大変だっていうことについてボランティア同士で
話したりとか。

藤井：は、もちろんして、ひと月くらい、頑張るって来た、思って来た彼もそういうの
で、いなくなったんだ。疲れちゃったりとか。

3. 震災ボランティアを通して

(1) ボランティアの参加のきっかけ・動機

三宅：ボランティアするのに、行く前とかってというのは、そういうことがあるんだろうと
かって予想して行ったりしましたか。

藤井：うーん、どうなんだろう。あんまそこまで考えてなかったのかもしれない。仕事が
あるのかなっていうのは行く前にずいぶん迷ってたけど。レポートとかが気になっ
てて、行こうと思ったけれど、ずっと行けない状態で、3月まで遅れちゃってて、
とりあえず、行かなきゃみたいな、こういうことしようと思ってとかそういう明確
な動機っていうかそういうのはなかったのかな。

三宅：え、あ、なんか、何がきっかけでっていうか、あっというか、何か見て、ここに、こ
の、あの、この兵庫区被災者センター？

藤井：あ、それは、うんと、なんか新聞のとかでずいぶん電話とかかけてても、登録だけ
で、全然拉致があかなくて、どうしようかって思ったら、知り合いが行ってたっ
ていうんで、知り合いの知り合いに紹介してもらって、で、電話かけたらすぐ来て
くださいみたいなこと、電話かけてみたらそこだった。（三宅：あー）全然知らな
くって。

三宅：えっ、途中で変わったのは？

藤井：うん、それはえっと、自転車で被災地障害者センターのほうでは、安否確認してま
わってて、で、長田区のとかのほうに行ってて、で、何やってるんだろうっていう
気持ちになったから、それで、長田のほうに行ってみたら、道路もほこほこだし焼
け野原みたいに広がっているし、「うーんここだったら、なにかやることあるかな
あ」と思って、で、行ってみたら区役所内にボランティアルームがあって、で。

梅沢：このボランティアルームってどういう機能を果たしているの？普段からボランティアルーム設置してあって？

藤井：いえいえ、あの、ピースボートとか、区役所が、あの、会議室とかみたいな一室を提供してあげましょうっていうふうに発足した。えっ、でも今はなんかその、長田ボランティアルームっていうのを残そうみたいな感じで、今は『それえゆけネットワーク長田を考える会』っていう名前になって、社協の人が引き継いでやってるみたい。

三宅：あーじゃあ、今はもうこの仕事というかボランティアでやってたような仕事っていうのは、むこうの人に引き継がれて。

藤井：それが目的だったから、途中からの。

三宅：あー、引継ぎどうやろうか、えっじゃあ、むこうのボランティアさんとかも集めたりして？

藤井：そう、途中からもう地元ボランティアを確保しようというそういう動きになって。

梅沢：え、そもそもボランティアに行こうと思ったきっかけと、それが、いつごろだったかということ。

藤井：行こうと思ったきっかけ？うーんやっぱり、震災が起きた日にテレビつけたら、アレみたいな感じで、で、まあ、兵庫県に、姫路市だから、一番ひどい所からは離れてたんだけど、まあいちおう親戚いるから電話してみようかって、つながらないし、で、死んじゃってるとか亡くなっちゃった人とか怪我人の数とか、もう、どんどんどんどん増えてって、火事とか起こってるっていうんで、大変なことだっていうんで、「行かなきゃなあ」みたいな思ってた、2月10日かなんかに援助技術論でそういう話しがでて、「やれることしないか」みたいな池上さんから提案みたいなのがでて、「まあ、レポートとかあるけど、そういうこと言ってるいいんだろうか、こういう一大事になって、学生としてなんかできることはないのか」みたいなので話し合いをもって、まっ、それで、ほんとに「行かなきゃ」ってなんか触発されたのかな、「行かなきゃ」って、「ほんとうに行かなきゃって」というんで実際に動き始めたというか。

梅沢：で、「行かなきゃ」って思ったのは「何かできることしに行こう」というので「行かなきゃ」って最初思った？そのニュース見たりとかして。

藤井：うん。「なんか何でもいいから手伝うことはないかな」というのと、やっぱり、で、親戚とかでつながって、とりあえず大丈夫で、ちょっと遠縁になっちゃうんだけどそういう人が今、「水がないとか、食べる物が無い」とかっていうっていうのを聞いたら、「水汲みとか必要だろうし、[不明]でもいいからやらなきゃなあ」みたいに思ったのかなあ。

梅沢：じゃあ、もう行く前っていうか、その「行かなきゃ」って思った時点からもう「私だったらこれぐらいのことはできるかも」という意識で「行かなきゃ」って思ったの？

藤井：うーん。

梅沢：例えば、何ていうのかな、これは私の個人的なことなんだけど「何かしたい」って思ってもべつに私は医者でも看護婦でも何でもなし、べつに、でも、っていう、ただ単にそんな個人的にそんな車とかでのりこんだとしても何ができるかなって、ただ単になんかうーん自分もっているそういう資源とか何にもなし、だからそういうこう「何かしたいな」っていう思いはあるんだけど踏み切れないっていうかそういう気持ちは全然なかったの？

藤井：いや、すごい、あったから実際に2月10日まで、10日でみんなと話し合うまで何にもしなかったというのもあるし、「やらなきゃ」って思ったけど、行って何ができるっていうのはすごい、実際動きだしてからそれは考えた。医者とかじゃないしってことを。

梅沢：でもまあ、その援助技術論の授業で、まあその提案する人は結構まあ、すごく熱くなって「レポートとかいうよりも何よりも、そんなこと言ってる場合じゃない」ってまあ、言ってたって話してましたけど、でも実際問題、自分の生活は自分の生活であるわけじゃないですか。でも、それは全部放り出してまでもボランティアに行こうっていうそこまで思った？だから「レポート何よりもいらない、書かなくて単位もいらない。今すぐ駆け付けなきゃ」とかそこまで思えました？

藤井：その場はすごい盛り上がりましてそう思ったけど、実際、家帰ってみてやっぱ、一年それで棒に振って、もう一年学校に行けるかとか、そういうのとか、あと、普段やっているボランティアでまあ、いちおう私とかが抜けたらきっとねー、不都合とか出てくるわけだし、その人がそういう思いまでさせて行く必要があるのかっていうのは思えたけど、なんか、うーん、もうその時には、その、すごい歴史的な大事件みたいに思ってたし、それで、何かやらなきゃっていうのはそういうのは思いはあったから行っちゃたんだよねー。

梅沢：じゃあ、わりと、そういうの振り切って、何かを犠牲にして行った、自分のことはいいから行ったっていうところはどこかある？私の場合は、なんか「私も行かなきゃ」って思ったのは1月の末ぐらいで、でもこれから試験だしな、レポートしで、とりあえず試験終って全て終ってレポートも終ってから行こうってそういうふうになりきることにしたんだけど、藤井さんの場合はどうですか？

藤井：でも、結局レポートとか出し終ってからいったし、だから自分で、犠牲になったっていう意識はないけど、でもそのボランティア普段からやってる人とかには悪いなああって。

梅沢：あ、そうだ。それで、あっ、神戸に行くまえからボランティアやってたの？それは長いのですか？

藤井：えっと、2年生の秋から。

三宅：えっ、どういうボランティアなんですか？

藤井：かたつむりの会の。

三宅：あっ、かたつむりの。あっじゃあ、介助のボランティアなんですか？

藤井：介助っていうか、うーん、家事とか育児のお手伝いって感じ。だけど、週2日ぐらい入っているから、それが全くなくなるっていうのはそれなりに不都合があると思うし。

梅沢：神戸に行くっていう間は、その普段のかたつむりの会での活動は一時休止っていうことで、向こうのほうも了解をしてもらったっていう感じ？それとも。

藤井：お願いして了解してくれて、頑張ってきてって言われて、すごいそれがすごいありがたかった。

梅沢：例えば何か障害があったとしますよね、ボランティアに神戸に行く時にあたって、例えば家族がすごい大反対したとか、あと、例えば普段、普段のアルバイトがあつてとか、どうしてもその仕事は手放したくないし、でも一か月ぐらい行くんだったら休まなきゃいけないから、むこうは「そんな勝手なことするな」とか言われたらどうしようとか、まあ、そんないろんな思いがあつたとして、なんかそういう事情があつたとして、そういう事情にもかかわらず多分行つたと思います？神戸に駆け付けたと思います？それともやっぱり、どこかそこまでは行けないかな？って思います？

藤井：家族の反対はあんまり [不明] さないと思うし、金銭的なこととかははっきりしてなかったけど、普段やってるボランティアがもっと私がやらなきゃっていうものが多かつたら、行かなかつたと思う。

(2) ボランティア観の変化

三宅：普段やってるボランティアと今回その震災で行つたボランティアっていうので、何か違うことっていうか同じ意識でやりました？

藤井：同じ意識？うーん。

三宅：ボランティア観が変わるといふか、そういうことはありました？

藤井：ボランティア観が変わる？あー、変わるとまではいかないけど私はまだ結論とかも全然出てないんだけど、やっぱりどこまでボランティアがやっていいのか、その人に対して踏み込んでいいのかっていう、おばあちゃんに対してもそう、結局、そのおばあちゃんだつてのめりこめば、のめりこむほど、その場はいいけど私が帰っちゃつたら、そんな無責任なことしていいのかとも思ったし、でも放つて置けないしっていうんで、そういう葛藤はあつたっていうか、だから、「どこまでやればいいんだろう」っていう、これは今でも全然分からないんだけど。答えになってない？

三宅：あっ、いえいえいえ。

梅沢：それで、そのおばあちゃんとは、藤井さん帰られるまでずっと関わつてたんですか。それとも途中で誰かに、例えば、さっき、ほら、ワーカーさんをつないでもらつたとか言つてたけど途中でこう、誰かにお願いしちゃつた？

藤井：物資の仕事がほんともりつきりになっちゃいそうだったから、友達っていうか、一番やってくれそうだなって自分がみて思った子に頼み込んでやってもらって、でもその子も私よりも先に帰るってなってたから、「お願いだからその後もちゃんと見つけて」みたいな二人でその次の人、仮設住宅が決まるまで2人引き継いだのかな、で、朝の仕事始まる前に2日に1回ぐらい顔見に行ったかな。

梅沢：藤井さんが？

藤井：うん。

梅沢：あー、物資の仕事忙しくなってからも？

藤井：うん。一回途中で抜け出して行ったら怒られちゃって、あの、上の人に、「いってくれなくちゃ困るじゃん」って。しょうがないから朝行くしかないかなって思って。

梅沢：で、なんかその、人が変わっちゃったことに対して、おばあさん何か言ってました？「なんで藤井さんがなくなった」とか。

藤井：あー、でも、なんかあんまり状況を理解してなくて、おばあさんは、あの、私をボランティアだって分かっているんだけど、区役所の人だと思い込んで、「お仕事大変みたいだから頑張る」みたいな感じで、でも、全然名前とか覚えられないんだけど通った甲斐があって覚えてくれて、「藤井さんがくれた物だ」とか「藤井さんと何話した」とかいうのは他の子に話してみたいで。

梅沢：じゃ、もしかしたら、そんなに藤井さんがそのおばあさんに対して責任感を感じてしまうほど、おばあさんは藤井さんに頼りきってたわけでもなかったっていえるかもしれない？

藤井：うん、だから、責任感を感じてたっていうよりも、放っとけないっていうか、そういうのが、私のただそういう気持ちがある。

三宅：えっ、今はそのおばあちゃんとの関係というのは何かあるのですか？

藤井：直接はないんだけど、あの、一番最後に関わった子が手紙でどこの仮設に入居してどういう状況だとかを手紙で確かめてて、それを教えてもらっている状態。

梅沢：あと、何か、これからも関わりを持ち続けたいと思ってる神戸に？今実際に持ってるかそういうことはありますか？

藤井：うん。なんか、愛着湧いたし、関わり続けたいなって思うけどでも、これからは何が必要、神戸に何が必要なのかって考えて、何なんだろうなって思って、それが自分にできるかどうかどうかも分かんないから、実際に活動するかどうかは。

梅沢：あと、もう早速帰ってきてから今でも『かたつむりの会』仕事は入ってます？（藤井：うん）入ってます？で、何か、今までその、神戸に行く前までと、あと、帰ってきてからその『かたつむりの会』での仕事に対する自分の気持ちとか、仕事のやり方とか何か「変わったなあ」って思うことありますか？別に変わらない？『かたつむりの会』では『かたつむりの会』での仕事を今までどおり別に変わりになくやってるって感じ？

藤井：「会」っていうか、もうほんと1対1っていうかその[不明]のことをっていうん

だけど、その人たちがすごくいい人だから、神戸から帰ってきたときは、かなりこう落ち込んでたっていうか、うん疲れてて、人をこう、こういう感じだったから（「寄せ付けない」っていう手振りをして）ほんと「ほっ」としたし、うん、すごい逆にボランティアやってて気が休まるっていうか「ありがたいな」っていうのは。

梅沢：神戸から帰ってきて、あっ、行ってる間もそうなんですけど始終ずっと人が、人と一緒にいますよね。寝る時も一緒、ごはん食べる時も一緒、一日中一緒。ただ単に寝る、寝て目をつぶっている間だけ人の顔を見ないぐらいの状態じゃないですか。なんかこう、すごく疲れませんでした？

藤井：あっ、すごい疲れたから週1回だけ休みがもらえたから、見物、悪い言い方しちゃうと見物なんだけど淡路島とかに行っって旅館泊まってふとんで寝て「あーって人がいない」っていうのは。

梅沢：で、神戸から帰ってきてからもしばらくは「ひとりでゆっくり過ごしたい」とかって思いませんでした？

藤井：あー、それも人とあんまり関わりたくないっていうのはあったけど、でもやっぱり一人でいるのもね、どんどん気持ち減入ってきちゃう感じもあったから、やっぱり毎日会ってても疲れちゃうだろうけど、ボランティアとか、友達とかに会うっていうのは気軽に〔不明〕

梅沢：、ボランティアの期間、一週間ぐらい間ありますよね。あの期間は何してたんですか？

藤井：あれは、えっと、ほんとはもうそれでやめようと思ってたんだけど、で、またその「【かたつむりの会】の介助のボランティアもやらなきゃ」っていうのもあったし、うん、で、帰ってきたんだけど、帰ってきたら向こうの神戸から、神戸で一緒にやってた子から電話がかかってきて、何かその、「人間関係のトラブルがどうだ」とか、うん、「やりがいがどうの」とかなんか、そういう相談とかもちかけられて、なんかちょっと、一人どうしようもなくなっちゃった子がいて、「とにかく来てほしい。来てほしい。来てほしい。」って言われて、まあ、しょうがないから。でもまあ、地元の人への引継ぎとかもやっぱり重要な仕事だから、それ手伝えればいいなっていうので。

(3) ボランティア活動をふり返って

梅沢：あっ、そうだ。すごいうれしかったこと、何ですか。ボランティアやってて（藤井：ボランティアで）あつまあ、神戸にいる間でもいい、いいや。

藤井：うれしかったこと。うん、あの一、すごい自分がぎすぎすしてて、疲れてたから、淡路島行って、で、あの一海苔つくってるおじさんに会って、で、なんか、「ただで旅館紹介してくれる」とか言って、「ボランティアで疲れて大変だろう」みたい言ってる、で、ただでご馳走とかになっちゃって、旅館とかも泊めてくれちゃっ

て、で、なんか、全然見も知らずの人なのにすごいよくしてもらえて、それであとまた続けられる気分になった。あれはほんとうに、うん、よかったなあって。なんか物を一個もらってるのに、でもまだ他の待ってる人がいるのに、こう、何ていうんだろう、配給もらってこうどんどんもらってっちゃう人、20個ぐらいとか車に積んで帰っちゃうとか、困ってんのかもしれないけどでも、ぎすぎすした面とか、ボランティア同士のそういうなんか、こう陰口とかなんかそういうのとか、また、そのおばあちゃんに対する避難所の目とか、そういうのとか結構「あー」っていうのあったから、[不明]なんか「非常事態とかだったら、人間でもっと助け合わなきゃいけないんじゃないか」みたいに思ってたから、「あー、助け合えないもんなんだ」とか、そういう面ばかり見えちゃってた時期だったからあれはなんか非常にうれしかった。

梅沢：ボランティア活動中では何かありました？うれしかったこと。楽しかったとかよかったとか、感激したとか何でもいいんですけど。

藤井：感激した？なんか、あんまりそういうのなかったのかな。なんか頑張んなきゃみたいな、なんかそういう周りのね、そのボランティアの人とかがいっぱいいて、「頑張んなくちゃ」、「当てにされてるな」っていうのは思ってきたから、それをこう、頭できたから、「よく頑張んなきゃ」みたいなのがあって、「とにかく目の前の仕事やんなきゃ」っていうんで、むりやり騒いでたとかっていうのはあったけど、ほんと、だから、おばあちゃんとかとやってた時は、わりあい苦しいなりに、なんか、おばあちゃんがなんか言ってくれてっていうのが、すごい「あー」っていうのはあったかもしれないけど、物資の仕事はじめてからは、こう、地下の倉庫にしまってるから物資はすごい、ほとんどこう、上のそういうボランティアルームとの行き来、中の仕事で外の天気も分からないっていう状態だったから、気分が滅入ってたっていうか。

梅沢：じゃあ、忙しかったってほんと感じ？

藤井：うん。うん。もうひとり男の子がいたんだけど、それは私よりずっと前から来て、物資の仕事してたんだけど、一人でどうしたらいいか分からない物資かかえちゃって、おかしくなっちゃって、おかしくなっちゃったっていうか、思考がもう悪いほうにしかいかなくなっちゃって、で、「物資捨てる」とか「燃やす」とか言いだして、言ってる、冗談とかでも言いたくなるんだけど、ほんとにやりかけちゃったから、「とにかく休め」みたいな感じでそういう状態だったから、物資の問題はほんと大変だなあって。どうしようもないものがいっぱい届いて、もう出すところもないし、でも捨てるわけいかない。途中からボランティア不要とかさ、ボランティアが逆に復興を妨げるみたいなとか新聞にとりあげられてた時期だったから、ボランティアが救援物資を、こう、夜中に捨ててるっていうのがバレたら、何、どうされるか分からないっていうので、すごい、上の人がピリピリしてて、でも物資かかえてる方としては、お店も開いてるわけだし、それをただで配ったらお店つぶすので

復興ほんとうに妨げてるし、でも捨てられないし、で、逆にもっと困ってるっていうか、あの例えば古着だったらあの外国の、なんか、どこだって言ってたかな、まあ、途上国とかに送ればいいんじゃないかとかいうのもあったけど、でもそうしたらその繊維産業の妨げになるし、どうすればいいんだろうとか思って、置き場所も区役所も業務再開するからどけなきゃいけないし、すごい困ってた。

4. おわりに

梅沢：もうそろそろ最後らしいけど、なにか聞きたいことありますか？

三宅：このボランティアをして得られたことというか。

藤井：得られたこと？

三宅：行ってよかったというか、思えたこと。

藤井：やってよかったこと？え、あなたも行きました？

三宅：あっ。行きました。

藤井：答えさ、出てます？（三宅・藤井爆笑）聞くなって？

三宅：ああそうですね。難しい。私もはっきりしてないんですけど、私はボランティアってそれまでやったことがなかったから、うん、ボランティア、期間も短かったこともあるし、こんな大変なことも全然体験しなかったから、あ、なんかもっと楽しんでやれるものなのかなって思ったっていうか・・・

III 未来へつなぐ土台づくり ー小嶋さんの場合ー

1. 参加期間と所属団体

内田：よろしくお願ひします。

小嶋：よろしくお願ひします。

内田：じゃあ、あの、

小嶋：さんは、今度あの、阪神大震災の被災地にボランティアで、あの、行かれたっていうことですがけれども、あの、行かれた日にちはいつからいつまでですか。

小嶋：日にちですか。

内田：はい。

小嶋：ちょっと待ってください。えっと、あの、夜行で行って、二月の十七日から、ええっと、二十三日まで。

内田：はい。

小嶋：めいっばいその間いたんですね。

内田：じゃあ、あの、ちょうど、あの、震災が終わって、があって一月後っていうことですよ。

小嶋：ええ、そうなんです。

内田：ことですよ。それで一週間行かれたわけですよ。で、行かれた所は何市ですか。

小嶋：あのお、私、二か所行ったんですけど。

内田：ええ。

小嶋：泊まった場所は大阪の親戚の家に泊まって。

内田：ええ。

小嶋：通いで行きました。

内田：ええ。

小嶋：で、最初に、あの、「てんかん協会」。

内田：ええ。

小嶋：「日本てんかん協会」でしたっけ・・・、そこに、あの通いで三日間行って、そのあと、で、それは中央区にあるんです。

内田：神戸ですか。

小嶋：神戸の・・・。

内田：神戸の

小嶋：中央区の、あの、福祉センターを借り切ってそこで色々活動してた。

内田：うん。

小嶋：団体なんですよ。

内田：ええ。

小嶋：で、じゃあ、先いっちゃいますね。

内田：ええ。

小嶋：で、その後は、「応援する市民の会」っていう会がありまして、地震の後できたんですけど。YMCAとか色々母体になって。

内田：ええ。

小嶋：で、それが、ええ、深江です、灘区ですね。

内田：ああ、はいはい。

小嶋：ええ、そこに事務所があって・・・

内田：ええ。

小嶋：まあ、通いの人が・・・

内田：ええ。

小嶋：通ってくるという会です。

内田：じゃあ泊まりで行かれたっていうことだったら、あの、ボランティアさんの泊まることとか、そういう心配はかけなかったんですね被災地に、ね。

2. ボランティア参加までとチラシづくり

小嶋：ええ、それはそうです。

内田：そしたら、あの、うんっと、あのお、ちょうど、あの、こちらから、あの、大学から行かれるとき、「てんかん協会」の、あの、呼びかけで行かれたわけですか。

小嶋：いえ、そういうわけではなくって・・・

内田：チラシにあった文の中で・・・

小嶋：あ、あれは私達が作ったんですよ。

内田：作ったんですか。

小嶋：ええ。あの、ボランティアやろうと言ったときに、もう、いろんなところに電話しても、なかなか受け入れられなくて・・・

内田：ええ、ええ。

小嶋：で、まあ、辛うじてこう連絡つながったところをいくつかピックアップしたなかに・・・

内田：ああ、はいはい。

小嶋：「てんかん協会」があったんですね。

内田：ああ。

小嶋：そう、それで、あの、一番受け入れがオープンだったのが、そこだったの
で・・・

内田：ああ、そうそう、はいはい。

小嶋：書きました。

内田：書きました。そしたら、あの、小嶋さんは一人で・・・

小嶋：友達と二人で・・・。

内田：二人で・・・。

小嶋：行きました。

内田：で、都立大の・・・

小嶋：はい、飯野さんです。

内田：ああ。そしたら、これあんまりよくわかんないんだけど、そして、あの、あれですよ。あの最初、あの、行こうと思っていてって、あのお、おっしゃいましたけど、それはやっぱり、震災が起こった直後から、もう考えてらしたのよね。

小嶋：いや、そのへんはそうでもない。ただ、起こった後に、なんか、しなきゃしなきゃみたいなモヤモヤはあって、でも行こうっていう形にはならなくて。

内田：ええ。

小嶋：で、テスト中だったんですよね。

内田：ええ、そう。

小嶋：でレポートとか追われて。だから、ただ心のどこかに引っ掛かったまんま、こう、生活してたら、あの、先輩で行くという人がいまして。

内田：ええ。

小嶋：その人が、なんか・・・、私ボランティアサークル入っているんですけど・・・。

内田：ええ。

小嶋：で、そのサークルの方でどうなの、みたいな連絡がきて。したらなんか、身近に行く人いるじゃんって思って。で、そこで具体的に行ってみようかなっていうふうに思ったんですよ。

内田：で、さっきみたく、受け入れてくれそうな所に、こう、電話かけてみたって。それが、かけてみられて、で、「てんかん協会」が、あの、受け入れてくれたっていうことですよ。

小嶋：そう。でまあ、行こうかなっていうのを出したところに、ちょうど学科内でこう盛り上がった、ていうか、何人かいたんで、わりと、福祉学科の有志で、こうグループばつと組んで、そこで、あの、チラシ作ったりっていう活動始めたんで、だからわりと弾みになりますよね。

内田：うん。

小嶋：動きやすくて、何やるにも。

内田：そう。ボランティアサークルって・・・。

小嶋：あ、ボランティアサークルはまた別なんですけれど。で、そっちが動かないので、仕様がなから社会福祉学科で動こうっていう事になりました。

内田：で、三年生 [インタビュー時の四年生] 中心で・・・

小嶋：そうですね、三年ですね。

内田：三年生を中心にして、で、あの、ピラは行った後できたんですか。その前まではな

かったわけですね。あのチラシは。

小嶋：チラシは、いえ、行く前に作って行きました。だから、結構、私達も、ちょっと、行こうかなあどうしようかなあっていうモヤモヤ、テストあるしなあってあって。で、あと、行っても大変かもしれないし・・・、とかって。ちょっとしたことで思いとどまる人って多いじゃないですか。

内田：ええ、ええ、ええ。

小嶋：だから、あの、都立大の人がそういう身近なところで、行こうっていう呼びかけがあったら、わりと、こう、みんな乗るんじゃないかなって思って。だから、外にもアピールしようって言って作りました。

内田：あと、あの、あれ、震災を受けたとき、やっぱりなんかしなきゃと思ったと思うんですよ。それで、あの、なんかできるかなって、こう、具体的に行動しようと思うと思うんですけど、やっぱり一人だとちょっとねえ、あの、大変だけど、その、お友達とかでそうやって、ていうのだったんですね。動機とか、その、どうして行けたのかっていうのが、やっぱり一番知りたかったから。

小嶋：ええ。

内田：だから動機とか、具体的にいく手立てみたいなものとか、それから相手の受け入れ先とか、ただ、あの一人で考えて、行くぞ行くぞって、バツと行って、そこで、あの、仕事見つけてやるっていうのもあると思うんですけど、やっぱり、ちょっと不安ですね。そういう場合ね。

小嶋：そうですね。

内田：だから、相手が受け入れてくれるとか、友達がいるとかっていうふうにして行ったのは、私は、良かったと思う。

小嶋：良かったと思います。

内田：だって、心強いっていか、あの、そういうふうに行かれたのには、感心したっていうか・・・

栗坂：受け入れ先なくて行って、何にもできないですね。

小嶋：そうですね。そう、だから最初に、結構ね、行くって言ったときに、ああ、いいんじゃない、いってらっしゃいっていう反応は周りはなくって、何か、行っても邪魔じゃない、とか、それなら義援金送んなよとかって言われて、うん、だから、でもそれは悔しいから、行くからには邪魔にはなりたくない、で、役に立ちたい、っていうので、なんとか、こう、捜し出したっていう感じ。

内田：やっぱりほら、なんか、こう、行かなきゃいけないって思って、で、あの、なんか行って仕事がないかな、とかって思ったり、向こうに行って、ほら、ゴミ出したりとか、あと、水使ったりとか、トイレ使ったりするので邪魔かなとかって、こう、思うんで、躊躇しますよね。で、一月位たって、ある程度ライフラインも復旧しましたでしょ。で、それで行くっていう気持ちに、やっぱりなったやっぱ、試験が終わったからっていうか・・・

小嶋：ああ、別に落ち着いたから行こうかなって言うわけではなくって、いや、実は試験免除されないかなって、交渉とかしたんですけど全然だめだったんですよ。それは別の期待がちょっとあったんですけどね。

内田：まあでも、うん、あの、そういうふうな手立てをこうできて、あの、自分の力でやったの、その、学生だけでやったっていうか……。

小嶋：あの、場所を探したりだとか

内田：ええ、探したりとか……。

小嶋：そう、そうですね。ただ、先生方が、も、電話してくれた人もいますし、じゃあ、まあ、陰ながら応援してくれた人は結構いるんですよ。だから、まあ、精神的に支えてもらったというのはあります。

内田：やっぱりあの、受け入れ先がはっきりしていて、で、結局、仕事内容もはっきりしていたっていうことですか。

小嶋：いや、そうではないですね。

内田：受け入れ先だけははっきりしていて、で、仕事は何するか分からないなって思いながら行ったんですか。

小嶋：うーんと、そうですね。一応、「てんかん協会」に決めたときからは、まあ、東京に事務所ありますんで、そこと連絡取り合っ、今何してるっていうことは聞いたんですよ。で、まあ、そこはてんかんですから、取り合えず、こう、てんかんの患者さんを……。安否確認はその時終わっていたのかな。だから、あの、てんかん患者さんは「てんかん協会」に絶対入るってわけじゃなくって、入っていない患者さんが一杯いるからその患者さんを捜し当てて、困っていないかっていう、そういう、こう、動き回る、そういう活動に入りましたという、あ、入りましたっていうか、まあ、そんな感じの話は聞いてたんですよ。

内田：ええ。その仕事のお手伝いをするんだっていうふうに……。

小嶋：そう、それは、はい、分かってました。でも、実際はちょっと違ったんですけど。実際の話はいっちゃっていいですか。

内田：そうですね。実際の話。もう良く分かりましたもんね、動機とかについてね。行かれたのは、当然新幹線で……。

小嶋：いや、そんなお金無いですから……。

内田：在来線で行かれた

小嶋：ええ、だって、夜行バスです。

内田：あ……。

小嶋：夜行バス。で、時間もないから、一番、こう融通のきく……。

内田：で、大阪に行って、大阪から通われたんですよ。

小嶋：そうです。

3. 神戸での活動と葛藤

(1) てんかん協会の状況

内田：で、それで行かれてからの話を今度聞かせていただいて・・・。

小嶋：いいですよ。

内田：どんなことをなさったのか、最初の。

小嶋：ええ、二つあるから、てんかんの方なんですけど・・・。

内田：ええ。

小嶋：で、「てんかん協会」っていうところは、ボランティアに関しては、なんていうか、プロではないんですよ。

内田：はあ。

小嶋：てんかん患者さんの会だから。

内田：うん、ああ、そうですか。

小嶋：うん、で、別に閉鎖的っていうわけじゃないですけど・・・。

内田：うん。

小嶋：それで取り合えず、患者さんの安否確認はしたし、色々、避難所もくまなく、大体まあ、廻り切って、で、患者さん・・・、あ、あのポスター貼るんですよ。もし、こう、薬がなくて困ったらここに行けばありますよって、いって。

内田：ええ、ええ。

小嶋：で、まあ、「てんかん協会」っていうのを知らない人もいるから、ここに連絡してくださいって、そういうの、一通り終わっちゃったんですよ。そしたら仕事なくなっちゃって、で、その本部っていうか、神戸にとってある部屋で、精神科のお医者さんとか看護婦さんとかが待機してるんですけども、仕事はない・・・という。

内田：ええ、ええ。

小嶋：で、私達も、なんか、こう、ただ、貼るだけで手応えがない・・・、なんか、何やってるのかなっていう感じで、で、だけど、で、ボランティアはうなぎ登りでね。他のところは、もう打ち切ってしまったから、もう、てんかんにはものすごいボランティアが流れ込んできて。だから、エネルギーが、こう、あり余って、だけど、私、こんな、何やっているのかなってやめてっちゃうから、それじゃもったいないって言って。

で、東京の、何だっけ、「東京VYS協会」、「全国VYS連絡協議会」・・・、ボランティアをコーディネートするところなんですけど・・・。

内田：ええ。

小嶋：そこの、あの、だから、コーディネーターさんが、「てんかん協会」を受け継いで、やって来たんですよ。何ていうか、こう、生かそうと思って。

内田：ええ、ええ。

小嶋：大体、これだけの災害で、ボランティアが余るはずがないって・・・。

内田：ええ、本当に、うん。

小嶋：だから、そこで、えっと、対象を子供に向けました。

内田：ええ。

小嶋：だけど、取り合えず何をやるかって分かんないから、まず調査ですよ。で、避難所を、こう、回って、子供に話を聞いたりとか、もう、その何気ない会話で聞いたり、とかしながら、何が必要かっていうのを、まず、集めてくる。

内田：うん。

(2) 活動場所の移動の過程

小嶋：で、私はそこまでしかいなかったんです。で、それ以降、巡回子供センターかなんか作って、色々レク活動とかやったらしいんですけど、私は、その調査のところで、他に移りました。

内田：ええ。

小嶋：と言うのは、うーん、だから、調査で・・・ はっきり言っちゃえば、やっぱ、何やってるって言うか、やり甲斐が、まあ、なかったからなんですけど・・・。ただ、長期間続けて行く場合には、その企画から携わって、その決行を見て帰れるっていうほうが良かったけど、一週間だったから。じゃあ、もう組織のできてる所に行こうって言って。で、移ったわけなんですよね。

内田：ああ、はい。

小嶋：でも、周りでも、やっぱりボランティアで、その、マスターベーションで言われたんですけど、マスターベーション求めてくるんじゃだめだよ、みたいな言って。だから、ちょっとここで移んのはどうかなって思ったけど、うん、移りました。

内田：うん、うん。なんか、ボランティアの一番、その、今回の、ちょっと難しいって言うか、その、コーディネーターの必要性っておっしゃいましたよね。コーディネーターの必要性みたいのすごく感じられたんですね。

小嶋：そうですね。

内田：それと、あの、行きたい人で、一週間ぐらいで行ける人はいくらでもいるんだから、あの、さっきおっしゃいましたけど、あの、あれだけの災害でボランティアが余るはずがないって、言っていましたね、すると、かたっぽで絶対に、あの、必要な人がいるはずですよ。

小嶋：ええ。

内田：それで、あの、せっかく一杯行く人はいるのに、その、コーディネーターが、こう、ちゃんといなかったっていうところ、一番、よく見てこられたわけですね。

小嶋：そうですね。

内田：ちょうど、その最中を見てこられて・・・、うん・・・。

小嶋：ええ、もう、結構エネルギーある人が、もう一カ月ぐらい泊まり込むつもりで来るのに・・・。

内田：ええ、ええ。

小嶋：だからそれを何とか生かそう。でもすごく、なんか、コーディネーターさんの能力が、ものすごいあったと思うんですよ、私は。だから、一週間で形はつけて見せるっておっしゃてました。

内田：ええ、ええ。

小嶋：で、そのあとも、こういう報告あるんですけども、すごく活動きちんとやりましたから。もう、じゃあ、この人がいたから、その何百人というボランティアさんは、ねえ、行って、行ったかいがあったと言って帰ってくる、みたいな。すごい、いるんですよ、千・・・、何人だろうな・・・、延べ人数千五百人来てるんですよ、ここには。

内田：ええ、ええ。で、そのかたをみていて、やっぱり、一番、何て言うんですか、あの、参考になった・・・、ていうんですか、ボランティア活動の・・・、ていう感じですか。

小嶋：そうですね。

内田：コーディネーターの必要性みたいなこと・・・。

小嶋：もう、行こうって言う人は山ほどいるから、それは・・・。

内田：そう。

小嶋：善意をいかに生かすかっていうんで、そういう人が必要ですよ。

内田：ええ、ええ。

栗坂：それを生かすのが調査ってことですよ。

小嶋：そう、大事だと思いますよ。ただ、いまいち、やり甲斐は感じられないけど。

栗坂：それがないと全然・・・。

内田：状況は毎日変わっているし、くるし・・・。でも、一月ぐらいたつと、かなり、その、あの、急盛期とかいう、そのような変化が・・・、あの、やっぱ、ちょうど難しいときだったんですかね。

小嶋：そうですね。

内田：すぐだったらいくらでも仕事はあったんだと思うんですよ、肉体労働とか・・・。

小嶋：そうですね。だからもう、物資がどうとかっていうんじゃないって、メンタルヘルスのところを手伝おうと行って行ったんですけど・・・、だから、子供が、まず虐待されていないかっていうのを、一番見て来いって言われたんですよ。それで、私達は行きましたんですけど・・・。でも、そういう調査ってすごい難しくって、わかんない・・・、私達も素人だから、だから本当に、手探りでやったんですよ。まあ、これ以降のことは、三宅さんがよく知っていらっしゃるんですけど・・・。

内田：それは、引き続き、三宅さんが、ずっとそこにいらしたんですか。

小嶋：ええ、私が行って帰ってから、彼女は行ったんですけど。

内田：でも一週間ですよ。

小嶋：そうですね。

内田：やっぱり、あれなんですか。行ったらすぐ仕事があって、もう、一日八時間なり、何なり、体動かすなり、何なりして、ずーっと仕事があったらいいなっていうふう
に思ったわけですよ。

小嶋：それは思いますね。

内田：だけど具体的には、普通はないっていうことが分か・・・、なかったわけですよ
ね。ない人が一杯いたわけですよ。でも、かたっぽでは、ものすごく忙しくて、
徹夜でずっとやってるようなところもあったわけだから。

小嶋：うん。

内田：そこは、何とかできないかっていうふうに思われた・・・。

小嶋：えそれは、地区的に・・・

内田：ええ、多分ね、きっとすごい忙しい思いをしているボランティアも、きっといたん
でしょね、基本的には。

小嶋：だと思えますね。

内田：やっぱり、そういう感じでしたそんな気がしたから・・・。

小嶋：それは、うん、実際にそれを実感したことはないですけど。

内田：ええ、ええ。

小嶋：あの、行く前に、私、もう、なん・・・、東京で、その、重度心身障害者の介護に
入っていたんですよ。で、そういう、普段でさえ人手が足りなくてね、もう、生き
るか、死ぬかっていう人がいるのに、この地震で、この人たちどうなってんだろ
う、神戸にも、もちろんいるでしょうから、で、そういうこと考えたら、人手なん
て余るはずないって思って、やっぱ・・・。

内田：うん、そうですね。

小嶋：でも、その声は私達に聞こえてこないし・・・。こういうのって何なんだろうねっ
て言ってたんですよ。

内田：うん、うん。

栗坂：人手が必要だけど、助けを求める・・・。

小嶋：あ、それはあると思う。次のほう・・・、別のところになっちゃうけど、助けてっ
て・・・。

栗坂：変わられたんですか

小嶋：そうそう。

内田：変わっていかれたんですよ。

(3) 「応援する市民の会」での活動ー地域の人々との関わり

小嶋：ええ、まず、じゃあ、そこの説明した方がいいですね。

内田：ええ、お願いします。

小嶋：あの、そこは基本的に通いのボランティアさんを扱うところで、で、まあ、バック
アップしてユースホステルがついてて、ユースが宿舎を提供しましょう・・・。

内田：ええ、ええ。

小嶋：で、そこは、あの、毎朝、こう、ボランティアで、例えば、水汲み——男四人とか
いって、こう、紙が貼り出されて、で、通って来たボランティアさんが、そこに名
前ぺたぺた貼って行くわけで。で、あの、行く前に、スタッフが、こう、オリエン
テーションしてくれたりとかって、すごい組織はしっかりしてたんですよ。

内田：ああ、ああ。

小嶋：で、そこに通って、毎日違う仕事をしたんですね。っていうことですね。

内田：そこは、自分で捜されたんですか。

小嶋：それは・・・です・・・。あ、あの、私ユースホステルの会員なんで、そこからの
新聞できて、そういう情報あったんですよ。

内田：ええ、ええ。

小嶋：だから、てんかんはこういう状況だから、ちょっと他捜そうって言って、ユースに
あたったんですよ。紹介してくれるって言うから。

内田：でも、すごく悩みましたよね、その、変わる時は・・・。

小嶋：悩みましたよ。

内田：でも、せっかく行ったんだから、やっぱ意義あることとして帰りたいと思う
し・・・。

小嶋：うん。

内田：うん・・・。で、行って、それで結局どうでした。そちらの方の仕事はどう・・・
でした。

小嶋：それは、そうですね、ああ・・・。でもね、意義あることやりたいって言ってて
も、別に炊き出しやりたいとも、なんか、物資分けたいとかって、そういうこと
思ってたわけじゃ、ではなく、ない・・・。うん、でも、わかんない・・・。
やっぱり、どっかで、なんかそういうやり甲斐があるのを求めちゃったのかなっ
ていって、マスターベーションで言われて、ちょっと、うーんと思っで・・・。

栗坂：マスターベーションって、目に見えて、実感できるような仕事をしたかった・・・

小嶋：そうそう、で、だからてんかんでもいいけど、なんかまだ分かんない・・・、
ちょっとわかんない調査を三日間ぐらい手伝ってやるっていうんだったら、まあ、
一カ月やる人達がやった方がいいって・・・。だから、まあ、移ったわけで。う
ーん、でもね、そこも、まあ変な話ですけど、そういう水汲みとか、タンズ立て直
すような作業とか、人気あるんですよ。で、人気がないのは何かっていうと、あ
の、頼まれたことじゃないんだけど、こう五人ぐらいチームをくんで、ある地区
を、こう、くまなく廻って、「お困りのことありませんか」っていう、そういう自
主的な、それは会が作ったものですよ、要請じゃなくてね。それはまあ、人気にな
くって、まあ、それもやり甲斐よくわかんないし。それで、それに、一番最初
行って。

内田：うん。

小嶋：うん。でも、やっぱりそういうのが一番大事だなって、そういう仕事があるから、こういう会が成り立つんだって。そういう巡回で廻って来たから、あ、助けてくれるところあるんだって言って、言ってくる人多いですから・・・、うん。

内田：やっぱり、こう、目に見えてることっていいけどね、あの、必要な人を、こう、するっていうのはね、ちゅうのは難しいし、一番大事だし、一週間ぐらい東京から行ってできるっていうの、ちょっと難しい仕事ですよ。でも、やっぱ、そこで一番こう、大事なところを見て来られたわけですよ。

小嶋：うん、だから、なんか、社会福祉でもニーズの発見とか、すごい難しくて、しかも私なんか東京で家はあるし、こんな私が困ってることないですかなんて聞けないよな・・・できるかなあ、ていうのはあったんですけど。

内田：私なんかも、結構、お聞きすると、やっぱ、見ることに全部見てきちゃってるっていう感じだから、コーディネーターの問題にしても、それから、その必要な人を発見する・・・発見して、何かしてもらうのはいくらでも、こう、人手はいると思うんだけど・・・。発見するところへんは、ボランティアがやるのは無理だと思いました。

小嶋：そうです・・・、え・・・あ・・・

内田：そこは、やっぱり、地元の人なり、行政なり、その、むこうの、あ、なんかそういう福祉のプロなりが行って、発見すでにされた問題を、こう、具体的に体を使ってやるのが、ボランティアだっていうふうに思いました。

小嶋：理想はそうですよね。ただ、でも人手、こういうくまなく廻るっていうのは、ボランティアじゃないとできないでしょうね。

内田：ですよ、うん・・・。

小嶋：うん、だから、もう、うーん、専門知識じゃないけど、ちょっとは、こう色々人との・・・、聞き方でも、すごく、あの、「お宅は困ってませんか」という聞き方じゃ、やっぱ返ってこないとかがあって・・・。

内田：うん、うん。

小嶋：なんか、そう、「このあたりで、お困りの方いらっしゃるかご存じないですか」、みたいに聞くでしょ・・・。

内田：うんうん。

小嶋：一方的に、こう、助けてもらうような形にはするとかって。まあ、それに限らず、色々、そういうことをボランティアにまず教えて、する必要は取り合えず、なんか、あると思いますけど、うん。

内田：でも、そこまでボランティア教育するだけの金も無いっていう感じだったんですか。

小嶋：そうですね。

内田：だから、実際やってらっしゃって分かったわけですよ。

小嶋：そうです、正にそうです。

栗坂：そういう調査って、現地の調査とか、地域の人とか、そのへんに詳しい人がやったほうがいいんでしょうかねえ。

小嶋：一番はそうですね、うん。

栗坂：そういう人達は、自分たちのまわりのことで精一杯だった。

小嶋：その人達もその人達なりに、すごく、近所、うん、ものすごい、なんか、わりと近所付き合い深まったんじゃないかっていう感じ、ものすごい、連帯感が深まったの一杯いるんですよね。やっていますよね、実際。で、自分の家解放して避難所にした人もいるし。でも、やっぱり、それだけじゃ、落ちちゃう人がいるっていうのがあって、だから、もう、くまなく廻る必要がでてきちゃうんですね。うん、やっぱり、まあ、地元の人を組織化できれば一番いいって事なんでしょうけどねえ。でも、まだそこまで落ち着いてなかったんですよね。うん。

内田：うん。

小嶋：で、一緒に行った人なんか、こう、結構、チャイムとか押しても出て来ない、居留守使った人もいて。まあ、ボランティアがちょっと多すぎて、うるさいっていうのもありますけど……。

内田：ああ、はいはい。

小嶋：まあ、ただ、うさん臭いかなあって感じで出て来ない人もいて……、別にむこうが言って来ないんならいいんじゃない、とか言って、次行こうみたいな人もいるんだけど。でも、やっぱり、そういう、確かにうさん臭いじゃないですか、東京から来て。うん、でも、できればそれを越えて……。だって、きっと助けてって言えない人はいると思ったから。やっぱり、家がものすごい立派な、建ってても中はどこだってすごいんですよ、被災で。

内田：ええ、ええ。

小嶋：立派な家でも死んだ人は一杯いるわけでね……。だから、うーん、むこうから言って来ないからいいんじゃないみたいなのは、ちょっとどうかな、なんて思ったり。

内田：避難所には行かれなくて、あの、あの、家が、あの、壊れたり、半分ぐらい壊れてる所に住んでる所に、主に、地域をまわって行かれたんですよね。

小嶋：避難所、あ……。

内田：も、行かれた

小嶋：この会じゃ行かなかったんですね。

内田：ええ。

小嶋：地域……。

内田：地域を……。

小嶋：……を廻りました。あの、別に壊れてるとかに限らないで、立派な所も全部ね、とにかく廻って……。

内田：でも、私なんかむこうに行って聞くと、避難所に行ってる人はまだいいっ

て・・・。壊れかけてる家で、あの、一人ですうっといいる人の方が、かえってね、大変な思いしてるとか、お弁当とか含めると、ちょっともらえない、だとか、そんな話も聞いたから。やっぱ、家にいる方のところに行かれたってゆうのはすごく・・・

小嶋：そうなんですよ。あと、あの安全だとか、治安悪くなったとかいうので、あの、壊れかけた家に、あえて戻る人っているんですよ。

内田：うん、うん。で、あと避難所の人間関係、ああいうの嫌だ、とかね。戻る人とかっているような気がしますしね。

小嶋：そうなんですよ。

内田：だから、やっぱり、うん、暮らして、家で暮らしてる人が安全とかって事でもないし、そういうところ廻って行かれたのは、うん、いいと思ったんですけど・・・。それで、二日・・・ですよ。それは・・・。

小嶋：いえ、二日・・・。

内田：二日間でしょ、そのときは。三日やられました。

小嶋：ええっと、この会ですか

内田：ええ、ええ。

小嶋：それは一日だけやりました。

内田：ですよ。前が三日間でらしたものの、うん。

小嶋：そうですね。

内田：うん、それで、でもやっぱり、何かお役に、あの、たつかなあとか、その、感じたこととかありますおばあさんとか、その、家にいる人とか。

小嶋：なんか、そうですね。私が廻った所は、やっぱ、高級住宅地で、誰も特に困っていませんっていうけど。うーん、でも、まあ、偶然、あの、私達ではないんですけど、私、そういうの、訪問お手伝い隊っていう役なんですけど、偶然、そのお手伝い隊と行き違って、話をしたおかげで、あの、こういうところがあるんだって分かって、こう、目茶目茶な家を、こう、手伝って欲しいっていうのをやっとな頼めたって、言ってる人もいて。そうね、もう、私のときはなかったですけど、そういうことありますよね。

内田：で、あの、しょっちゅうこう人が来て、いいかげんイヤ、とかいうのもあるけど、やっぱ、あの、来てくれてよかったって、特に何もないけどっていうようなこともあったんですよ。

小嶋：あ、もう皆さん、すごくね、いい、なんか私達恐縮しちゃうぐらい、すごくいい対応してくれて、もう、ありがとうって言われて・・・。

内田：うん、うん。

小嶋：でも、東京の人に話してきてね。すごい、何か、本当にありがとうって言われてね、なんか、あれは、それは恐縮しちゃったんですよ。だって、そっちは家潰れてんじゃないですか。

内田：でもやっぱり、ああいうふうに日常じゃなくて、あの、お客さんとか誰も来てくれないのに、全然、こう関係ない人でも、そういう一緒にいるっていうのも、うれし
いんじゃないかと思ったんだけど・・・。

小嶋：おじいさんとか、おばあさんとかそうかもしれないですね。

内田：うん、うん。そういう意義とかっていうのもあるような気がするんですけ
ど・・・。

小嶋：うん、あるといいですね。うん、まあ、そういうのをこう、見つけてくる人達も、
こう、いますよね。ま、だから・・・。

内田：行ってあげるっていうだけで、いいっていうか・・・。

小嶋：そうですね。

内田：あの、電話も通じないとか、誰も、こう、来てくれないとかの時に、人の声を聞く
とか、言葉を聞けるっていうだけでもよかったって言うよね。

小嶋：ええ、そう。

内田：あと、そんななかったから、私は・・・。

小嶋：ああ、私は経験してないですけど、そういうのは色々聞きました、話は。うん、
ちょっと、私が廻った所は特殊で、山の手の豪邸が建ち並ぶ所だったから。

内田：でもやっぱり地震で、あの、やっぱり不安だったりとか、そのあと、やっぱ不安
だったりとかは誰でもありますけど・・・。

小嶋：うん、まあそうですね。

内田：誰でもありますよね。そういうとこ廻られたんですか。

小嶋：うん、ちょっとびっくり。

栗坂：そのへんの状況っていうのは、どうだったんですか。

小嶋：状況、あの、家ですか。豪邸の。

栗坂：豪邸っていうか、その辺りの状況とかっていうのは・・・。

小嶋：えーと、バツと見はなんでもないんです、本当に、うん、ちゃんと建ってて、で、
ちょっとショックだったのは、その山の手の豪邸住宅地っていうのと、それ以外
の、こう、庶民の、庶民っていうと変ですけど、そういう、もう、すごくピシッと
わかれてて、もうそっからベシヤベシヤなんですね。

内田：ああ・・・。

小嶋：で、そこだけ、こう、だから、なんか経済状態がね、人の生き死ににまでね、変
わっちゃうんだなあってショックだったんですけど・・・。

で、えっと、その日の別に、あの別の日に依頼があって、もう一回、その辺りの家
に行ったんですよね。で、家に上がり込んだときあるんですけど。もう、だって、
あんな立派な家でも、なんか、床がどっかで半分に折れてたりだとか、わかんない
んだけど、実は、傾いてたりとかね。タンスはもう残らず、間違いなく、ずれ動い
てたり倒れてるんですよ、どこでも。私、で、話聞いたら、その、私が行った家の
近所だけでも、もう、十人死んだっていうふうに言ってんですよ。この通りだけで

十人死んだって。だからもう、パッと見のきれいな家並みで、なんか、みんないい人で避難、あの避難場所に家貸してる人もいてっていうだけでも、やっぱりこれはすごかったんだなあってね、思いましたね。

内田：下町に行かれたボランティアさんもいるんですか。

小嶋：いますよ。で、それでその人達は、その半壊の家で、一人でおばさんがいたのを見つけた、とかね、言っていましたよ。

内田：うん。

小嶋：結構、危険だったんじゃないかな。

栗坂：災害泥棒とか多かったんですよ。

小嶋：それはね。だから、あと、区画整理厳しいみたいで、絶対家を守るんだ、とか言って・・・。

内田：ええ、そういう意味で守るのね区画整理から。なるほど・・・、持ってる人はね。

小嶋：うん。

(4) ボランティア活動を通して印象に残ったこと

内田：あの、もう、大体行ったぶんはあれですけど、聞いた・・・、ボランティアした後の話とかは、聞いたら結局、行った時、行かれた時は、大体、まあ、漠然とですよ。どんな仕事があるかなあとか、不安とか持って行かれたと思うんですけど・・・。行って、あの、最初行って途中で、ああこれではって自分で考えて変わっていったわけですよ。で、両方経験なされたけど、すごく、あの、短い間だけど、すごく経験、すごい経験だったというふうに思われたわけですよ。

小嶋：ええ。

内田：だから、今その、例えばむこうでコーディネーターの話とか、その、なんかありましたけど、他に、なんかこう、ここ、こういうことってというのは、あの、自分で思ってもいないようなことってというのは、なんかありました。

小嶋：地震で、うーん・・・。

内田：地震がすごいっていうことは思ったわけですよ。

小嶋：ええ。

小嶋：印象深かった問題はありましたけど、え、どうでしょうか、うん・・・。

内田：うん、でもケースで、こういうことすごく感、あの、なんか心に残ったとかっていうような人とか・・・、そういうのとか・・・

小嶋：ああ、ありますよ。・・・ていうか、例ですけど。うーんと、その、おじいさんが、そのやっぱり山の手のいいお家に住む一人暮らしのおじいさんが、その、家具を立ててくださいっていうので、行ったんですけど・・・。その人は、もう奥さんは何年前に亡くして、一人っきりなんです。だから、もうねえ、奥さん亡くしたうえにそれがきちゃってっていうのに、すごい・・・、で、しかもでっかいお家に一人、っていうのは辛かったみたいで。で、まあ、それを、そこに男の人二人と

女の人二人、四人で行って、色々やったんですけど。で、そう、いろんな割れちゃったガラスの器とかも、こう欠けたの、どんどん捨てたりとかするんですよね。で、まあ、なんとか、こう、歩けるような状態にして。うん、で、あとでお寿司食べながら話してて、あの、お寿司取ってくれて食べたんですよ。

内田：お寿司取ってくれたんだ。すごいですね。

小嶋：そう、それで、なんか、で、その時ボソツと言って、そういう全部思い出・・・、奥さんの思い出の食器だったわけですよ。

内田：うん、うん。

小嶋：で、ちょっと欠けた、とかいって・・・。本当は、じゃあ、昔のおじいさんですし、捨てるっていうののすごい、もう、身を切られるように辛かったんだって・・・、だけど、そんなことを言ったら笑われる、とかね。あとまあ、ものすごい、ものすごい数だから、その、きりがなし・・・、だけど、本当にものすごい辛かったって言われて・・・。で、そんな、そういうとこってなかなか気遣ってできないっていうか・・・。うーん、なんか、ただ、ああ、もったいなーいとか言って捨ててたのが、ねえ、そんな気持ちじゃないですよ、おじいさんは。だから、もっと、こう分かってボランティアしたいなって思いました。

内田：うん、うん。私にも、ちょっとそのへんね、あの、結局私も向こうですか・・・。だから、あのお金が無くなったとか、物がなくなったよりも、思い出がなくなったっていう、そういうね、あの、被害っていうものもあるんじゃないか・・・。自分が、こう小さい時から見ている風景とか、公園とか、山とか、家とか、こうあるじゃないですか。そういう竹まいとかが全部なくなったっていう・・・、そういうね、あの、思い出がなくなったというのがあるんだなっていうと、今の話聞いてるとね。もう皿一つでも、その、いくらでも買い足せるけれども、やっぱり思い出がなくなったっていう辛い思いっていうのはねえ、やっぱり。

小嶋：大きいですよ。

栗坂：うん、精神的にきそうですよね。

小嶋：ねえ、で、それをなんか一緒にまた作り・・・、あの、新しい思い出を作ってくれる奥さんがいるとかならいいけどねえ。

内田：でもまあ、若いボランティアさんが行って、少しはねえ。そのへん、どうでしょうかねえ。

小嶋：そう、で、結構仲良くなって、ゴールデンウィークとか遊びに行ったんですよ。

内田：あ、すごいですよねえ。

栗坂：うん、ボランティアの延長みたいに。

小嶋：そうですね。

内田：そう、すごい成果じゃないですか。

小嶋：うん、それはすごく嬉しかったです。ただね・・・。

内田：うん。

小嶋：あ、いいですか。そのおじいさんが帰りに五千円、四人分、五千円だから、二万く
れて・・・、でも・・・。

内田：一人五千円！！すごい。

小嶋：でも絶対に受け取るなって言われて。でも、もう引き下がれないぐらい、こう、渡
されちゃったから、もらって・・・、で、それは会に寄付する形にしたんです。

内田：うん、うん。

小嶋：そしたら、あの、うん、あとで会のほうから、そのおじいさんに電話で寄付にしま
したって言ったら、おじいさんがもう、それですごい気にしちゃって・・・。

内田：うん、だと思えますよ。

小嶋：うん、何らかの、もう、お返しをしたいのね。で、まあお金ある人だったのかもしれ
ないけど、うん。で、それを受け取ってもらえなかったというので・・・。

内田：うん。

小嶋：うん、もうボランティア頼まないって言うんですよ。でも、ボランティアってそう
いうお金で来てんじゃないんですよ、とか言っても、もう、感覚違いますからね
え。したくてたまらないから・・・。

内田：受け取れないって言ってるけど、私なんかはその気持ち分かります。

小嶋：うん・・・。

内田：年寄りも、お金は一杯持ってますし、その人、持ってるじゃないですか。受け取っ
てもらおう楽しみ・・・。

小嶋：ありますよねえ。

内田：それをね、だけど、そこはやっぱ、あの、言ってしまったでしょ。だから、すご
く、そう言われるのもっともだと思えますよ。

小嶋：うん。

内田：だから、やっぱすごい経験してきたんですよ。そういう思いをね。

あの、だから、その、うん、ボランティアはもらわないものなんだけど、おじいさんに
とってはもらってもらって事がね、ものすごく喜びその時最大だと思えますよ。
それで、こんな若い子に小遣いやれてよかった、と思えたよ・・・。うん、だけ
ど、そこがねえ。そんなきわどいことまでしてきたんだ。

小嶋：そう、で、その会の人なんかは、結構、ボランティアの理念とか、頭にこう、パ
シッと入ってるから、そんな安易な御礼はいりません、とかって・・・。

内田：ううう・・・。

小嶋：あの、直接は言わないですよ、ただ、言うんですけど。だから、で、私達は、こ
う、ボランティア、ボランティアって言われてやっていますから・・・。だけど、普
通の人はそういう感覚なくて、やっぱ御礼をしたいってあるからねえ。

内田：うん、うん。

小嶋：うん。

栗坂：実際にそこでお金を受け取って、会の方で何にも言わず、おじいさんにはそうして

あげたほうがよかったんですね。

小嶋：ねえ、そうだよねえ。

内田：うん。

小嶋：組織上、さあ、認められないから。やっぱ、そういうところって、もっとうまく・・・。

内田：ですよ、うん。

小嶋：やれたねえ・・・。

内田：おじいさんは、よっぽど受け取ってもらって、ありがとうって言ってくれたら、よっぽど嬉しかったでしょうね。

小嶋：うん。

栗坂：渋々お金をよこせって、言ったわけじゃないから・・・、ねえ。(笑)

内田：でも、あげる人ができて嬉しかったんですよ。

小嶋：うん。

内田：自分の孫とか子供とかにはあげられないじゃないですか。そう今簡単に。うちの嫁さんが、「うちの孫にお金あげないでください」、とか言うじゃない。

小嶋：うん。

内田：それが受け取ってもらえれば、とても嬉しいと思うんですよ。

小嶋：そうですね。

内田：でも、そこができないところがね、もう・・・ねえ。

小嶋：うん。

内田：うん、だから、きわどかったですよね。ものすごい経験ですよ。ああ、すごいなあ。

小嶋：お金もらうなっていうのも、case by caseっていう感じですよ。ねえ。

内田：ああ、そうですねえ、うん。

小嶋：まあね、組織っていう・・・、組織っていう以上、問題があるけどねえ。

だからってわけじゃないけど、遊びに行ったときは散々おごってもらって・・・。

内田：ああ、はいはい。

小嶋：なんか・・・。

栗坂：おじいさん楽しそうだったんじゃないですか。

小嶋：だと思えますよ、うん・・・。

内田：今ねえ、肉親の孫でもねえ、色々ついて来れないようなこととか。でもそれは最大の、あれじゃない、収穫だったんじゃないですか。

小嶋：そう思いますよ。写真あるよ・・・。

内田：見せて、見せて・・・。(笑)

内田：でもね、そういう事がね、やっぱ、ボランティア活動で、その行った一週間は特にこれということはないかもしれないけど、そういうのが一番の成果じゃないお手紙くれたの

小嶋：いえ、これから出すんですよ。あ、そういえば、このおじいさん手をぶつけちゃって字を書けないからって、電話をよこ……。この、植木等に似ている……。

内田：どれ、見せて……。 (笑)

内田：へえ、彼女は……

小嶋：飯野さんです。

内田：あ、よろ……。嬉しそうじゃない……。若い女の子二人に囲まれて……。どんなにか嬉しかったよね。やっぱ、だから地震があってから、初めてそんな嬉しかったんじゃないの。

小嶋：だといいですけどね。

内田：うん。

小嶋：で、あの、奥さんの話やっぱする……。で、私なんか、すごいそういうの楽しいんですよ。

内田：うん、うん。

小嶋：だから、奥さんの話って、やっぱ、恥ずかしくて……。

内田：うん、うん。

小嶋：こういう話、していいとか言って、笑わないっていう感じで話してくれて……。

内田：でもすごいボランティアだと思うよ、そういうの。そりゃ、あの、お金が無くて、その人には、まあ私なんか、災害貸し付けとか、炊き出しとか、そういうことは、具体的に、あの、目に見えることだけど。こう精神的にね、やっぱ、ちょっとでも支えになったあげられたっていうのはすごいボランティアじゃないですかねえ……。東京から若い女の子が二人じゃあ……。私は、こういうインタビューして……。でも、すごかっ……。すごいんじゃないですか、それは……。

小嶋：そうですか。で、私なんかも、ものすごい嬉しかったのは……。

内田：うん。

小嶋：友達じゃないけど、こういう知り合いができてって。で、あの、そういう神戸に知り合いがいるって事で、なんか、こう身近になるでしょう……。

内田：うん、うん。

小嶋：で、その行くことの原因で、もちろん、東京にいても事務作業の手伝いとかがあってうのできたんだけど……。

内田：うん、うん。

小嶋：行ったら、でも、忘れないでしょ……。

内田：うん。

小嶋：だから、あの、忘れられるのをすごい、こう、被災地の人も恐れてるって言うから……。

内田：うん、そう思います、うん。

小嶋：うん、だけど、行ったら……。で、そこで具体的に、人と話してっていうの、きっとこれから忘れないで、義援金送るしか、もう、これからやることってあんま

ないけど、うん、でも心に止めておけるって思いました。

内田：結局あれですか、組織的な活動っても、最後は個人と個人の問題で、で、それがいいって言うふうに思うんですけどね。どうなんでしょうかねえ。

栗坂：まあ、そんな、一週間とか短期で行って、結局そのままになってる人の方が多いんじゃないんでしょうかねえ。

内田：すごい財産にしたっていうか・・・。

小嶋：そうなんでしょうかね、うん。

内田：これが本当のボランティアだっていうふうに、私思うんですけど・・・。

小嶋：ああ、なんかそこまで言っていたら・・・。

内田：いや、でもそう思います。結局一週間ではね、本当に、あの、ねえ、そこまでできないですけども、そういうふうに、こう、つながっているっていうのはね・・・。

小嶋：うん・・・。

栗坂：一人でも二人でも・・・、こう、精神的に支えられたっていうのはなかなかできることじゃないと思うから・・・。

内田：ねえ。

小嶋：まあ、支えたかどうか分かんないから・・・。

内田：でも、ずうっと考えて、時々思っただけじゃない・・・、電話とかかけてあげたらいんじゃない

小嶋：そうですね。

内田：うん。

小嶋：で、また、でも、これは、こう計画・・・、夏休みとかにね、また行ったりとかしようと思うんですけど・・・。

内田：連休にねえ・・・。ああ、そうなんだ。あ、びっくりしちゃった、そこまでやるんですかあ。

小嶋：え、いやあ・・・、うん・・・。

栗坂：でも、嬉しいんじゃないんですかね。孫とか、そういうのみたいで。

内田：うん。

小嶋：うん、だといいいんですけどね。

栗坂：家族がいらっしやらなかったりとかしたら、一人暮らしだから・・・

小嶋：うん、だけどね・・・あ、脱線していいですか？

内田：あ、どうぞ。

小嶋：このおじいさんの奥さん、ミス神戸なの。

内田：ええ～！だったんだ。（笑）

小嶋：すごいきれいで。

内田：うん。

小嶋：で、このおじいさん結構、顔広くて知り合い多いんだけど、宝塚の人が知り合いだったりするのね。だからこのおじいさん、絶対面食いだよね・・・、とか言っ

て・・・。私達でいいのかなあ・・・、とか言って・・・。

内田：いいんですって・・・。

栗坂：でも、結局、身近に自分のこと常に考えてくれてる人がいるっていうのは、結局家族じゃないとありえないから、それはすごいなって。

小嶋：うん。

内田：今度のことで、そういうふうになえ、おじいさんがそういうふうにな、うん、新しいお友達とか、ねえ、若い友達とかできたら、ねえ、とかってねえ。もっと、こう大変な思いしている人は、まあ、それ以前の人一杯いると思いますけど・・・。

小嶋：うん・・・。

栗坂：一番の収穫・・・。

内田：ですよ。そのかたにも皆さんにも、すごいなあって・・・。やあ、そういう話聞けると思わなかったわ、うん。

小嶋：ほんとにな・・・、うん。

内田：いやあ、びっくりしました・・・。

小嶋：うん、そう、だから、まあこれに限らず、本当に行ってよかったって思ってるけど・・・。

内田：ええ、ええ。

小嶋：これがあつたおかげで、すごく、なんか・・・。

内田：ええ、ええ。

小嶋：なんていう・・・、気持ちって。何かね、これだけでもあつたからよかったっていうのあります。

内田：うん、うん。でも、ボランティアって、そういうのじゃないのかしらね・・・。

小嶋：うん・・・。

4. 今後に向けて

内田：だって、これからみんなは、両方とも平和な暮らしになるわけですけどね。

小嶋：うん、え、そうですね、最初は個人的な気持ちですからね。

内田：うん。

小嶋：組織がないと動かなかつたから、色々組織が存在したっていう感じで。

栗坂：何にも収穫がなかつた・・・。

内田：とか思うよりはねえ。また行きますボランティアってあつたら。

小嶋：あ、行きますよ。

内田：ああ、やっぱり・・・。

小嶋：うん、大学生ですからね。だって大学生だから、今行かなかつたら、じゃ、いつ行くのって。

内田：うん。

小嶋：この状況で動けない人間がいつ動けるのって。

栗坂：でも、それは、結構、個々人の家庭環境で左右されますよね。

小嶋：ああ。

栗坂：行きたくても、やっぱり、離れられない人もいますから・・・。

小嶋：あ、そうそう。だから、自分に向けて思ったことだけど。行かなきゃいけないってことは、もちろんあるよね。でも、だけど、うん、なんかね、私、結構、行くって言うときって批判的な声がきつかったんだよね。

内田：それも分かります、うん。だけど、だけど行っても批判されるし、行かなくても批判はされるよ、逆に。

小嶋：うん。

内田：そうすると、行く方をあえて選んだんだから、それは行かなきゃ。

小嶋：うん、多分、だってこんなにボランティアが動かない時代ってあったじゃない・・・。

内田：うん、そうだ、そう。

小嶋：そういう時は、もう、まず足を動かすんだ、まず行くんだ、経験するんだ。て、こう、かき立てなきゃいけない時もあったから、これだけ動いたっていうのは、もう、「無鉄砲ボラ」がいたとしても、よかったんじゃないかなって。

内田：だって、行った限りは、何かを得て来たいとかって、誰だって思ってるじゃないですか。だから、そう、真面目に、やっぱりやるじゃないですか、あの、一週間のうちね。そしたらなんか、やっぱり、その、したらやっぱり、ああいう状況だから、普段のとき見えないもの、やっぱり見える・・・、と思うんですよね。だから、やっぱり、ちゃんと行ったほうがいいですよ。行ったり、行くことを批判するっていうのはおかしいですよ。それは行かない人が批判するのはおかしいですよ。

小嶋：批判って言うか、冷静になれっていう・・・。なんか、だから行くぐらいなら、交通費を義援金にしろよ、とか。

内田：そういうやり方もある。

小嶋：まあ、それも方法ですけどね。

内田：うん。

小嶋：だから、あなたはちょっと今、頭に血が上っているんじゃないの、みたいな、うん。

内田：それはちょっと・・・。

栗坂：向こう、あ、なんにも計画なしにいったなら、そう言われるかもしれないけど。こう、受け入れ先手配して、まあ、見通しが立って行くのは・・・。

内田：ねえ。

栗坂：いいんじゃないかなあ。

小嶋：うん、だから、まず行こうと思っても、血が上ってても、何でもいいけど、そのあとちょっと冷静になって、その、避難所の、こう、場所をとって誰かに迷惑かけ

た、とかいうんじゃないかなあ・・・・。

内田：うん、うん。

小嶋：だから、ちょっと冷静になって、一番、自分には、こう、行くっていう気持ちがあるから、それを一番いい形で生かすためには、どうしたらいいかって考えれば・・・・。

内田：うん、うん。

小嶋：でも、行っちゃえばいいと思いますけど・・・・。

内田：ねえ、ですよねえ、そうですよねえ、ちゃんと受け入れ先も・・・・。

栗坂：行かないよりはねえ。

内田：ねえ、うん。いや、非常になって、びっくりというか、感心しました。

小嶋：いやいや。でもね、行って、何か変な言い方だけど、私うらやましいなっと思って、神戸の人がすごい・・・・。

内田：わかります。

小嶋：頑張ってる、私なんかどうせよそ者だし、これから帰って行くから、なんか。で、こんな目にあってうらやましいって、失礼だと思いますけど。

内田：それは・・・・、うん。わかります、うん。

小嶋：うん、だからね、私、東京であつたら頑張ろうとか、そういうのすごい思って帰って来たんだけど・・・・。うん、うらやましかった。

内田：正直で、正直で、本当にねえ、あの、ああいうことでもなければ、いつもなんとなくダラダラって、過ごしちゃうよね。

小嶋：うん。

内田：だから、ああいうことがあって、あの、周りの人達と、地域の人と話したり、親子で話したり、とか。

小嶋：うん。

内田：そういうんじゃないかって、できないのかなあとは思いますが・・・・。

小嶋：まあね。

内田：なんか平和なときはね。

小嶋：ええ。

内田：やっぱり、どうしても・・・・うん。でもそういう意味でうらやましいっていうの、同感ですよ。

小嶋：東京で地震があつたらって考えたけど、やっぱり、このタンスがこうくるから私はここへ逃げよう・・・・とか、色々家で考えてたんだけど・・・・。

内田：うん、うん。

小嶋：そこまでしか考えてなくて。でも、なんかそれ以上、色々できるんだなあって。

内田：ええ、ええ。

小嶋：皆で協力したりとか、なんか、建て直していくのとかどうするんだろうなあと思って・・・・。

内田：ええ。

小嶋：なんか、すごく東京の地震きたら怖いけど、勇気づけられたって・・・。

内田：ああ、なるほどね。

小嶋：きたら頑張るぞ、みたいな・・・。死んじゃったら、もう、しょうがないけど。

(笑)

内田：すごいね。やっぱすごいね。そういうこと、やっぱ若い人って、すごいそういうふうを感じるんだね。やっぱり、私も行ったんですけど全然立場も違うし、そこまで、そういうふうにはね。うらやましいっていうのはちょっと思ったりしたけど。

小嶋：まあ、でも、大変さを知らないっていうのはありますけど。

栗坂：東京が、こう、壊滅しちゃったりとか、どうするのかなあとか、思いますよね。

内田：でも、人間の気持ちっていう点では、ですよ。そういう意味ですよ。

小嶋：うん、そうですね。

栗坂：勉強になりました。

内田：どうもありがとうございました。

小嶋：いいえ。

内田：すごい、ただ、感心し・・・。すごいねえ。やっぱり、ちゃんと見るものは・・・。

1. 藤井さん

『自分を豊かにしてくれる場としてのボランティア活動』

「（ボランティアに行って）あまりいいことはなかった。」や、「自分にとってどのような意味があったか、分からない。」というのが昨年6月頃の私の感想でした。

神戸では、ボランティアどうしの人間関係、被災した人との関係等、「人との関わり」でとても疲れていました。ボランティアどうしでは、単なる好き嫌い、性格の合う・合わないによるいざこざや、考え方の違い、意見の衝突があり、気がついてみれば、そのような仲間うちでの人間関係のゴタゴタを見ているのも非常に嫌な気持ちになり、また、自分も巻き込まれていたり、もううんざりとしていました。

また、現地の被害の凄まじさは想像以上で、それだけでもうショックを受けて呆然としていました。焼け跡には花束や遺影が置かれており、帰る頃にはそこには新しいビルが建てられていく、被災された人たちは一体どのような思いでそれを見ているのだろう。そのような人たちが癒されることはできるのか、テレビや新聞では心理的ケアが流行語のようになっていた時期でしたが、私は、「当事者でなければわかりはしない。誰が癒すことができるのか。」と感じていました。

逐語記録にもありますが、避難所のおばあさんとの関わりでは、「どうせあなたもいなくなってしまう。」「死にたい。」と言われ、若い人にとっては、「復興」「新しい生活」というとその中に希望を見出すこともできるでしょうが、身寄りがなく、家も、以前からの友人も失ってしまった高齢者にとっては、そこには希望どころか、不安しか見出せないことに初めて気づきました。どのように声をかけてよいのか私には分からなくなってしまう、「このような被害に遭った人に対して自分は役に立つことができるのだろうか。」「本当に必要な援助とは何であるのか。」「どのようにかかわっていけばよいか。」等と悩みや疑問がいつも頭にあり、答えをだすこともできずにいたように思います。

嫌な思いや悲しさ、苦しさをいつまでもひきずっていて、自分にとってのボランティア体験について整理することができずにいました。

また、役にたつどころか自分も一緒に落ち込んでしまい、冷静、客観的な判断ができなくなる自分がとても情けなく、自分自身がとても嫌になっていました。

しかし、今思うと、確かに苦しいこともあったけれども、なぜ否定的なことしか思い出すことができなかつたのか、そのことが一番情けない気がします。「それでもなぜ自分が活動を続けたのか。」「なぜ頑張りたいと思ったのか。」を考えなかつた自分がとても恥ずかしいと思います。

普段私がボランティアに行っている人は、「あなたがいないとやっぱり私も困るけれども、私もあなたがいなくて間頑張るからあなたも頑張ってきてね。」と言ってくれました。避難所のおばあさんも「『死にたい。』と言ったら、『甘えている。自立しろ。』と言わ

れてきた。あなたは聴いてくれて毎日通ってくれた。嬉しかった。」「配給のまずい弁当もこうして二人で食べると美味しいね。」等、たくさん心に残る言葉をかけてくれていました。苦しかったことで頭がいっぱいになり、自分を支えてくれている人や、力づけられる体験を忘れてしまっていました。

人と人との関わるのだからそこでは様々な軋轢が生じたり、それによって苦しみもあるけれども、言葉で表現するのは難しいけれども、自分の心の底が揺さぶられ、「何としても頑張りたい。」という思いや、自然と顔が緩んでニコニコしてしまうような豊かな思いは、人と出会うこと、関わることの魅力であると思います。

ボランティア活動も様々ですが、誰かの生活の一部に関わり、その人自身を知り、できるだけ一緒に悩んで、些細なことでも一緒に喜ぶことができるような活動をしたいと私は思います。同時に、相手にとってもそのような存在になりたいと思います。ボランティア活動はそのように自分を豊かにしてくれる場であると考えています。

震災から一年たって、そこから考えているようなことはこのようなことです。

2. 梅沢さん

『私のボランティア元年ー苦悶の一年』

先日、同窓会の通知が届いた。被災地で共にボランティア活動した同志たちが、当時一緒に食事をし、宿泊し、活動の拠点としていたグループホームで再会を果たそうという呼び掛けであった。そういえば、別れ際に毎年3月20日の春分の日正午にポートタワーの下に集合しようって当てのない約束したことを思い出した。それぞれ再び自分の生活に戻る為に神戸を後にするとき、誰が言い出したのかもわからない当てもない約束が、日々メンバーが変化し流動するなかで不思議に語り継がれ、別れる際の挨拶となっていた。

この他にも、この一年間、現地から毎月通信が届いた。私が所属し活動した団体は、障害者の在宅生活を支援する既存の団体であった。震災以前から介助人派遣事業等の活動を展開していた基盤のしっかりした団体であったが、当時は、非常事態であった故に全国から集まるボランティアを受け入れて、一時的に被災障害者の救援活動を行っていた。その後約一年間は、依然、『被災障害者救援』的要素を残してはいたが、現在では、地域ボランティアに引き継がれ、通常の事業に戻りつつあることが、通信から伺い知ることができる。

しかし私はこの通信が届くといつも複雑な気持ちであった。帰った後も、気に掛けてくれて近況を知らせていただいて、見知った人が依然居残り、活動している様子が伝えられると嬉しかったり、また、現地で関わった障害者の方々が、住み良い神戸を目指して運動している記事を見ると「頑張っているなあ」と嬉しく、温かい気持ちになった。しかし、現在、遠く離れた所から、ただ通信を読んで、他人事のように無責任にも「頑張っているなあ」という一言しか言うことができず、これが、まがりなりにも神戸へ出掛けてボランティアしてきた私の実状なのかと自己嫌悪を感じざるを得ないのだった。

とにかくこの一年間は「ボランティア」について苦悶していた。神戸に出掛ける前も、また活動中も、そして帰ってきてからも、その意義・価値について考えた。こんなに「ボランティア」について真剣に考えることは今後あるかどうか、また、神戸に行かなかったらこんな事考えたのだろうか。私にとってもまさに記念すべき『ボランティア元年』だったと思う。

一年以上経過した今、あんなに辛くなるほど考えた「ボランティア」の事は不思議に考えなくなった。一年歳をとったせいなのだろうか、また、一年という時間が苦悶の時効となったのだろうか。通信が届いても冷静に読んでいる。一年前、仲間から、例の同窓会の話を聞いても、「私は神戸が愛しくなるほど、また、仲間が恋しくなるほどの活動ができたかどうか自信がない」なんて考えていた為、返事とは裏腹に、「参加しない」なんて思っていたのに、今回の同窓会の通知をみて、神戸も仲間も非常に恋しく懐しく感じている。

答えを得たというわけではないが、気持ちがふっきれた事には、これだけは心の整理が

ついたと言えるものが得られたからだと思う。それは、

「私は、神戸に行ったからこそ、今こうして遠く離れた地から神戸の復興を願い、喜ぶことができるのだ」ということ。

「三週間ではあったが、街の人達と一緒に生活したからこそ、もはや神戸は知らない街ではなくなり、気に掛ける事ができるのだ」ということ。

そして、「貴重な経験を提供してくれる契機となったのは、私を受け入れてくれたボランティア仲間であり、彼等との出会いにも今では感謝している。」とすることである。

「思い出」と「経験」とそして「神戸を愛しく思う気持ち」は、これはボランティアに行ったからこそ手に入れる事ができた、本当に宝物であると今やっと思えるようになった。いままでは、自分自身がボランティアの意義・価値を問うてばかりいて、体験を語る事に躊躇していたが、一年以上が経過して、やっとなら神戸でのボランティア活動の事を進んで語れるように思う。

3. 飯野さん

「後ろめたさを抱えて」

いわゆる「震災ボランティア」としての自分を振り返る時、私はいつも後ろめたい気持ちになる。自分は参加すべきではなかったのではないか、という思いがつきまとう。現地で大して役に立てなかったからというよりも、震災ボランティア活動に対する自分の姿勢のいい加減さが思い出されるからである。

インタビューの中でも答えたように、私が神戸に行ったのは、「成り行き」からであって、何か強い思いや動機があったわけではない。周りの友人達が「行くべきではないか」と深刻に悩む姿に触発されて、八方美人の悪い癖でつい「行く」と言ってしまったというのが正直な所だ。その時の自分の中には、「きっかけはどうあれ、行ってしまえば、神戸の人々の苦しみに少しでも共感できて何か手伝えるだろう」という気持ちがあったのだが、これも非常に安易な考えであった。この予想に反して、私は、現地で崩れた家々を目にしても、疲れ切った絶望的な表情の人々と言葉を交わしても、何も感じなかったのである。本当に何も感じなかった。ただ、自分は何と他人の痛みのわからない人間なのだろう、こんないい加減な気持ちで被災者と関わっていいのだろうか、という後ろめたさ、申し訳なさばかりがつのった。東京に戻ってくると、どこから情報が漏れたのか、色々な方面の人たちから「神戸にボランティアに行ってきたんだって」と聞かれ、「どうだった?」「偉いわねえ」と言われたが、その度に、私は返す言葉につまり、一層後ろめたさが増した。それでも、「何も感じなかった」という事実には変わりはなく、それは東京に戻ってからも変わらなかった。

このようなわけで、「震災ボランティア」経験は、私にとって苦い思いの残る経験である。ボランティア云々以前に、一人の人間としての自分の欠点—他人の痛みがわからない、他人に共感できない—を突き付けられた気がする。

福祉は同情の産物ではない。だが、他人の痛みに共感できない私に、福祉の道に進む資格があるのだろうか、という疑問となって、「震災ボランティア」経験は今も私の胸の中に渦巻いているのである。

～ 阪神・淡路の復興を祈りつつ ～

4. 小嶋さん

『人間には人を思いやる気持ちがある』

私たちが神戸に行ったのは震災からちょうど一か月後で、一応余震もおさまり皆ほっとしているのかと思っていたら、人々の恐怖はまだまだ続いていた。例えばお皿を食器戸棚に入れることさえも恐ろしくてできないほど。そんな恐怖は絶対理解できない自分、東京に帰っていつもの日常に戻れる自分に対していつも負い目があった。実際、

「東京の人に何が分かるんかと思った。」

「なんぼ説明したかて体験してない人には絶対分かれへん。」

何度も言われた。でも救いはその後に、それでも

「よう見て東京の人にきちんと伝えてきてな。」

「遠い所から来てくれたこと絶対忘れへんからな。」

「東京に地震があったら今度はうちらが助けに行くからな。」

という言葉。

神戸のことに限らずボランティアをするときには、感謝されること、賞賛されることを求めないようにいつも自分に言い聞かせている。でも、「ありがとう」ということがこんなにもエネルギーになる。いつもいつも形になって返ってくるわけではなくて、むしろそんなことは少ない。だけど、こういうことが何日も自分を支える。絶対に理解はできないけれど、想像力をたくましくして頑張ろうと決めた。

それに神戸の人だって人を思いやることのできる人間。

感謝を形にしたいと思ったり、ボランティアを気遣ったりしてくれる人も多かった。避難所の余りのおにぎりを道端で座って食べているボランティアの姿などは、むしろ地元の人々の同情を買ったりもしていた。

もちろん限界の生活をしている人には、感謝してもらうどころか、こちらから励ますことさえもできずに、只々邪魔にならないようにしていることが精一杯だったりする。でも、もし感謝したい、お礼したいという人がいたら、本当に有り難く受け取りたい。そういう時は、ボランティアの在るべき姿にしばられている自分にはっと気付く瞬間でもあった。私が二番目に行った組織は非常に整備されていて、あらゆる人に門戸を開き、その人達に一定のマニュアルを叩き込み派遣するという形で、大変効果的に運営されていた。ただ、仕方がないこととはいえ、大きな組織が沢山の人をまとめようとすれば、どうしても硬直化する時もある。例えば、ボランティアが組織の決まり通りに金銭のお礼を拒否したことで、心苦しく感じて二度とボランティアを頼まなくなってしまった被災者もいる。組織の末端として、その活動を豊かにするために、もっと自然な柔らかい心を持ちたいと感じることもあった。

*

*

二つの組織を経験したことはとても勉強になった。一つめの、基本的にセルフヘルプの

団体である組織が、被災者とボランティアの橋渡し役として外に開かれたときのパニックは想像通りのもの。結局、後から応援にやって来たボランティアのプロたちの存在が、何百人もの熱意の行き場を作ることになる。その過渡期に右往左往して何もできないで終わるのに抵抗があって、私たちは組織を移った。そこで完成版の組織を見て、そしてそこに至るまでの苦労も知り、ああ、やっぱりそういうものだ、と。そんな物を作り上げる大変さも大切さも本当によく分かった。

私みたいに、ぱっと数日やって来た部外者を役立たせてくれる組織は本当にありがたい。被災者からの要望を集めて分類して振り分け、ボランティアの意思統一をして相談にもってくれる組織。ボランティアは経験しながら成長していく部分は確かに大きいのが、それはボランティアされる側の我慢、犠牲の上だったりする。障害者とか福祉施設の人とか、日頃から社会に働き掛け、ボランティアを育てていくことに一役買いましょうという人ならともかくも、極普通の、ボランティアされるなんて夢にも思ったことがなく、しかも連日の「何かお困りのことはないですか」コールにうんざりしている被災者たち。そんな中に「何かやってこい」とボランティアを放り出すのは無茶な話だと感じる。プロフェッショナルの存在次第で、ボランティアは善にも悪にもなる。

とはいっても、誰もがボランティアできる受け皿を作るとともに、ボランティアをする人自身が最低限の常識や判断力を身に付けている必要がある。学校のようなある程度大きな避難所は、割合きちんとした運営組織があるが、小さなお寺の住職とかマンションの管理人は本当に極限のように思えた。仕事は確かにあるはずなのに、入れ代わり立ち代わりやって来るボランティアたちをどう指示していいのかわからない。頭が回らない。その中でボランティアが自分で仕事を見つけて動くには、普段から自分の生活の自立ができている人でなければ難しいと感じた。

*

*

ボランティアを手放しで素晴らしいことだとは言わないけれど、随分と皮肉っぽく捉えられることが多いと感じる。特に、全く経験のない人、そして逆にあるレベルまで到達している人。自分自身がボランティアとして相応しく行動できないから余計に感じるのかもしれないが、ボランティアに対して、自分はその偽善のからくりを理解しているのだというように冷めた目で見える人。でも、きつこういったことに対峙したときに、自分の成長のため、自分の満足のためといって独り善がりであることができない状態になる。本当に全神経を集中して相手を理解しようとしなければならなくなる。その結果、自分の成長や満足に返ってくる。

だから、自分はとても単純に考えたい。

人間には人を思いやる気持ちがある。人を助けたことを嬉しく感じる心がある。

それが独り善がりにならないように、自分の善意が一番よく生きるように、冷静さや指導してくれる人を持っていればいいと思う。

学生は徹夜が好きで語り合うことが好きで、肉体労働も好き。そんなタフな若者は結構大きなエネルギーになるけれど、それが少しずれると何かを一生懸命やっていること自体

に青春を感じ、一番大事なことを見失ったりもする。精神的な疲弊はもちろんのこと、肉体的な疲労も正常な判断を妨げることも大いにあるので、それをさとしてくれる人や休息は大事なことだ。

*

*

この時の自分は、時間の融通がきいて多少の無理はきく年齢、という程度の存在だったので、もっと社会での経験とか判断力を身に付けてできることならやり直したい。でも、自分の中では良くも悪くも忘れられない経験になったはず。とりあえずは、ずっとこの経験を心に留めておくことを目標としたい。

5. 高橋さん

『今私にできることは・・・』

日本中を揺るがせた阪神・淡路大震災から、もう一年以上が過ぎた。

被災地に赴いた数多くのボランティアの一人として、私も神戸で一週間の時間を過ごした。今でも、あの体験を振り返ると、神戸での日々が脳裏によみがえってくる。私が神戸で得たもの、感じたものは、本当に大きく、自分にとってこの上なく貴重なものとなった。

私がかかわったボランティア団体は、地震とともに誕生し、手探りの状態のなかから、常に“ボランティアとは？”“自立とは？”という問いを自分たちにぶつけながら、歩んでいった。そこから少しずつ成長し、現在も人とのつながりを大切にしたい、地域に根差した活動を続けている。

参加した当時は何かと「自立」という言葉が叫ばれていて、被災者が自立できるように、ボランティアはそこを支えていく、本人の自立の手助けをする存在として、その役割が期待されていたように思う。私もこの思いのもとに、目の前のことに精一杯携わっていった。

私の手元に送られてきた最近の会報には、こんなスタッフの声が載っていた。

「地震によってできた心の傷は決して消えはしない。傷とは死ぬまで付き合わなくてはならない。ボランティアには、“傷を消してあげよう”などという妄想を抱いて来てほしくない。」

「“自立させなければいけない”と考えている傲慢なボランティアが多いが、本当に必要なのは、自分と同じ目の高さで同じ方向を向くボランティアだ。」

これらの言葉を読んで、一瞬ドキリとした。果たして私はどうだったのだろうか、と。相手の目線で周りを見ようとしていたのだろうか。神戸に住む人たちの心に土足で踏み込んではいなかったのだろうか。

授業の聞き取りで、「なぜ神戸に行ったのか」と問われたとき、「自分のために」と私は答えた。この考え方は自己満足意識と紙一重に位置するとも言えるかもしれない。しかし私は、自分のためにボランティアをするという思いをもつことは決してマイナスにはならないと思う。自分が動けば、その分だけ返ってくるものがある。それは喜びかもしれないし、あるいは失望かもしれない。さまざまな感情が生まれてくる。そうした経験は、次のボランティアへとつながるものであるし、また、自己を見つめる契機となる。ボランティアも、相手とともに成長していく存在なのだ。

私たちの学科で作った呼びかけのビラの見出しは、「今、私たちにできることは…？」であった。この“今”は終わってしまった過去のことでなく、今この瞬間も、これから

も続いていくことなのだと思う。私が神戸で多くの人たちとともに過ごしたという事実は確かに存在する。震災の記憶が色あせないようにすること。被災地に目を向け続けること。そして、私自身への“ボランティアとは？”という問いかけを続けていくこと。今私にできることは、そういうことだと思う。

6. 中島くん

『神戸と東京とのほざまで一長期支援のために思うことー』

震災が1月で、僕が神戸に行ったのが5月、インタビューをしたのが6月だったので、ほぼ1年がたった。報告書をまとめるという話は聞いていたが、なかなか協力することができずに今日になった。報告書のほぼ出来上がった状態のものに目を通させてもらい、いま考えることを書かせていただく。

●報告書をまとめるということ

ボランティアをどう捉えるかということは、答えが1つではないと思う。社会的な意味にウェイトをおく人から、個人の体験ということを重視する人まで広がりがあると思う。また、非日常的な空間が見つけれられない若者が、昔の祭りが持っていたような異次元の空間の体験をいくらかは求めて多く集まったという分析もあるくらいだ。

個人の中で忘れ去られてしまう可能性のある経験を、報告書といった形でまとめることは、本来ばらばらに存在する個人の経験を共有するために非常に有意義なことだと思う。神戸に何らかの形で関わった人、95年度の東京都立大学の社会福祉調査論の授業に出ていた人に限らず、今後、何かの活動をまとめようとする人、多くの人に関わる問題に携わろうとする人にとっても示唆するところの多い資料である。

●調査論の授業の一環としてのインタビュー

授業の中では面接の実習という位置づけがあった。小田さんのインタビューをするにあたって、質問項目は準備したが、途中から自分の体験を多く話してしまっていて小田さんの経験を聞き出すという本来の目的からずれそうになることもあった。3人でインタビューしたので、話がずれそうになったら誰かが引き戻してくれた。1対1であったら、この3分の1もきくことができなかつたように思う。

●神戸での出来事

小田さんの話は本文の中で紹介していただいているので、私としては自分の出会った人たちと、1年後どう思っているかについて書かせていただきたい。

私が神戸にいったのは5月。ゴールデン・ウィークのことで、緊急救援から長期的な復興支援に多くの活動が移行しつつあった。そういう意味では本文、また資料の中で紹介されている人たちの話と少し性格が違うように思われる。

お世話になった長田区の西神戸YMCAでは、生活情報の提供、仮設住宅での協力、一人暮らしの高齢者のところに食材を運んだり、家屋の応急処理、引っ越しの手伝いなどをしていた。また、倒壊した家屋の割合が非常に多い新長田駅周辺に、地元の人が戻りつつあった頃で、お年寄りのいる家庭が戻っているのではないかと、聞き取り調査に回ったり

もしていた。そういう継続されてきた活動に参加させていただいた。

仮設住宅へは、布団乾燥器を持って回り、布団を乾燥させている間にいろいろお話をうかがったりした。Fさん宅におじゃましたときは、震災当日家屋の下敷きになり、それ以来足が痛んで、自由がきかない。仮設住宅のドアはガラスであるため、中をのぞかれて落ちつかないので、カーテンの代わりになるものがほしいという要望をいただいた。

新長田駅北側の聞き取り調査をしているとき、再開発のため、地権者に追い出されるのではないかと恐れて半壊の住宅でがんばって生活しているおばさんの話を1時間ほどきくこともあった。

東京に帰ってすぐの頃によく思いだしたことは、YMCAのボランティアはみんなYMCAと書かれたゼッケンをかけていたのだが、屋根の修理を依頼された家に向かっている途中、おっちゃんに「今ごろ何しにきたんや？」と罵声を浴びせられたこと、ゴールデン・ウィークということもあって全国から主に社会人を中心に何かできることを探して神戸にやってきた人たちと一緒にあったのだが、私が社会福祉の学生ということで、勉強の教材として見に来たのかという感想を持たれたということだった。

いま、時間がたって改めて考えることは、長期的な支援、特にYMCAがやっていたような、話し相手としての訪問活動などは、やはり、地元にいるということが必要だということだ。日常の中で、自分の身の回りでできることをする。そういう人が増えることが、震災後のケアでも重要になると思っている。

<編者注> この中島君は本書 6 ページのボランティア経験の話者一覧に入っていない。彼にインタビューした学生のレポートが未提出に終わったためである。

あとがきにかえて

—本書の作成経過と担当教員のかかわり—

1. 大震災発生から、体験者インタビューの設定まで

95年1月17日の震災発生の際、私は長期海外出張で中国の北京に滞在中であった。情報がごく限られたものであったことと、自宅への連絡で、親族や、身近な知り合いには大きな被害を受けた者がいない様子であることを知ったこととによって、私自身としては、気にしながらも、帰国するまで多少距離を持ったままとなり、日本国内で膨大な量のマスコミによる情報の中にいた状態とは、かなり違った位置にいたことは否めなかった。

したがって、当初からの学生たちの動きについては知らないままであったが、本書の中にも書かれているとおり、同僚のひとりが担当した社会福祉援助技術論の授業時間などで、学生どうし、何か支援活動をすべきではないか、自分達に何か出来ることはないか、まわのひとにも呼びかけをしよう、といった話し合いもあったようであり、テレビ等で現地の深刻な状況とボランティアが全国から駆けつけていることを知るにつけて、学生たちの中での行動への構えが高まって行ったと思われる。他方、時期的には年度末の試験やレポート提出が迫っており、それをなげうって出かけるということは躊躇されたところでもあった。結果的に、本書で取り上げられた経験者たちの大部分が、年度末試験を終えた2月半ば以降に現地入りし、1週間から1カ月程度現地での被災者支援活動に参加したのである。

4月からの新学期に入り、私は同僚の大島巖と組んで社会福祉調査論の授業を開講した。調査論の授業計画としては、他の授業の分担などの関係で、初めの3ヶ月ほど私が前座をつとめることになり、社会調査の概要と歴史、調査の種類と基礎的な用語の解説、および調査法のなかでの事例的方法とその中心的なデータ収集法である面接法あたりまでを私が分担する。それ以後は大嶋が、統計的調査の方法、社会統計学の初歩、一般市民を対象とする福祉意識の調査の実施と、その後のコンピュータ集計を含むデータ処理を教えるというものであった。

一方、震災ボランティアに行った学生たちの間では、体験を語り合うこと、行かなかった人にも伝えること、自分たちなりのまとめをしてみるなど、などの問題意識があり、5月には学生たちだけの報告・交流会ももたれたが、十分な盛り上がりは持てず、その後の発展的な進め方についての合意を作り上げるまでには行かなかったようである。

私としては、こうした学生の自主的な活動を激励しつつ、体験をまとめる作業について、学生だけで行うのがむづかしいなら、調査論などの授業を通してまとめるものに、合流させる形もありうると考えたのである。社会福祉調査論の授業は、従来、初めの2ヶ月ほどの講義の後は、調査技法やコンピュータ使用によるデータ処理などの、実技訓練を重視したカリキュラムにしてきたので、学生の震災ボランティア経験というトピックを織り込むことはそれほど無理なことではない。そこで、私の担当期間の終盤に、事例的調査方

法を扱うところで、従来はライフヒストリーを課題としてきたものを変更して、震災ボランティア経験者へのインタビュー（非構造化面接）を実施することにしたのである。

直接的な準備としては、聴き取り調査実施の前の週の授業日までに、最低限の予備知識として、吉沢英子の論文（「ボランティアの原則と社会福祉の動向」『月刊福祉』1987）と、神戸YWCMの通信にのったボランティア体験の報告（「神戸での体験－ネコの間報告－」）を配布して全員が読んでおくよう指示し、授業時間にはグループ討議で、災害ボランティアに行った学生へのインタビューとして、どんな内容を聞きたいか、聞く必要がある項目や、注意点はどんなものか、などを整理した。そして6月7日の授業時間に、ボランティア体験者を招き、受講生のなかの経験者も語る側（被調査者）に回って、残りの受講生が2人一組に分かれて、それぞれインタビューを実施したのである。面接時間は1時間と定め、その範囲でどこまで聴き取りができるかを試みるという設定にし、テープによる録音記録を残すことにした。さらに受講生であるボランティア経験者の5名は、インタビューする側にも立って見るべく、2組に分かれて、授業時間外に別の経験者に対して面接を実施したのである。つまり、本書で扱われた資料は、事例的な聴き取り調査の技法を学ぶための面接の練習としてなされたものである。調査実習として時間をとったうえで、テーマを定めて取り組まれたものではないので、内容的に掘り下げるための準備は不十分なものとどまっていることは否めない。

インタビューの様子は、本書の第2部とした3つのケースに示されているとおりである。受講生には一部社会福祉学科以外の学生と、聴講生も含まれるが、大部分は、対象者・面接者とも同じ学科の学生同士である。ただし、それほどよく知り合った仲間というほどの間柄でもない。聴き取り側を2名ずつに割り当てたのは、もっぱら対象者（話者）の数が限られたことによる。面接調査の練習としては1対1で行うことが望ましいので、従来の授業では、学生が依頼できる老人などに授業外に面接してそのライフヒストリーをまとめてみるやり方を取っていた。今回のテーマでも、時間的な余裕があれば、学内の他学科の学生のなかの経験者を捜すとか、他大学の福祉学科の学生のなかに対象者を募るなどの方法もありえたであろう。提出されたレポートでは、「二人で質問したので（聴く側が）緊張しないで済んだ」といった感想が多かった。ただし、ひとりのみがもっぱら質問役に回ってしまったとか、自分も質問しなければと思ったが、話に割り込むきっかけがつかめなかった、などの反省も出されている。さらに問題だったのは、事前のグループ討議は有益ではあったが、面接にあたる者の組み合わせが当日になって変更されたこともあって、二人の間での事前の打ち合わせの時間がほとんど持てなかった点であった。受講生の出欠が一定していなかったことが直接の原因である。

また、とりわけ聞き手の側にも震災ボランティアの経験者がいる場合に、聴き取りに徹するというより、体験の交流といった場面が作られたことは、今回のセッティングの特色でもあり、「調査論」としては反省点になるところでもあった。

2. インタビュー結果に基づく作業レポートの作成

ともあれ、こうして10ケースのインタビュー資料が収集され、受講生には、各自のインタビューにもとづいて、以下のような課題での作業レポートを作成することが課せられたのである。

福祉調査論レポート課題 (原文を一部省略)

レポート課題： インタビュー（事例調査法）まとめ
インタビュー課題： 「学生の阪神大震災ボランティア体験」
形式： B5版タテ長 横書き 字数：400字詰め20枚程度

まとめ作業のポイント：

- *少なくとも1回は自分の行ったのインタビューのテープを聴き直すこと。
- *レポートとしてまとめる課題は大きく言って2つある。

第1は、調査の内容として、「震災ボランティア体験」をどのようにまとめられるか。なにが語られ、どんなことが分かり、そこからなにが考えられるか。

第2は、調査の方法としてのインタビューという形式がどのような手順で行われ、準備段階、実施段階、後の整理の段階で、どのような問題点や工夫が考えられたか。事例調査という方法でのまとめ方にはどんな強みや弱みが考えられるか。

- *レポートとしてのまとめ方、組立て方は各自の判断でよいが、上記の2つの課題との関連で、内容的に、次のような諸点は含まれることになるだろう。

1. インタビューに至る経過： どんな準備過程があり、予備知識を持ち、ねらいはどのあたりにあったか。グループ討議などでどんなポイントが出ていたか。

2. インタビューの内容・結果：

- a) 話者についての基礎的な情報（氏名、性別、学年、これまでのボランティア経験など）
- b) 聞いたこと、語られたことの概要（活動参加の経緯やルート、災害過程の中での時機と場所の限定、現地の状況と活動内容、その上でどんなことが話題になっていったか）。
- c) ハイライト（1つまたは複数）（話者の体験として、あるいはインタビューの印象として、このインタビュー記録で残したいところ、他の人にも伝えたいところ。できるだけ生の言葉を採録して再構成してみる）。

3. 考察：

- a) 話者の体験を通して語られたことから、なにが得られ、どんなことが考えられるか。
- b) 調査方法としてのインタビューとそのまとめ方について、どんなことが考えられるか。(今回のインタビューのプロセスで、良かった点反省すべきこと、さらに工夫できる点など。2人でインタビューしたこと、テープ記録の取り方とその利用について。このインタビューをさらに災害ボランティアの調査として発展させるとしたら、どんなことが考えられるか。また、あなたの関心のある別のテーマで別の対象者にインタビューする場合に考えるべきことなど)

結果的に面接に加わった20名のうち、18名からレポートが提出されたが、1ケースについてレポートが出なかったため、本書で取り上げる資料となったボランティア学生の数は9ケースということになった。

3. 演習IIでのとりまとめ作業

後期を迎える頃までかかってレポートが出そろった段階では、すでに同僚にバトンタッチされ、社会福祉調査論の授業は別の課題に進んでいるので、この授業の延長としてインタビューのまとめの作業を継続することには無理がある。そこでふたつの可能性が残った。ひとつは、上記の課題レポートを全部又は一部載せる形で報告書を編集すること。第2は、さらに有志を募って、このインタビューを素材としてさらに深める形でまとめなおすことである。私は後者を選び、同じく私が担当した社会福祉学演習IIの授業の後期の課題として取り組むことにしたのである。前期からの受講者は、ボランティア経験者であった2名であったので、彼らを核に、参加したい者にはドアを開けておく形で第2ラウンドの作業が始められた。

まず行ったことは、調査論のレポート提出者と、インタビューを受けたボランティア経験者たちに、インタビューテープ(数例については、すでに逐語記録に起こされていた)と提出レポートを、まとめの作業のための資料として利用することの了解を得ることであり、あわせて、第2ラウンドの作業への参加者も募るということであった。資料として利用させてもらう件は容易に了解が得られたが、まとめの作業への参加呼びかけに応じたのは1名にとどまった。調査論のレポート提出者たちは、その後の課題に追われる者が多く、インタビューを受けたボランティア経験者たちの多くは卒論に追われるという時期であったことによる。こうして、計3名の学生が最終的に報告書の作成をめざして、改めて各自のテーマを定めて、とりまとめ作業に取り組んだのである。調査研究ということからすれば、この段階で、まとめのための視点にもとづく補充的な面接がなされることが望ま

しいが、今回は、部分的な事実確認をしたにとどまっている。

4. 本書の編集と構成

以上のような経過で、本書の中心部分が出来上がっていったわけだが、私には、ボランティア活動や災害福祉について論じたり指導できる実績はないので、学生諸君とたびたび議論はしたけれども、彼らに助言したのは考え方の論理性や、首尾一貫性、資料の扱い方といった次元にとどまるものである。他方、本書の構成と編集については、私の意見で大筋が決まっている。第2部としてインタビューの状況をそのまま載せることにしたことは、今回の震災ボランティア体験が、学生同士の間で、どのように語られ、聴かれ、そして受けとめられたかを記録しておくためにも貴重なことであると考えたからにはほかならない。第3部としてボランティア参加学生の1年後の感想を求めたことは、当初から私が期待していたが実現しきれなかった、彼ら自身による自主的なまとめの作業の変形ともいえるものである。率直に書いてくれた一人ひとりの思いを読むと、彼らにとって重い経験であったことが改めて実感されるとともに、彼ら自身で自らの体験をまとめ直すという作業は、困難であったろうということも知られるのである。「社会調査」という客観化のプロセスの意義は、こうしたところにもあるということ、蛇足ながら強調してよいだろう。とはいえ、この部分などは、とりまとめの最終段階になって追加されたものである。このように本書の編集と構成は、悪くいえばどろなわ式のところもあるのだが、私としては、3名の諸君のエネルギーに押されながらここまでたどりついたという感が深い。

5. ご支援いただいた方々への謝辞

本書がこのようなかたちを取るまでには、そのほかにも色々な方々のお世話になっている。まずこうした作業をするに当たっては、他の大学ではどのような取り組みがなされているのかについても知っておきたいと思った。これに関しては、愛知県立大学の大和田猛先生が、同大学での取り組みと、社会福祉教育セミナーに関連した資料と情報を提供して下さいました。同志社大学の小山隆先生と大阪府立大学の牧里毎治先生からは関西の大学の学生たちの取り組みについて知らせていただき、関西福祉系大学ボランティア連絡会の事務局からも資料を頂いた。また、大阪市立大学の秋山智久先生のグループからは、震災ボランティアに関する立派な統計的調査の報告書をお送りいただいた。十分に活かし切れたとはいえないが、こうした情報や激励が、作業を進める上での大きな励みになったことを、この場を借りてお礼申し上げたい。時間はかかってしまったが、私たちのまとめをお戻しできることをうれしく思っている。

社会福祉学科の同僚たちには、この報告書のとりまとめの意義を認めて、印刷費の割り当てを認めてもらったばかりでなく、多くの有形無形の支援を受けている。また、社会福祉調査論の授業のティーチング・アシスタントであった大学院生の南山浩二君には、イン

タビュ-の設定と実施についてサポートしてもらったこと、さらに、修士論文の課題として震災ボランティアの問題に取り組んでいる菅磨志保さんには、ドラフト作成段階で、レクチャーとコメントを引き受けてもらい大変有益であったことも、謝意を込めて記しておきたい。

石原 邦雄